

宮崎医大整形外科

# 同門会誌

田島直也教授退官記念号

第 14 号

平成15年4月

宮崎医科大学整形外科学教室同門会



田島直也教授 退官記念会 平成15年3月22日



平成14年度 宮崎医科大学整形外科学教室 新入教室員歓迎会 平成14年5月25日 於：魚よし



平成15年度 宮崎医科大学整形外科学教室同門会忘年会 平成14年11月30日 於：宮崎観光ホテル



会 長  
河 野 雅 行

## 田島教授御退官と 新たな旅立ちを祝して

昨年から逐次施行された未曾有の医療費改悪で整形外科の保険点数が大幅に減点されました。再診科とりハビリの逡減制導入が最も影響が大きく、ある調査では10～15%減とのデータが出ております。過去には普通の「お医者さん」であれば座して食えた時代もあったようですが、現在の世間の認識では医業も生業の一つで他業種と何ら変わる所は有りません。政治や経済に関係無くひたすら国民に良い医療を行えばそれで良い時代は過去のものとなっしまい、医師のみが世間から乖離することは許されなくなっております。今後さらに本格的な医療費抑制・削減案が提出されるとの噂も聞こえて来ますし、特区構想や株式会社の医療への参入も看過出来ない問題です。この文章がお手元に届くころには窓口3割負担が問題になっていることでしょうか。かくなる難局に立ち向かうには、我々が一致団結して他科や日医とも歩調を合わせ地域医療を守るべきであると考えます。

何時かは来るべき事態ではありますが、いよいよ田島教授が御退官されます。先生に接していますといつまでも若さを保っておられるし、何時の間にそんな時間が経ったのかと今更ながら驚いています。冷静に計算してみますと初めてお目にかかってから20数年の歳月が流れていることになります。宮崎に着任されて直ぐより、医大前の居酒屋で「\*\*会」と唱して集まったり、早朝から医大グラウンドで野球練習で走り回ったりと、御一緒させて戴いたのがつい数年前のような気がします。只、当時の私は開業準備中で忙しく、あまり頻繁には参加出来なかったのが心残りでした。その後、外部からお付き合いする立場になりましたが、折有るごとに親しくご指導戴いております。御在任中に挙げられた学問に関する多大な御業績は業績集で詳細に報告されると思いますので、学問以外の多々有るエピソードの内から最近の事例の一つを



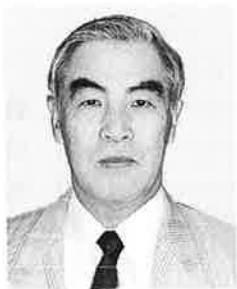
取り上げますと、日本医師会記念野球大会で田島監督の元に宮崎県チームが全国制覇を成し遂げたことが挙げられます。真夏の炎天下、福岡での地区予選に始まり、秋に憧れの東京ドームで緊張しながらも準決勝、決勝と勝ち進んだのが強烈な思い出です。教授に於かれても参加された先生方にも良い記念に成ったのではないかと思います。教授御退官は事務的見地からすれば、教室の長い歴史の中で的人事異動のひとつまに過ぎ無いとの取り方も出来るかも知れませんが、やはりトップの交代ですからそこまで無機質な反応では済まないようです。しかし、一つの時代の幕引きは、当事者にとりましても観客にとりましても新しい時代の幕開けを告げるものであるとも言えます。そのように捉えれば田島教授におかれましても、今まで教授であったが為に出来なかった事が出来る、新しく飛躍をされるチャンスとも考えることが出来ます。先生におかれましては、ますます御元気で整形外科、スポーツ医療の先達として今後共に我々を御指導戴きますようお願いいたします。

田島先生の新たなる旅立ちの幸多からむ事を祈念しますと共に、内助の功で先生を支えて来られた奥様にもエールを送らせていただきます。

2002年12月



## 巻 頭 言



田 島 直 也

宮崎医大整形外科教室同門会誌も今回で14号の発刊となりました。私は教授職として今回が最後となり、また宮崎医大も2003年10月宮崎大学との統合が予定され、宮崎医大としては今回が最後となり、一抹の淋しさと共に一つの時代が終わった感無量のものがあります。

私が宮崎医大に赴任したのが昭和54年11月であり、教授職を拝命したのが平成2年4月で、宮崎医大に約23年奉職したことになります。思い返せば20数年、私なりに精一杯、全速で走り続けた気がします。この間、学会開催のこと、野球大会のこと等、走馬灯のように思い出されます。これまで私を支えてくれた教室同門の先生をはじめ教室職員、コメディカルの方々に心から御礼を申し上げたいと思います。

さて、2003年10月には宮崎大と統合し、その半年後2004年4月から独立法人に移行します。どちらも全く経験のないことで、どうなるか分からないのが本当のところですが、現在、病院再開発のまとめをしていますが、診療は臓器別主体で高度先進医療が中心になると思われます。また第三者評価が入り、それぞれ経営努力が必要になり、人事、給与も法人独自で決定されることとなります。教授は勿論、助教授、講師も任期制でそれぞれ評価が行われることとなり、研究実績が関わることになると思われます。

さて“整形外科”をとりまく環境はきびしく2002年の診療報酬の改正では整形外科に対しては特にきびしい面もありましたが、今後、代替医療従事者増加が予想されます。また従来の整形外科の領域が他診療科との境界領域になることも考えられます。しかし、高齢化と共に骨関節の外傷障害は増加しています。整形外科医として今後どうすればいいか、私は整形外科全般を研鑽習得した上で整形外科専門分野のspecialistになることだと思えます。個人個人がまず①将来のvisionをもつ、②中長期の計画をたてる、③計画を実行することが肝要であります。

現教室員には、将来、宮崎医大整形外科教室に入ってよかったと述懐できる良医になってもらいたいと願っています。

# 目 次

田島教授御退官と新たな旅立ちを祝して	河野雅行	1
巻 頭 言	田島直也	3
2003年同門会幹事あいさつ —田島教授の思い出—	岡田光司	6
田島直也教授のご退官によせて	玉井達二	8
ごあいさつ	木村千仞	9
田島先生ごくろう様でした	伊勢紘平	10
田島教授の思い出	武内晴明	11
田島教授の Happy Retirement にあたって	桑原茂	13
田島直也教授の思い出	帖佐悦男	15
田島教授と手術の思い出	小牧一麿	19
教授はいつもトップギア—	押川紘一郎	20
おつかれさまでした	渡辺雄	22
おもいで	山口一郎	23
私にとっての田島助教授のおもいで	川野啓一郎	25
ごあいさつ	長鶴義隆	27
田島教授との思い出	佐藤信博	28
医局長時代の思い出	平川俊一	31
風を捲く	松本宏一	32
医局長時代の教授との思い出	川越正一	33
スポーツ医学	黒木俊政	35
田島教授のもとで —脊椎班・私見—	久保紳一郎	39
田島直也先生のご退官にあたり	園田典生	41
医局長時代の思い出	黒木龍二	43
田島教授との思い出	工藤勝司	45
田島教授とスポーツ医学と私	樋口潤一	46
教授との思い出	末永治	48
田島教授お疲れ様でした	松岡知己	49
田島先生との思い出	飯千明	50
教授との思い出(平成4年入局を代表して)	後藤啓輔	51
医局長時代の教授との思い出	渡邊信二	52
教授との思い出	川添浩史	54
教授との思い出	濱田浩朗	55
田島教授との思い出	山本恵太郎	57
田島教授との思い出	安藤徹	59
田島教授との思い出	有住裕一	60



田島先生との思い出	石田康行	61
教授と野球	池尻洋史	62
退官によせて	田島卓也	63
田島教授との思い出	益山松三	64
田島教授との思い出	市原久史	66
教授との思い出	岡田麻里	67
田島教授との思い出	公文崇詞	68
教授との思い出	後藤英一	69
教授との思い出	小蘭敬洋	70
田島先生との思い出	上通一師	71
田島教授との思い出	勝嶋葉子	72
田島教授との思い出	福嶋秀一郎	73
教授との思い出	甲斐糸乃	74
田島教授との思い出	黒木修司	75
<b>学会・研究会</b>		
第25回日本臨床バイオメカニクス学会(平成10年11月)担当責任者として	川越正一	76
第48回西日本脊椎研究会(平成9年11月)を担当して	鳥取部光司	77
第30回日本側彎症学会(平成8年11月)を担当して	作良彦	78
第5回日本リハビリテーション医学会九州地方会(平成11年2月)	黒木龍二	80
<b>野球歴代キャプテン</b>		
西日本整形外科親善野球大会の思い出	中村誠司	81
野球部と田島先生	黒木隆男	82
キャプテンの思い出	柳園賜一郎	84
野球歴代キャプテンの思い出	黒木浩史	86
Review of Tajima's baseball ~ミスターとの思いで	松元征徳	87
野球って	矢野浩明	89
野球部キャプテンの思い出	福元洋一	91
野球大会2軍戦記	山本恵太郎	93
<b>同門会ゴルフ・テニス報告</b>		
平成14年同門会ゴルフの報告	戸田勝	95
第5回同門会テニス大会	松本英裕	96
<b>新入会員自己紹介</b>		
	野崎正太郎	97
	甲斐糸乃	97
	黒木修司	98
	山元美智子	98
	船元太郎	99
<b>教室同門の研究業績</b>		100
<b>編集後記</b>	福田健二	119



## 2003年同門会幹事あいさつ — 田島教授の思い出 —

幹 事 岡 田 光 司

今回は田島教授退官記念特集号として企画されており、様々な記事の掲載があると思いますが、ここでは主に同門会の創設に関連した田島先生の思い出と会のこれまでの経緯について若干述べてさせていただきます。

1979年（昭和54年）1月に木村教授就任、同年11月に田島助教授就任ということで、名実ともに宮崎医科大学整形外科教室が発足した訳ですが、翌年からは早速田先生の強力な指導下、毎週水・土の早朝野球練習が始まり、1980年（昭和55年）8月には野球大会（山口）初参加となりました。真新しいユニフォームには宮崎の「太陽と緑」と因んで“Sun and Green”の先生の提案による明るい躍動感あふれたチーム名が記されました。教室外の高鍋の山口先生を加え、9名ぎりぎりのチーム人員で、結果は散々でありましたが、この細やかな結果が実は同門会の事始めなのではと現在になって思うところです。

そして10数名の教室員による教室造りが慌ただしく進められる傍ら、当時医局長格の田島先生を中心に同門会設立に向けての作業が行われました。各大学の同門会規約を取り寄せ、大学門前の食事処の「きわら会議」などで検討を繰り返して、1981年（昭和56年）10月に同門会を設立（会員数10数名）木村会長就任の運びとなりました。その後はさしたる活動はなかったのですが、教室も内容的、人数的に充実してきたこともあり、1988年（昭和63年）1月に田島先生を編集委員長として待望の同門会誌（会員数51名）をようやく創刊することができました。ご承知の会誌の表紙のデザインは先生発案によるもので、緑を基調とした大胆な構成はいかにも先生らしいと当時も納得したものでした。会誌の発行、総会開催（毎年11月の最終土曜日）など、同門会の実質的な活動がこれから開始したと言えます。1990年（平成2年）3月に木村教授が退官され、河野先生が同門会会長に就任、4月には田島教授が就任となりました。そして教室の発展と共に、会員増など会は順調に経過し、現在（会員数171名）に至っています。

1970年代の日本経済高度成長の波に乗り宮医大が新設され、その高度成長期の最期の1980年代に同門会が創設された訳ですが、それには当時助教授の田島先生が大いに貢献されたのは前述したとおりです。一方、1990年のバブル崩壊の後の経済不況の中、介護保険導入、整形外科診療報酬減、また最近では医大・社保病院・厚生病院等の統合・独立法人化など、この10数年間まさに医療情勢も激変してきました。田島教授の退官される2003年（平成15年）は同門会にとりましても重要な節目であると考えているところです。

最後、以上を年代的に簡単にまとめましたのでご参考まで。

- 1973年(昭和48) 玉井教授医大設立準備委員就任
- 1974年(昭和49) 6月 宮医大創設
- 1976年(昭和52) 11月 医大附属病院開院(教室員6名)
- 1979年(昭和54) 1月 木村教授就任  
11月 田島助教授赴任
- 1980年(昭和55) 8月 野球チーム結成、山口大会初参加(同門会10数名)
- 1981年(昭和56) 10月 同門会設立、木村会長就任
- 1988年(昭和63) 1月 同門会誌創刊(同門会員51名)
- 1990年(平成2) 3月 木村教授退官、河野会長就任  
4月 田島教授就任
- 2003年(平成15) 3月 田島教授退官(同門会員171名)





## 田島直也教授のご退官によせて

玉井 達二

田島直也先生が教授に就任されたのは、つい先日のように思っておりましたのに、もう定年を迎えられると知って、月並みの言葉ですが、本当に月日の経つ早さを改めて感じております。先生のご退官になるのはまだ早いと思うのは、私だけではないと思いますが、これからもまた、異なった立場で大活躍される一つの儀式と考え、お元気で定年を迎えられたことをお慶び申し上げます。

先生は長崎大学の整形外科教室の教授 永井三郎先生の下で研鑽を積まれ、また私にとって新潟医科大学の先輩である長崎大学の生理学教授 佐藤謙助先生のご指導も受けられました。そしてまた昭和45年から46年まで英国に留学され、私もご指導を頂いた Professor Sir Ludwig Guttmann のおられた Stoke Mandeville Hospital で学ばれたと知り、同じ病院・同じ精神的環境の下で過ごされたと言うことで、大変親しみを感じております。

先生が心豊かな医学者・指導者であり、爽やかなスポーツマンであることは、全ての人々が認めておられるところであり、また、私が申すまでもなく、先生は全国規模の脊椎疾患・生体工学・スポーツなどに関する数々の学会の会長をされ、また幅広い分野で活躍されるなど、その業績は枚挙に暇がありません。

このように数多くの全国規模の学会を主催されたと言うことは、夫々の学会の方々が如何に先生に信頼を寄せておられるかと言うことのみならず、教室・同門の方々の先生に対する敬愛の念が、どんなに素晴らしいかを物語っていると思っております。

教官としての先生は、同門会誌の中で「医学部の教育に関してオスラー先生がすでに19世紀にマシュー・マーノルドの言葉として、教師（教官）の機能とはこの世に存在し教える最高のものを教え、かつ伝え広めることであると述べ、医学部の教師（教官）には重い責任があり、医術は人間の苦しみを救うため、全世界に共通する普遍的なものである」と記され、「私も……全力投球をし、……」と、その決意を述べておられましたが、それを実践され、多くの立派な人材を世に送り出されました。その歩まれた道、歩まれる姿に感服しておりました。

2001年日本医師会の野球大会では、宮崎医師会チームの監督として出場し、優勝されたと言うことを聞き、先生の人柄なればこそと大変嬉しく、大きな拍手を送りました。

教授の席を離れても、先生の医療・医学・福祉に対する人間としての情熱は、ご指導を受けた方々は言うに及ばず、先生との出会いを持った方々一人一人の心の中で燃え続け、次の世代、また、次の世代……へと受け継がれ、また、診療を受けた方々の心の中には、感謝の念が生き続けることと思っております。

定年を迎えられても、先生の大きな温かい手を求める人々は後を絶たないことと思っております。これからもご自愛の上、益々お元気で大いにご活躍下さいますことを、心からお祈り致します。



## ごあいさつ

### 木村 千 仞

昭和 30 年代後半以降、池田首相の所得倍増論や朝鮮戦争特需などで日本経済が上向いたあと、田中首相の日本列島改造論で 40 年代の昭和元祿で無医村解消の波にのった宮崎医大新設が着手されたのは昭和 49 年であった。その後、毎年少しずつスタッフ採用枠や教育・研究費が年次を追って増加され大学院設置まで数年を要し、昭和 55 年頃からは、田島助教授を迎えたあとは教室業績も教育・診療も軌道にのりだんだんと発展を続けて現在の如く充実発展したことは教授、医局員、同門各位の大きい努力の賜物と感謝申し上げたい。

斯様にして発展してきた教育・医局の在り方も次年頃から制度止（行政上）形が変わるとの話であるが、現行よりももっと充実した臨床実習（インターン）と経済補充ある訓練後の Specialist となれる場があれば異存はない。私の経験からも、入局 3 年後になると整形外科の凡そが判ってくるので段々慢心に陥り易くなるので、玉井教授から「プロ意識に徹せよ！」と忠告されたものであるが、未だに肝に銘じている。

昨年 5 月頃の新聞に新国劇の名優 島田正吾さん（83 歳）の句「八十は古い序の口冬若葉」を取り上げ、今尚「白野弁十郎」「夜もすがら検校」などをひとり芝居にして新橋演舞場で毎年演じて超満員の由、今 96 歳だが 99 歳まで演るのが夢だから頑張るといふ。大変なバイタリティと人間味溢れる冬若葉で、これぞプロ意識の最たるものであろう。健康で長生きの鍵は「プロ意識」の持合わせなのだろうか？私達は生きている間に沢山の師、先輩と出会い、多くの教訓が得られるもので、その一つ一つを大切に守って活かしたいものである。



## 田島先生ごくろう様でした

伊 勢 紘 平

田島先生がいよいよこの3月で退官される事となりました。本当にご苦労様でしたと、申し上げたいと思います。先生は昭和54年11月に長崎より赴任され、24年間の長きに亙り宮崎医大の整形外科を背負って来られた訳です。先生が助教授として着任された時には、私は既に宮崎医大を去っておりましたが、先生の着任の時に私に言われた言葉は今でもき記憶に残っております。「君が居ると思っていたのに。」というお言葉でした。当時、医局員の数も少なく、県内の各病院へ応援を出す必要があり本当に、今でも申し訳けなく思っています。その後私は熊本で臨床医として勤務をさせて頂き、平成2年に先生が、教授御就任と同時に先生の補佐役として大学へ戻らせて頂きましたが、今考えてみて、本当に補佐役としての仕事をしたのかどうか自信はありません。唯先生の猛烈なる力に引っ張られていただけのような気がしています。先生の一日をみていますと、朝は医局の誰よりも早く出勤され、教授室で仕事をされ、夜も遅くまでいろんな事をされていた姿が、目に浮かびます。またその間、教室内の事のみならず、対外的にも忙しく、本当に大変だったと思います。医科大学そのものが若い時でしたから、医局員が思っている以上に雑用に追い回されていた感じがしてなりません。このように忙しい先生でしたが、人に対する優しさは人一倍持っておられ、医局員の異動の時期には大変悩まれていました(医局の皆さんには余りわからなかったかも知れません)。豪放磊落という言葉があります。まさにそのものだったと思います。ひょっとすると先生は繊細そのものだったのか知れません。親の心子知らずといいますが、この紙上を借りてお詫び致したいと思えます。

とにもかくあれ、この春先生は退官なされますが、今まで培った人脈の中で、今後は忙しい人生でなく、余裕たっぷりの、ゆっくりとした整形外科の先達として、健康に気をつけられ、まだまだ先生に御迷惑をかけそうな医局員達に目を配って頂きたいと思っています。まとまりのない文になりましたが、最後に先生の今後の御活躍と家族の皆様の御健勝をお祈り致します。

本当に長い間ありがとうございました。



## 田島教授の思い出

武内 晴明

田島先生は昭和54年11月1日に宮崎医科大学整形外科助教授として就任されました。当時文部省の大学院設置基準を満たすためにどうしても整形の助教授のポストを埋めておかなければいけなかった事、また、脊椎外科の専門医がいなかった事より、木村教授が手弁当で全国を探しまわり、お願いされて宮崎へ来て頂いたように記憶しております。田島先生は温厚で人格がよく、礼儀正しい紳士であり（長崎市の良家のご息子とのことで、例えば玄関から上がられる時は靴を後ろ向きに揃えて上がられます）、学問に対しては非常に熱意があり、スポーツも万能（特に野球には興味を持っておられます、ただしゴルフのみはなぜか115程度）であり、何もいう事がない理想的な医師であり人物であります。このたび同門会から何か思い出を書いてくださいとの事でしたので2～3点の思い出を書きます。

田島先生が就任された当時のことでは、昔の中国の三国志という小説を連想しました。役柄は田島先生が劉備玄徳、2カ月後（昭和55年1月）に田島先生を慕って長崎より宮崎医科大学整形に入局されたのが、関羽役の渡辺 雄先生と、張飛役の山口一郎先生でした。この3人がどこで桃園の誓い（大学前の「きわら」かも知れません）をされたかは不明ですが、この2人が田島先生をよく補佐されておられました。ただし、この2人とも都合により田島先生を残して退局されましたが、このことについては私は少し怒っております。それから田島先生については教授選の直前の日本整形外科学会の評議員選挙のことが思い出されます。当時私が医局長を務めており、教授になる為の条件の1つに日整会の評議員であることが重要だったようです。私は田島先生を車に乗せて県内の開業医を一軒、一軒訪問し田島先生への投票をお願いして回りました。それでも十分な得票数が得られないようでしたので、田島先生の元の医局や宮崎医科大学整形と関係の強い他大学整形医局の票をいくらか頂いて当選確実のLINEは少し余裕を持ってCLEARしひと安心したところ、田島先生からこれでは困る、元整形講座のS教授より得票数が多くてもいけないし、同級生で元整形講座のI助教授には得票数では絶対に負けたくない、このような条件で自分を評議員に当選させてくれと言う強い要望でしたので、投票数の確実性を高めるために有権者（おもに開業医）に電話をしてその時の相手の対応と人柄で、投票確実は2点、可能性ありは1点、可能性なしは0点と評価して予測しました所、推定票が当選LINEを少し余裕を持って突破しましたので、S教授を超えない範囲で、I助教授より少し多いであろう73票に設定し選挙に臨みました。結果はほぼ予測どおりとなり、票数はS教授、田島先生、I助教授（後では教授になられました）の順となり、全員当選でしたが、この件に見るように田島先生は非常に緻密な頭脳の持ち主であります。私は田島先生が教授になられて3カ月で熊本市市民病院の伊勢紘平先生と1対1のトレードで熊本市市民病院へ転勤となりました（私ごとながら、この件に関しては田島教授に大変感謝しております、何故なら丁度この頃落合が1

対3のトレードで巨人に入団した時でしたので、あの偉い伊勢先生と対等でトレードしていただき感謝しております)。それゆえ、その後の整形医局のことは分かりませんが多分この頭脳明晰で行動力のある田島先生の補佐を、俊才の帖佐先生が諸葛 亮（諸葛孔明）として行ってたのではないかと思います。

その他、田島先生との思い出になる、歌が3つあります。まず松坂慶子の「愛の水中花」、次に中森明菜の「少女A」、最後に山口百恵の「いい日旅立ち」です。いずれも田島先生を経て知った曲ですが、あるとき宴会で私が「いい日旅立ち」を先に歌ってしまったものですから、あの温厚な田島先生から真顔で怒られました（約10年間田島先生と同じ医局で過ごしてきたのに、怒られたのはこの時と、ギブス巻きが遅くなって夕方の野球の練習に遅刻した時、および二軍のキャッチャーの時、ボールは後ろから投げるのではなく、耳の横から投げると怒られたくらいしか記憶にありません）。今考えてみると、持ち歌の少ない先生の曲を先に歌って先生を窮地に追い込み誠に済みませんでした。お許してください。

さて、田島先生も無事退官されることとなりましたが、ゴム紐理論でいえば65歳はまだ中年であり第1線を退くには早すぎます。特に田島先生におかれましては、頭脳明晰、体力、気力とも十分ですので、教授退官は単なる人生の節目として、退官日をさらなる「いい日旅立ち」の出発点としてさらに躍進されることを期待しております。







## 田島教授の Happy Retirement にあたって

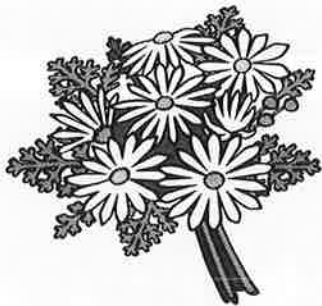
桑 原 茂

田島教授が晴れて Happy Retirement を迎えられるとのこと、誠におめでとうございます。今回は医局長時代のことを書くようにとのことですが、今覚えていることは忙しかったということしか脳裏にありません。特に印象に残っていますことと言えば、日米整形外科スポーツ会議（正式の名称は忘れました）の事務方をやった時のことで、アメリカ流のやり方も案外 about であったこと、日本人の寸暇を惜しんでのゴルフ三味が何と多いかを痛感しました。確かアメリカ側の事務方はハーバードの先生がやっておられたと思いますが、会議2日目の打ち合わせの時にその先生が『何とか歯止めは効かないのか』といわれ、困って意味が分からない振りをしてしまいましたが、私から見ても異常に感じました。何とか無事に終了しましたが、不評を買いました Farewell Party でのアトラクション（在ハワイ日本人の子供による合唱）について言い訳させていただきますと、ユニオンなどへの支払が多額であったためにやむを得ず選んだ結果でして決して本意ではありませんでした。10年も経ってから書くのも変ですが何となく心に引っかかっていたので書くことにしました。



さて、私はいわゆる speak out な面を持つ人間で、田島教授はじめ医局関係者に嫌な思いをさせたことが多々あったと思いますが『ごめんなさい』ですまさせていただきます。ただ、いい加減な性格の私が医局長を無事勤められたのは田島教授の実直な医局運営のおかげであったことは自覚しております、『大変な奴を医局長にってしまったなあ。こりゃどうなることやら』(田島教授の当時の心境)と悩みつつ私の至らぬところを補って頂いたことに心のうちでは頭を下げております。また私事になりますが東京に急に帰るにあたって迅速に対応して頂いたことは忘れられません。私の恩師についての詳細を当時お話しすることができず、心苦しかったのですが、お陰様で最後の手術助手もでき、最期をみとることもできました。亡くなる2日前に『おまえが帰ってくれて助かった。後の整理は頼んだよ』と言われた時に不義理をしても帰京して良かったと思いつつ、理由も聞かずに帰京を許して頂いたことに心から感謝しております。これからは田島教授も“教授”の肩書きから解放されるわけで、以前にもまして気軽におつき合い願えると思っております。まずは少々お休み頂くこととして、英気を養った後はゴルフなど一緒にさせて頂きたいと思っております。先生にはまだ東京に来られる機会も多くと思いますが、その節はお声をかけて下さい。仕事はさておき、遊びには間違いなくおつき合いさせていただきます。

Refresh and Re-start、今後のご活躍を期待しております。





## 田島直也教授の思い出

帖 佐 悦 男

田島直也教授、このたびは定年御退官おめでとうございます。

田島教授の御退官にあたり、教授の思い出などを紹介させていただきます。

### 1 昭和 60 年ごろ（助教授時代）

私たち 5 名が入局した頃（昭和 59 年）は、田島教授は助教授として、木村前教授の補佐はもちろん脊椎グループの長として活躍されておられました。私は、医師になって初めての仕事が、脊椎班での研修でしたのでその頃の事が非常に深く記憶に残っております。臨床はもちろんのこと、研究・スポーツ面でも大変お世話になりました。臨床面では教授のライフワークである腰椎後側方固定術の手術をたくさんみせて頂きました。腰椎椎間板ヘルニアの代表的手術でありますラブ法も田島教授から研修医時代に直接教えていただきました。関連病院で、腰椎麻酔下にラブ法を実施できたのも教授からコツを教えていただいたおかげと感謝致しております。どの手術でも、大胆にして繊細さを感じる手術であったことを覚えています。また、発表に関しては、田島教授の研究テーマの一つであるハンギングモアレ法の発表をさせて頂く機会に恵まれました。この方法は田島教授オリジナルだったため、文献もなく大変でした。カットオフ値の設定に大学から一番近い清武小学校に行き、校長先生にお願いして生徒さんのモアレ撮影を実施しデータ整理を行いました。大変なことでしたが、今では教授との良き思い出の一つです。また、脊椎疾患と血流の関係にも注目されておられ、Reflectance Spectrophotometry を初めて用いた研究にも参加させて頂きました。若年の私にも日本整形外科学会（日整会）や SICOT（国際整形・災害外科学会）で発表する機会を与えていただき大変感謝しております。このように研修医・医員の私にでも、直接手術や研究のことを指導していただきましたのに十分お応えする事ができておらず申し訳なく思っております。また、手術時に使用する田島式フレーム、骨盤ベルトや脊椎インスツルメントの開発など新しいことへ積極的に取り組んでおられ、それは現在まで継続されています。

この当時のアフターファイブの思い出としては、単身赴任をされていたらしゃったせい、夕食を一緒に食べさせていただく機会も多く、地中海料理とワインがお好きでした。最近、宮崎の代表的芋焼酎であります霧島のお湯割りをこよなく愛飲されておられます。ワインの頃から、決して酒に飲まれることなく、かといって飲めない私に無理強いされことなく教授と御一緒させて頂く宴席は和やかなものでした。クリスマスになると教授のお住まいの官舎に、病棟のみんなと集まり、準備したもみの木にデコレーションなどをしてクリスマスパーティーをするなどとてもチームワークを大切にされていました。チームワークと言えば、野球があります。日整会に入っておられる先生方は、よくご存知と思いますが簡単に紹介させていただきます。各地区の代表が日整会の学会早期に全国制覇をかけて戦います。各地区代表選出は、西日本地区は夏に行われ、優勝チームと準優勝チー

ムが日整会野球大会への出場の切符を手にすることができます。そのためまず地区大会での勝利が最初の目標となります。田島教授が学生時代されていたスポーツは、バスケットボールですが、長崎大学の整形外科に入局されてから野球を始め、宮崎医大に来られてから積極的にやるようになったと伺っております。バスケットボールも野球もチームプレーそして医療もチームプレー、自ずと野球をやることで相手への思いやりや連携プレーなどをチームの一員として学ぶ機会を得たのではないかと思います。それでも、入局した当時は、週2日練習をしておりましたので、野球と研修医の仕事との両立は非常に大変でした。疲れから練習にいけなかった日は教授にお会いすると必ず「今日練習に来なかったね」と声をかけて頂きました。結構な人数の中で、誰がきていて誰がきていないか瞬時に判断できる教授に大変驚き、また、参加しなかった人間には声をかけ、とにかく率先してみんなを引っ張っていく姿勢を感じました。それは、現在の教室のカラーにもなっているのではないかと思います。宮崎医大が強くなってからは、毎朝野球の練習をしているとか野球ができないと勤務先が遠くに飛ばされるなどの噂がありましたが、全くそのようなことはありません。

## 2 平成2年 教授へ御昇任

教授へ御昇任後は、数多くの学会の会長や役員を歴任されてこられました。宮崎県では玉井元学長、木村前教授の際に発足した整形外科懇話会・リウマチ研究会やリハビリテーション研究会、助教授時代に立ち上げられたスポーツ医学領域に的を絞った宮崎県スポーツ医学研究会を発展継続されております。また整形外科の勉強会として毎月第3水曜日（三水会）にオープンカンファレンスとして症例検討会を開始されました。症例の検討ならびにレクチャーを行い、開業の先生方の持ちよられた貴重な症例や大学での稀少な症例、そして最近のトピックス的なものなどについて、活発な討論を行って今日に至っております。

大学診療では側弯症外来はもとより、初めてスポーツ外来を前面に出した特診日を設けられ、一般のスポーツ外傷・障害をはじめ中学・高校・実業団のアスリートのメディカルチェックや診療を行い、本県のスポーツ医学の普及に多大な貢献をされました。スポーツ行政に関しても、県医師会、県体育協会と大学が一体となりスポーツドクター協議会の設置がスムーズに行われました。これは田島教授が各スポーツドクター団体の宮崎県の中心として御活躍され、各部署との連携を大切にされてこられた故にできたことであると思えます。

ライフワークである腰椎後側方固定術は、症例を蓄積され、長崎での症例を加え、長期成績に関し、良好な臨床成績、高い骨癒合率や制動術であることによる隣接椎間板への影響の少なさを日整会や国際学会で発表されてきました。また、その有用性について有限要素法を用い証明されました。新しいこととしてハイドロキシアパタイトを移植骨の代わりに用いることも考えられ、その臨床成績をClinical Orthopaedics and Related Researchに掲載しました。この論文に関する問い合わせをよく頂いています。

教授就任3年目にはハワイで日米整形外科スポーツ医学会を開催されました。会場がハワイということで随分と勝手も違いましたが、田島教授は、日本側代表としてアメリカ側代表とプログラム内容について相談し、その際にも常に相手の気持ちを尊重され、学会がスムーズにすすむように配慮されました。田島教授のこの細やかな御配慮は教授が会長として主催された全国規模の学会、国際会議や地方会に至るまでかならず根底にあるものでした。常に出席される先生方のことを考えら

れ、出席して頂いた先生方に宮崎の学会に参加してよかったと思って帰られるよう学会運営をされてこられました。実際、ほとんどの学会を田島教授ご指導のもと、教室関係者の手作りで行ってきましたので、出席していただいた先生方自ずと田島教授の心遣いといったものが伝わったのではないかと考えています。

患者さんに対しても、一つ一つを丁寧に、いろいろな事に気を配り、常々真摯な態度で患者さんへ接するようおっしゃられていました。その一つが外来・病棟での衣類の注意です。白衣の前のボタンは必ず留める事、ネクタイを着用すること、ネクタイ着用しない場合には半白衣に着替えること、身なりを清潔に保つこと、患者さんが不快感を感じることなく、診療させてもらえるようにと率先して規範を示され、手術日は全ての手術が終われるまで帰宅されることはありませんでした。また、時間にも非常に厳格で医局会、カンファレンスや抄読会などでも最も早く来られていました。時間を守ることは生きてくうえでの基礎であり、時間にルーズであれば仕事・研究もルーズになるということを教えて頂きました。

2年間医局長をさせて頂きましたので、その間、臨床・研究以外の面でも田島教授から多くのことを直接学ぶことができました。毎朝7時過ぎからその日の予定や今後の展望について話され、教授会や病院の運営審議会であった事で大切なことは必ずコピーをして渡して頂いていました。非常に几帳面で厳格であられましたので連絡がもれることや抜けがあることはまず考えられませんでした。また、何か物事を実施する場合にも必ず、教室員の意見を聞いてから決定されておられました。お忙しいにもかかわらず、毎年、年初めには、教室員の面接をされ希望を聞いてできる限り反映するようにされていました。関連病院との問題では、常に医師派遣の問題が浮上してまいります。県内外の公的・私的病院から常勤や非常勤の派遣の依頼があります。ご存知のように新設医大ですのでマンパワーがかなり不足していましたので、全ての要望にお応えする事は到底できませんでした。お断りする場合にも教室の事情を十分説明し、相手の立場を考え返答するようにおっしゃられておりました。また、急遽、関連病院から撤退せざるをえなくなった際には、先生自らお願いに行かれていました。

研究テーマに関し、ご自身のライフワークであります脊椎・スポーツ・バイオメカニクスについては、常に新しいことを考えておられます。御退官が近くなりました最近でも脊椎インスツルメントで可動性のものを考案され、特許の申請をなされたりしています。また、側弯症などへの応用に形状記憶合金の研究も実施していましたが、ニッケルの毒性のため一時中断していました。しかし、東北大学でニッケルフリーの形状記憶合金が開発されたとの報を聞き、早速にその開発担当の先生と連絡をとり、自ら研究所へ行かれ、今後共同研究をしていくことで話しをまとめられました。プロゴルファーの岡本綾子が椎間板ヘルニアの治療をアメリカで受けたことで有名になったキモパバイン療法があります。宮崎医大でも試験や研究を行いました。アナフィラキシーのため臨床使用が日本で許可されるまでには至りませんでした。しかし、この時もキモパバインの代わりにカテプシンという新たな酵素に着目した研究を開始されその成果も Spine に掲載されています。教授は非常に探究心旺盛で、何らかの事情で継続できなくなった場合でも、常日頃からいろんなことを考えられておられましたので、見逃してしまいそうなちょっとした記事にでも着目することができたのではないのでしょうか。

形状記憶合金の研究の最中、人工的な側弯症を形状記憶合金で作成して戻してもあくまでも人工

的でしかない、どうにかできないかといったことを昼食時お話になり、幸島（宮崎県の野生サルで有名な島）のサルの中には先天的な側弯症のサルがいるに違いないのでそれを捕まえて実験してみれば、4足歩行の動物を後ろ足で立たせたら側弯症ができるのでは、次から次に出てくるアイデアにはただ黙って聞くことが精一杯でした。専門外の分野についてはとても寛容な方で、私がいろいろなことをお願いに言ってもだめとは決しておっしゃいませんでした。私の留学に際しても、突然でしたので準備もしていませんでしたが、決める際も、逆に後押しをして頂きました。その当時は最初から妻子をつれて見知らぬ海外に行くこと自体無謀なことでしたが、「どんどん行きなさい」とはっばをかけて頂きました。留学先にも教授から自筆のお手紙や奥様から日本の雑誌などを送って頂いたことは今でも心から感謝しております。

### 3 最後に

田島教授は思いやり、そして和を大変大切にされてこられました。その成果として現在の宮崎医科大学整形外科学教室があります。今まで医師、教官、研究者、管理者として遺憾なくその手腕を発揮され、教室のためだけではなく日本整形外科学会や宮崎医科大学の発展のために貢献されてこられました。

この度、教授職を退官されますが、教授にはまだまだ教えて頂きたいことがたくさんあります。今後も引き続きそして末永く御指導・御教示のほどよろしくお願い申し上げます。

これからもお忙しいとは存じますが、健康に十分留意され、益々ご活躍されますことを御祈念申し上げます。ありがとうございました。





## 田島教授と手術の思いで

小 牧 一 磨

宮崎医科大学の整形外科講座は昭和49年に開講され、初代木村教授のあとを引き継がれて、第二代の教授として田島直也教授がご就任されました。その後、国内外において脊椎疾患、スポーツ医学をはじめとして整形外科一般について、すばらしい業績を残されました。同時に宮崎県内の開業している整形外科医に対して特別なご指導ご支援をも賜り厚くお礼申し上げますと共に心より感謝申し上げます。

開業医にとりましては、治療困難な患者さん、脊椎疾患や骨腫瘍などの患者さんをご紹介申し上げましたが、いずれの患者さんも快く引き受けていただきまして本当にありがとうございました。

私立の中小病院におきましては、保健行政からの医療監視が毎年実施されています。16床に医師1人、外来患者40人につき医師1人が必要とされており、医師の不足数を指摘されます。充足率が6割以下になりますと医療費の減額がおこなわれる厳しい制度であります。そのために中小病院の院長、事務長は大学病院の各医局へ医師派遣依頼のために訪問しており、私も事務長とともに再三、田島教授のもとへ伺い致しました。そのたびに田島教授は私達の不平や保健行政の制度のこと、医師数不足のことなど熱心に聞いていただき医師派遣について御協力、ご支援をいただきました。本当にありがとうございました。

私は、整形外科医としては、昭和60年頃まで長管骨骨折に対してのプレート固定、鎖骨骨折のキルシュナー鋼線による固定、大腿骨頸部骨折に対するピンニングなどしか経験がありませんでした。同時にギブス包帯固定を長期間行うため術後成績は今から顧みますと不良でした。平成になり田島教授のご許可を戴いて、黒田先生、田辺先生方に週に半日、手術の手伝いをいただきました。大腿骨頸部外側骨折、同骨幹部骨折などに対してのイメージ下でのエンダー釘を廻しながら骨折部位を整復して2本目、3本目を入れて固定する手術には大いに感動したことを覚えています。その後、大腿骨転子部骨折のCHS法、ガンマーネイル法など、かつて経験したことのない手術を行っていただきました。私共、古い世代にとっては、手術機器、材料が長足の進歩をとげていたことを知らなかったのです。関節鏡下手術も未経験でした。関節鏡を購入して教室の先生方に教えていただき、簡単な鏡視下手術ができるようになりました。その他、肩腱板損傷の手術、大腿骨頸部骨折の人工骨頭置換術、TKA、THAなどをおこなっていただいています。

現在まで整形外科の病院として存続できましたのも、田島教授を始めとして教室員の先生方のご支援、ご指導のお陰と深く感謝申し上げます。

田島教授、ならびに医局の先生方が今後、益々御活躍されますことをご祈念申し上げますと共に、私達、整形外科開業医に対しまして、今後もご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



## 教授はいつもトップギアー

押 川 紘一郎

世の中にスポーツがなくても特に問題はないかもしれない。それぞれ自分の好きな範囲で体を動かしたり、仕事をしたりすることで、特に不自由は感じていない人が大半ではなかろうか。これが仮に医師がいなくなったり、治安をまもる警察官がいなくなったとしたら、社会生活に大きな支障が起ることであろう。スポーツは大した役割を果たしていないのであろうか。しかしスポーツのない人生は誠に味気ないものであろう。その意味で、スポーツは、人にとって、欠くことのできない活力と思える。このことを実感したければ田島教授と、1週間程生活をともにされる事をお薦めしたい。教授にとってスポーツは人生そのものであり、その重要性は、患者と医師、牧師と信者、火事と消防士、ブッシュとイラクの関係より大きいことがあらためて認識されるであろう。

田島教授とスポーツといえば、すぐに野球と思われるであろうが大きな間違いである。確かに長崎より宮崎へ来られてから、宮医大野球部をはじめとして、地元リトルリーグ、甲子園出場高の技術向上、整形野球部の創設と全国優勝、県医師会野球部の全国優勝など監督・指導者として、全国的に「宮医大の田島野球」として有名になったのは事実である。しかしながらその為、教授のマルチスポーツマンとしての姿が隠されてしまったのである。不思議なことである。そこで私のかかわった範囲ではあるが、「野球の田島」として過ごされた裏に隠された真の教授のスポーツ人生の一端をご紹介したい。

私にとって医大着任直後の教授はバスケットのプロとの認識であった。長崎三菱で身障者バスケットチームを立ち上げた名コーチとの情報があったためである。なるほど、ルックス、スタイルともに米国NBAコーチのイメージピッタリであった。しかし最初に教授の口からでた言葉はテニスであった。世界の学会ではテニスで親睦をはかるとの事で、さっそくテニスパートナーとして練習を開始した。教授のテニスは攻撃型である。毎週日曜日のハードな練習中、攻めすぎて筋の断裂をされてしまった。テニスはしばらくお休みとなった。次はマラソンである。人は走る事が基本であるとの指示であった。私は走り始めた。教授が実際に走られていたかは定かではないが、とにかくランニングについてしばらくは興味を持たれていた。このころからゴルフを研究されはじめた。クラブについての情報は誰よりも早く、球のスピードもコースアップのスピードも最速であった。炎天下のフェアウェーでもまったく変わらなかったのは、やはり密かにランニングはされていたのであろう。

この間、自転車に興味を持たれた。筋力アップのため最適との事で、トライアスロン仕様のロードレーサーを準備したが、あまり乗られていたようではない。もしバイクのトレーニングを毎日通勤に取り入れられていたら、現在シングルになっておられたと思われる。残念な事である。ちなみに、私は乗り続けているが、シングルではない。

医局生活から開業して20数年間、私のスポーツ人生は、教授の後を、まさに全力疾走で追い続けた。いつのまにか教授のパワーにのせられスポーツの楽しみにはまってしまう。気がついたとき教授は次



のスポーツに集中、またまたそれを追いかけるのであるが、とても追いつかない。教授は常にトップギアで驀進するスポーツマンなのである。それが周りに活力を与え、やる気を起こさせたのであろう。

追)

退官された後もギアチェンジすることなく走られますか。

それでは今度は私からの提案です。

トライアスロンにチャレンジされませんか。

私が10年間にわたってトライアスロンに挑戦し続けている火付け役は教授です。

お待ちしております。





## おつかれさまでした

渡 辺 雄

田島先生、長い間本当にお疲れ様でした。“仏の田島先生”と周囲の方々からその温厚な性格と人望で尊敬される一方、学会や野球では精力的に活動され、まさに動と静の両面を兼ね備えられた先生は我々後輩にとっては理想の上司でした。今後も先生が残された文武に対する飽くなき挑戦は宮崎医科大学整形外科同門に脈々と継承されていくものと信じています。振り返ればえれば 23 年前の昭和 54 年に高校、大学の先輩である先生に“宮崎に行くけど一緒に行かんね”と声をかけていただき、その後女房に“宮崎に行くぞ”と否応なしに話した事を思い出します。私の不徳の致す所で、わずか 1 年半で宮崎を後にし先生の御役に立てなかったことは私の一生の悔やみとする所です。先生と仕事をさせていただいた 1 年半は今でも楽しかった思い出だけが走馬灯のように駆け巡ってきます。またその後も短絡的な私を見捨てることなく、事あるごとに声をかけていただき本当に心から感謝いたしております。私の今があるのも先生なしには考えられません。どうか今後とも御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

先生との思い出では数々ありますが、もう 30 年近く前になりますか、私が東京通信病院に勤めていた時に先生が東京の学会に来られて、私の車で先生をホテルまで御送りする時でした。道に迷って 2 時間近くドライブしたあげく結局道がわからず、終電に間に合う様にと近くの駅に先生を放り出した事を今でも思い出します。放り出された先生はたまったものではなかったでしょうが、私としては明日仕事がある先生に一刻でも早くホテルに帰って休んで頂きたい一心でした。私が自分の宿舎に戻ったのはそれから更に 2、3 時間後だったと思います。還暦間近になった私には若くて無鉄砲だったあの頃が懐かしく思い出されます。

先生は退官されるとはいえそのバイタリティーには未だに足元にも及びません。どうか何時までもお元気で我々同門を御指導賜りますよう重ねてお願いする次第です。田島先生、本当にお疲れ様でした。そして本当に有り難うございました



## おもいで

山口一郎

あれは1979年春だったと思います。自分が研修医の頃、医局長から「三菱病院へ週に1回脊椎の勉強に行くように」と言われました。右も左も分からないまま、病院へ行き整形外科部長へ御挨拶に上がりました。出て来られた先生は、泣く子も黙る威厳と貴公子然とした立派な出で立ちで、整形外科の若きエースという印象を受けました。そのお方が現在の田島教授であり、自分が一生お世話になろうとは神ならぬ身知る由もなかったのです。

この、週に一度の研修は実に規則正しく、午前はきっちり12時までの外来です。その後、昼食になります。田島部長、乗松先生、深沢先生、藤井先生と自分の5人で一緒にいただきました。偉い先生ばかりで、食事が何処に入ったのかいまだに記憶がありません。その昼食費は田島部長のお計らいで病院から出していただいていたと思います。

午後1時から始まる脊椎の手術では、部長がイギリス留学で修得された方法で当時の日本では最先端のものでした。第1助手の深沢先生が説明してくれましたが研修医でありながら、そんな先生の手術に就けるのが誇らしくもありました。また手術の合い間には検査が入ります。見学のみでボウツとして見ていると「はい山口君、やりなさい」といきなり部長が、針を渡してくれます。腰椎穿刺は何度か経験はあったのですが後頭下穿刺をいきなりと命ぜられ全身が縮んでしまいました。怖ずおすと針を刺して行く訳です。「大丈夫ですか」と患者さんに聞きながら、部長先生の顔色を見ながら更に進めると「うっ」という呻き声がありました。「どうしましたかっ!」と聞くと「身体全体がしびれた」と患者さん。返事があるのは良い事ではあるのです。部長は「はいそこで針を少し引いて、造影剤を入れて!」と、あくまで冷静に指示してくれます。内心、よくまあこんな怖い検査方法を考え出した人も居るものだななどとぼやきながら、しかし、今にして思えば素人に近い研修医に落ち着いて指導して下さったものだと感謝いたしております。

その後、田島先生は宮崎医大に赴任されることになり、渡辺先生も一緒に行かれるとの事で乗松医局長から「お前も行くか?」と言われました。当時自分はまだ別居中で、家内は宮崎に居りましたので一も二もなく有り難く拝命いたしました。

当時の宮医大整形医局は、木村教授の許、矢野先生、武内先生、岡田先生など錚々たるメンバーがおられました。家族的な雰囲気があり楽しい限りでした。夕方、仕事が一段落すると田島先生を中心に「きわら」という食堂へ夕食に行くのが日課でした。そこでいろいろ先生のお話や経験談をお聴きするのが実に貴重でした。

その中で特に印象に残ったのはイラクに行かれた時の話です。先生が三菱病院におられた頃、三菱重工業がイラクに大発電所プロジェクトを受注しそこに医療班派遣の要請があった訳です。医師は3カ月のローテーションで組まれていたのですが、酷暑の地でそのうちの1人が急病に倒れたのです。先

生は責任上、様子を見にそして必要なら、連れて帰るつもりで行かれました。イラクの現地に着いてみると意外に重症なため、いろいろ交渉の結果、エジプトの病院で治療してもらうことになりました。

至急ジープに乗せて出発しました。途中で先生はパスポートを忘れた事に気がきます。しかし病人がおり引き返す訳にもいかず止むにやまれず出国はしました。再びのイラクへの再入国は困難を極めたそうです。“行きは良いよ帰りは怖い”の歌にありますように、ジープの床のわずかな隙間に隠れその上から隙間だらけの板を張りシートをかぶせた上に、同僚の人達が数人乗って検問に入りました。係の兵隊が最近TVで出ていた例のサーベルを床にブスブスと突き立てて、先生の鼻先にもその切っ先がきて……まさに九死に一生を得たとの事です。数々の修羅場を潜って来られた方ですから、少々の事では動じないのも無理からぬ事と納得しながら拝聴していました。

それから、自分にとりまして待望の男子が生まれた時は真っ先にお祝いに駆けつけて下さり、夫婦とも大変恐縮し感謝いたしております。それまで女の子ばかり続いていたので先生も気の毒に思われていたのでしょうか。また学位論文も御指導いただきました。自分では、とっくに諦めていたのですが、最後まで激励していただき何とか仕上げる事が出来ました。その他思い起せばお世話になったことが数限りなくあり、田島先生のおられる方角には足を向けて眠られません。御恩返しも全くしないまま、現在に至っておりますが、せめてその何十分の一でも地域へ還元できたらいいなと願っている次第です。

この紙面をお借りして、先生およびご家族様の益々の御発展をお祈りさせていただくとともに、心からの感謝をこめて

“田島直也先生、ありがとうございます。これからもお世話様になります。”





## 私にとっての田島助教授のおもいで

川 野 啓一郎

振り返ってみると私は多くの良き恩師に恵まれ、幸福だったと思う。5年間の東京医大整形外科医局での研修の後、地元で開業する決意で宮崎に帰り、門をたたいたのが宮崎医科大学整形外科学教室であった。

木村先生が主任教授として教室を作り上げている段階で玉井先生が副学長としてひかえていらっしゃる、心強く感じたのを覚えている。

当時助教授でいらしゃった田島先生とは入局の面接の際にお会いして、その熱意と誠実な人柄に安心すると同時に自分自身の将来への希望を感じたのを覚えている。

先生は診療に専門性を持たせようと、脊椎班、下肢班、上肢班という班制度を導入され、その中で私は脊椎班の一員として直接指導を受けることとなった。傍でおつかえして考えたことであるが、助教授という立場は中間管理職という面もあり診療や研究でのご苦勞が多いと思われた。一方、医局員との付き合いといった面では、教授と違ったある程度の自由さがあり、おかげで公私にわたり御指導を受ける事ができた。手術の手ほどきから、診察においての患者さんへの誠実な対応、また斬新なアイデアを基にした研究のお手伝い、どれもこれも私にとって有益で楽しい事であった。病院近くの「きわら食堂」はおなじみの食事をしながらのディスカッションの場となった。

また、学会にご一緒する機会も多かったが、発表、発言はもちろん、いつも朝から夕方まで熱心に聴かれている姿が印象に残っている。私が後ろの席でのんびり聞いているのを見つけられ、前の方の自分の席に手招きされて隣に座らされた事も記憶にある。学会に同行すると先生が時間に「PUNCTUAL」で人より先に行動されていたのがはっきり認識できた。時にはホテルの朝食でレストランが開く前に待っていた事もあり、時には学会場の受付準備が始まる前に行き、近くの喫茶店で時間をつぶした事もあった。大学から市内へ私の車でお連れする機会も多かったが、再三に渡り先生を待たせた記憶がありいまだに申し訳なく思っている。「日向時間」の私にとっては生活の面でも良い指導をして頂いた。「約束の時間より10分早く行くようにしなさい」とのお教えが心に残っている。

先生は医局員の誰よりも早く医局にいらっしゃり、また、最も遅くまで残って仕事をされるような生活をされていた。短い間私もお付き合いをして生活した事があるが、私の家内が冗談に「我家は母子家庭」と言っていたのを思い出す。私にとって最も充実していた医局時代だった。

更に、文武両道というモットーから野球にも力を入れられ、医局員の健康管理と同時に医局員のチームワーク作りにも努められた。

平日は夕方、各自仕事が一段落した時点で日没まで練習を行い、その後に残りの仕事を仕上げるスケジュールであった。土曜日は仕事前の6時から始まり、眠い目をこすりながら出てみると、いつも先生がユニフォーム姿でグラウンドに立っていらしゃった。そのバイタリティーたるや、しばしば我々

医局員の話題にのぼったものである。ユニフォームは先生のお気に入りのドジャースをベースに、また、チーム名は宮崎のイメージからサン&グリーンと決定した。サン&グリーンがかつての弱小チームから常勝チームへと成長するのに比例して、教室の業績面のレベルアップが図られているのを見るにつけ、先生の医局員に対しての教育指導の正しさを思わずには居られない。

木村前教授から引き継がれた医局を更に大きくしっかりしたものに育て上げられた田島教授の業績は偉大なものである。しかし、お忙しかった助教授、教授職を退官された後、これからしばらくは、体を休めて頂き、ゆとりを持って生活して頂くようお願いしたい。そうする事で我々とプライベートの付き合いをして頂けるのではないかという、私にとってひそかな楽しみもあるからである。





## ごあいさつ

### 長 鶴 義 隆

数々の学会、研究会を主催され、専門分野の脊椎外科とスポーツ外傷に関連した輝かしい研究を推進し、長年にわたり、整形外科専門医を誠に多数育成されてきました田島教授が定年退職されますことを心からお祝い申し上げます。まだまだ余力を残し乍らの撤退は、教室員一同にとりましては、誠に口惜しい限りです。

このたび田島教授退官記念号を出版するための寄稿の依頼を受けましたが、与えられた紙面では意をつくすことが不可能ですので、私が教室に在籍したほぼ8年間においての先生についての思い出として述べることにします。まずは、西日本野球大会出場のため、早朝に起き日の出を仰ぎながらグラウンドでの早々の朝食をとり応援に参加した頃のこと、熊本球磨川の激流の中、スリル満点で波しぶきをかぶりながら下った時の楽しかった医局旅行、さらにドイツで開催された SICOT に参加した時の色々の思い出等々、今走馬灯のように懐かしく思い出されます、

さて、先生は趣味も非常に豊かで、野球、ゴルフ、その他のスポーツにも広く関心をもたれ、また様々な読書もされ博学なる知識を身につけておられます上に、卓越した明晰な頭脳の持ち主であること、さらに、いつも折り目正しく羽目をはずされたことは一度も目にしたことがなかったような気がします。それに加え、周りの人には分け隔てなく心くばりをされる温厚な人柄は先生の人徳でありますし、そこに相互理解と協調の精神がおのずと育まれ、現在の教室の姿が整ったものと思います。なお、大学本来の使命であります研究、教育、臨床にわたり、常々先生が口にされておられましたように、真正面から真剣にそれらに取り組み、とりわけ、バイオメカニクスの立場から臨床的、基礎的研究を先生の情熱とその忍耐強さをもって推進され、今日多数の優秀な整形外科医を輩出されましたこと、さらに将来教室が研究、臨床面で益々目ざましい発展と繁栄をなすとげるその礎をまさに構築されましたこと等、先生ほど大成された教授は知りえません。これこそ今日まで教室のために心血を注ぎながら絶えず努力されてこられました先生には、何と感慨無量の心境だろうと拝察しております。

まだまだ健康には留意されて、新しい職場でご活躍されることと思いますが、引き続き、我々教室員、同門会員一同のご指導とご鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。



## 田島教授との思い出

佐藤 信博

田島教授との思い出を振り返ることは、私の医師としての歴史を振り返ることに近い。私の歩んだ道を振り返りながら田島教授との関わりをまとめてみることにした。

私は昭和53年、昭和大学を卒業し県立延岡病院の研修医として故郷の延岡に戻ってきた。当時、宮崎医大の医局に正式には入局していなかったが、故八田純雄先生と週1回の勉強会に参加していた。翌昭和54年11月に田島教授が助教授として赴任された。当時の医局員数は10人をわずかに超える程度であったが、渡辺雄先生と山口一郎先生も一緒に来られることになり医局が一気に飛躍したと感じた。

昭和55年、田島先生が宮崎医大に来られてすぐ宮崎医大の第1回の卒業生がでるとともに大学院が創設された。私の働いていた県立延岡病院整形外科のチーフであった永田高見副院長（その後の院長）は玉井達二先生（当時は宮崎医大副学長）の一番弟子であったこともあり、そのお薦めで宮崎医大の大学院に進むことにした。入局早々に横浜で開かれた側弯症研究会で新しい装具の発表をさせていただく機会を得たが、何も分からないままの発表で情けなかったことが思い出される。

また当然、田島先生は赴任当初から野球にはご熱心で、私が朝練に行くと田島先生は常に先に来られていた。チーム名は田島先生が考えられ、ユニフォームや応援歌もでき大いに皆で盛り上がったものである。ある練習試合中に2塁ランナーだった私はレフトに抜けた球を見ながら3塁をまわったが、当時太りすぎの私はベースにつくことができずオーバーして3塁を回ったことがある。そのままホームに向かえばよかったのに、ためらって途中で引き返しアウトになってしまった。私の断行力のまずさで勝てる試合を逃してしまう結果にしてしまったのだが、当時のメンバーの皆様には、この書面をお借りしてお詫び申し上げたい。

曜日は忘れたが、毎週の勉強会後の“きわら”での食事は懐かしい思い出である。毎回、皆で食事を頼み、おかずを分け合い食べたものである。ある日焼き魚を頼んだ私が田島先生の隣りに座り、魚を半身づつに分けたのだが、先生は遠慮され召し上がられなかった。余計なことをしたかなと恐縮したが、今思えば、若い食べ盛りの医局員にたくさん食べさせようとの先生の心遣いであったと考えられる。

また私は長崎での友人の結婚式の帰りに、田島先生の長崎のご自宅にお邪魔したことがある。田島先生はジープ（三菱製だが、米国のジープのライセンス生産したもの）を買われてすぐのことで、私は図々しく運転させていただこうとエンジンをかけたがエンジンがかからず、そのうちにバッテリーをあげてしまった。しかし、田島先生と奥様には大変なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、お昼には皿うどんをお腹いっぱいご馳走になり、夜には長崎の町を一望できる料亭で初の卓袱料理を堪能させていただいた。



田島先生との思い出で忘れられないのは第15回国際整形災害外科学会議（SICOT 1981年8月24日～9月7日）に参加したことである。ロサンゼルス、リマ、クスコ、インカ帝国の遺跡マチュピチュ、サンチャゴ、サンパウロ、イグナスの滝、ブラジリア、リオデジャネイロと移動した長い旅であった。私達のグループは小さな班であったが、そうそうたる先生方ばかりで、私はその後この時に会った多くの先生方から色々のご指導を頂くこととなる。リオデジャネイロでの学会は学会場がまだ建設途中でコーディネーションが悪くスライドプロジェクターが足りなくなったり、会場が停電したり、ポスター発表のつもりが実は普通の発表だったりとさんざんであった。しかし、私の発表は事を得ることなく終わりその後の懇親会でのサンパシヨを楽しんだ記憶がある。また、若い私と同行した妻は旅行の初めから添乗員の方とツアーの皆さんのお世話をしていたため、添乗員と間違えられていたエピソードもあった。

もう一つの海外旅行といえば、私が大学院を辞めるときである。田島先生は文部省の教官留学でトロントに留学されていた。私は研究にも行き詰まり自分の進路に疑問を持ちつつ田島先生をトロントへ訪ねた。いろいろと相談に乗っていただき、当時のトロント大学の主任教授であったProf.Salterにご紹介頂き、その2年後にclinical fellowとして留学させていただけるとのありがたいお話を賜った。そして、私はトロントへの留学を決め、留学するまでの2年間麻酔の勉強をするつもりで、関東通信病院麻酔科の医員となった。ところが、2年の間に先輩の先生方が辞められ必然的に残らざるを得なくなり、トロントへの夢は消えてしまった。その後約10年間、関東通信病院に勤務したが、田島先生が学会で東京に来られると、医局の先生方と共に良く食事をご一緒した。また東京の大学に通っていた先生のお子様も何度か我が家に遊びにいらしたことがある。

ある日、脊椎外科学会の後に田島先生とともに有名な教授方と一緒に、赤坂のフィッシャーマンズワーフというレストランで慶応大学の先生にご馳走になってしまったことがある。今考えるとあまりの厚かましさに赤面する次第である。

麻酔科にいと、整形外科に飢えており何でもいから吸収したいと考える。先述したSICOTのときにお会いした東京通信病院の池内宏先生にお願いし、かねてから興味を持っていた関節鏡の勉強をさせていただくことになった。当時、関東通信病院では毎週金曜日に研究日があり、私はそれを利用し10年間毎週東京通信病院にて関節鏡を勉強する機会を得た。田島先生も一度東京通信病院を訪ねて下さり、池内宏先生にお会いして頂いたことがある。池内宏先生の奥様は元木下宮崎医学長長の従兄妹にあたられることから話に花が咲いた。

東京では何度か宮崎医科大学整形外科が開催した学会の海外招待講演の先生方のお世話をしたことがある。成田に迎えに行き羽田から宮崎にお連れしたボストンのBrigham Women's Hospitalの先生やスイスからの先生が来られたときには飛行機のトラブルで到着が半日近く遅れ、着いた日の宮崎行きには間に合わず、学会の進行が遅れたこともあった。

私が東京にいたときに田島先生に最も感謝しなければならないのは関東通信病院麻酔科に宮医大の医局員を麻酔の研修に派遣していただいたことである。初代の研修医として黒木龍二先生が赴任され、優秀で勤勉な仕事ぶりは評判で私は鼻がたかかった。

平成3年の春頃、田島教授とお会いしたとき“もうそろそろ戻ってこんね”と言われたのが延岡への帰郷のきっかけとなった。東京通信病院整形外科の部長も池内宏先生から黒澤尚先生（現順天堂大学教授）へと変わり、同じ関節鏡手術にしても違った方法でされ、ご自分の専門以外の手術は日本中

から専門家を呼ぶ方法を取られるなど、私としては金曜日の東京通信病院が楽しみだった。しかし10年が一区切りと考え帰郷する決意をした。

私は平成5年1月5日に故郷の延岡市にあたご整形外科を開業した。田島先生には開業披露宴でご祝辞を賜り、スポーツ関連の旭化成柔道部や陸上部の方々をご紹介いただいた。私がスポーツ整形を目指した理由に田島先生の影響は大である。

以前よりスポーツ医学には興味があり、大学院生の頃にはUCLA 対オレゴン州立大というアメリカカンフットボールの公式戦が日本で初めて開かれたときに2つの大学のチームドクターとトレーナー達による、ソニー主催の整形外科医向けの第1回のテーピング講習会に出席したことがある。また、関東通信病院にはスポーツ医学研究会があり、現聖マリアンナ医科大学の村上教授、武者先生など内科におけるスポーツ医学の権威者達がおられた。整形外科からの参加は少なく内科的なことが中心だったが大変勉強になった。帰延後は田島先生に推薦いただき日本体育協会のスポーツドクターの資格をとることもできた。アスリートタウン延岡でまだまだ未熟だがスポーツドクターとして活動ができるのも田島先生のおかげと深く感謝申し上げている。

田島先生の延岡市医師会とのかかわりは延岡市医学会総会でご講演をいただいたことである。学会後に会員の皆様と鮎やなに行き、次の日は北方ゴルフ場で田島先生と故樋口三男先生（樋口潤一先生のお父様）とご一緒にゴルフを楽しんだ思い出がある。田島教授がゴルフを始められた経緯は知らないが、私が帰郷してからはよくご一緒させていただいている。一昨年には教授とラウンド中に頸椎の椎間板ヘルニアになりご心配をおかけし“大丈夫ね？途中でやめてもいいよ”とお優しい励ましがあったのだが、その後約1年はゴルフできなくなってしまった。また昨年4月には腰椎の椎間板ヘルニアとなり医局には多大なるご迷惑をおかけしてしまった。そんなことで昨年もほとんどゴルフから足が遠のき、ゴルフがしたいという意欲もなくなり田島先生からのお誘いにも答えられず、申し訳なく思っている次第である。

まだまだ教授との思い出は尽きないが、医局の中でご一緒させていただいた時間が少なく田島先生から直接手術の手ほどきをして頂けなかったのが心残りである。とても可愛がっていただいた田島先生が退官されることは誠に残念だが、少しは時間のゆとりがお出来になるであろうからゴルフがいつそう上達されると思う。いつまでもお元気で益々ご活躍されることをお祈りしつつ筆を置く。

田島教授、長い間本当にお世話になり有り難うございました！



## 医局長時代の思い出

平川俊一

田島教授が本年退官を迎えられる事になりましたが、もうそのような時期がやって来たのかと正直言って驚いています。教授就任がついこの間の出来事のようにあり、また元気瀧刺で私たちの先頭に立って引っ張って下さっている毎日からはとても信じられません。とてももったいないと思うのは私だけでしょうか。医局長時代の思い出を書けとの事ですが、記憶も定かではありませんし昔話になりますが、古い話を思い出してみたいと思います。

私が医局長を仰せつかったのは、昭和63年だったでしょうか。一年間任期を全うし平凡に医局長業務を行って行くはずでしたが、どうゆう巡り合わせか木村前教授が御退官され田島新教授が誕生する時期の医局長をするという巡り合わせになりました。色々波瀾万丈でありましたとは今になって思うのですが、実を結んだ苦労はすっかり忘却の彼方に飛んでいっております。

田島先生が教授に就任されてから当初、県内外各地に御挨拶に伺われるのに御一緒させていただきました。朝一番で南宮崎駅で特急にちりんに乗り、そのまま延岡駅で乗り換え高千穂鉄道で高千穂町立病院行き、柴田院長先生にお会いしました。行った時と同じ電車で戻り県立延岡病院の永田院長先生にお会いしました。今は亡くなりましたが、田島教授の長崎大学の先輩であった現在野崎東病院でスポーツ整形に頑張っている樋口先生のお父様の樋口三男先生、そして谷村病院の市原先生にも御挨拶して夕刻清武まで帰り着きました。

その頃と同じ頃だったでしょう、私が運転して熊本に行ったことがあります。当時熊本市市民病院におられた伊勢先生にお会いして、それから熊本大学の高木教授に御挨拶をして、更に龍ヶ岳町の上天草病院を訪問しました。その帰り道に龍ヶ岳町からフェリーにりましたが、孤島のない宮崎県、田島教授と二人で船に乗った医局長は私だけではないでしょうか。その船中のテレビで放送していたアンパンマンが印象深く、その主題歌の如く、頑張って教室を作って行かねばと思ったのを憶えております。その時、田島教授は窓の外を黙って眺めておられました。

このように田島教授誕生時期は毎日が大変忙しく、疾風怒濤の如く、毎日が過ぎていきました。その後、桑原茂先生に医局長を交替いただきましたが、教授から研究のテーマをいただき、更に臨床の面で脊椎班に拾って頂きました。

恐らく田島教授のことですから、これからも全力で走り続けられ、私たちはその後ろを遅れないように走っていく事になりそうです。

みんな、もう一頑張りしましょう。



## 風を捲く

松本 宏一

私が脊椎班チーフとして仕事をしていたのは昭和の終わりから平成の始め頃であり、10年以上前の事になります。当時の事を思い出すのは難しくなりました。只、記憶が薄れていく中で、スナップ写真のように断片的にある場面、場面を覚えているものがあります。

風を捲く。これが田島先生の第一の印象です。毎年6月研修医が入れ代わる頃、脊椎班の説明会がありました。外来の5番の部屋に集まり、まず私が週間予定を黒板に書いてゆきます。陪席、脊髓造影、装具、側弯外来、手術などの説明が終わる頃、現れるのです。疾風の様に現れるのです。田島先生が。そして、西日本脊椎は田代、松本、西日本整災会は黒木、浪平、柳園、久保、側弯症は園田、日本脊椎は松本、腰痛学会は柏木等等、と学会発表予定が次々に決まって行きます。そして以上の事を言い放つと、また、疾風の様に去って行きます。疾いのです。

学会場に行くと、昼食が問題です。何が問題かと言うと、田島先生は午前中の演題を全部聞いて、さらに午後の演題も初めから聞くのです。一緒に昼食をとると、非常に短時間で食べなければなりません。まず素早く食堂を見つけて、一番早くできるものを注文して、素早く食べなければ午後の演題に遅れます。スピードが肝要です。

田島式3-Sと言うのがあります。これは田島先生が開発した脊椎固定用機具です。胸椎や腰椎の手術をしてこの3-Sを取り付けた時、ロッドの一部をカッターで切り取るのですが、結構硬くて力が要ります。私が力を込めてカッターで切る時、力は正義、とかけ声を掛けてくれます。アメリカ大統領の座右の銘をハモってしまいます。

私生活では野球をこよなく愛し、ジープを乗り回していました。この田島先生からは映画瀬戸内少年野球団に出てくる進駐軍の将校を連想させられます。颯爽としていました。主演女優の夏目雅子も忘れられません。ほんとの美人薄命。

私の前に脊椎班のチーフをしていた川野啓一郎先生は、私が研修医の時のオーベンでした。そんな関係もあって私も一緒に脊椎を専攻するようになったのかなと思います。川野先生は今でこそ地元根を下ろした田舎のおっさんになりきっていますが、私が研修医の頃には彼は都会の匂いがしました。強いて欠点を言えば、乗っていた赤いコスモのナンバーが品川ではなく練摩ナンバーだったことぐらいです。当時、川野先生、田島先生ともに颯爽として見えました。

最後に田島先生には教授に就任されまして10数年、恙無く勤め上げられました事を心よりお慶び申し上げます。



## 医局長時代の教授との思い出

川 越 正 一

帖佐先生の後任として、平成9年1月から1年間、医局長を務めさせて頂きました。医局外勤務の長かった私にとっては、大きな不安を抱えていたのですが、いろいろとご迷惑をおかけしながらも、無事に仕事を終えられたのは、田島先生はじめ、医局員の先生方のご協力のおかげだと、感謝しております。

さて、私の医局長在任期間での思い出の中でも、特に思い出されるのが、医局の旗と応援歌ができたこと、野球の全国大会での準優勝、そして、田島先生の還暦の祝賀会の事です。

医局の旗と応援歌を作るようにと教授から指示があったのは、医局長就任してまもなくの、飲み会の二次会であったと記憶しております。一人で背負い込むのは大変と思い、その場で、歌の担当を柏木副医局長、旗の担当を作先生にお願いしました。歌は、教授の作られた歌詞に、石田先生の奥様に作曲して頂き、すばらしい応援歌が完成しました。旗の方は、当時、マイケル・ジョーダンの所属したブルズのマークを元に、宮崎牛をアレンジしたものを、作先生が、こつこつと（のんびりと）、マック相手に作成されました。お披露目は新入医局員歓迎会ということでしたが、途中、田島先生からの細かい指示などがあり、滑り込みセーフで、歌とともに無事に披露されました。両者とも、その後の新入医局員歓迎会や野球大会のレセプションで掲げられ、また歌われ、教授の意図された医局の団結心を高める事に、十分役割を果たしてくれたと感じております。

この年の日本整形外科学会は札幌で行われました。野球の試合は、早朝に行われるのですが、札幌の日の出は早く、球場に向かうタクシーのラジオには、オールナイトニッポンが流れていました。選手たちは、教授を優勝監督にとの意気込みで、すすき野の夜を我慢しながら、学会参加（+温泉観光）と野球の二足のわらじでしたが、激戦の末、決勝まで勝ち進みました。決勝戦は富田教授率いる金沢大学でしたが、人工芝やドームの天井に感わされ、本来の力が出し切れず、惜しくも準優勝に終わりました。田島教授は全試合に選手とともに球場入りし、ベンチから采配をふるっていらっしゃいました。優勝できなかった瞬間の、教授の悔しさは、同行していた我々も強く感じるほどでした。その後も、掲げた目標に向かい、さらに一層闘志を高められて行かれたことは、皆様もご承知の事と思います。

この年最も思い出に残りますのは、10月10日に宮崎観光ホテルで、教授の御還暦をお祝いできたことでした。祝賀会には、それまでの医局開催行事よりさらに多くの101人の御出席を頂き、発起人としましても大変感激いたしました。まだまだ全身元気印の教授には、“赤いちゃんちゃんこ”ではなく、“赤いスタジアムジャンパー”を着て、入場していただきました。衛生学・濱田教授、第2外科・鬼塚教授にご祝辞を頂いたり、お若い頃の教授のお姿がスライドで披露されたりと、非常に和やかなうちに、教授の御壮健を心からお祝いすることができたのではないかと感じております。

また出席者には、教授ご夫妻より記念品を頂きましたが、出席者一人一人の名前を奥様がお書きになっておられました。今更ながら、奥様のお気遣いに、とても感激いたしました。

医局を離れた現在も、医局離れのできない私は、術前カンファレンス参加を名目に、医局にちよくちよく顔を出させてもらっています。このように医局を今も身近に感じることができると、教授に大学に呼び戻して頂いたりや医局長勤務を命じて頂いた事によるものだろうとっております。人生のうちで、非常に特殊な1年間を過ごしたことは、私にとって、貴重な財産だと思っております。田島先生には、これかも、なお一層お元気で、いろいろご指導いただけることを、楽しみにしております。





## スポーツ医学

### 黒木俊政

宮崎医科大学整形外科教室におけるスポーツ医学の創始者は田島直也教授であった。私は宮崎医科大学整形外科教室には1984年に入局させていただいたのであるが、当時の教授は木村千仞教授であり、田島先生は助教授であった。私は大学での研修の後、いわゆる外回りを経験し、臨床のおもしろさに心躍らされていた反面、臨床医学を遂行する上でのバックボーンの欠如に心が揺れていた。ここでいうバックボーンとは、ある特定の分野での知識や議論では他人には負けないという自負を持った専門領域のことであり、当時の一般的理解においてはそれは基礎的研究を指していた。そして私はそのバックボーンを得るため、出身大学に戻り、研究生生活を送るのも一選択肢かなとも考えていた。

そんな折り、当時の田島助教授からスポーツ医学をしないかとお誘いがあった。当時のスポーツ医学に対する印象は、ただ単にスポーツ選手を専門的に「臨床」を行っている分野程度の理解しかなかった。しかし調べてみるとスポーツ医学には運動生理学的研究分野やバイオメカニクス研究等もあり、臨床と基礎医学がまさにリンクして活動する分野であることを知った。また自分自身が中学生の頃、野球のピッチャーとして成長期のスポーツ障害を経験していたこともスポーツ医学に興味を持つ一因ともなった。

そのような状況の中、スポーツ医学の熱気は九州でも高まりつつあり、1988年12月に福岡大学整形外科 高岸教授（当時）の号令のもと、第一回九州・山口スポーツ医・科学会が開催されることとなった。そしてそのテーマは「九州一周駅伝」であった。そしてこのシンポジウムのテーマはその後、しばらくの間は不動であり、数年間は各県とも陸上長距離選手を追跡することになった。九州一周駅伝といえば、当時でも宮崎の旭化成陸上部が群を抜いた存在であり、シンポジウムテーマが九州一周駅伝なら、旭化成陸上部の調査は必須であった。しかも研究調査項目を各県同じものにして、検査結果を学会で発表し合って検討するという、当時では画期的なアイデアを高岸教授が出され、宮崎県のシンポジストは田島助教授に決まった。

田島教授は早速旭化成陸上部の宗監督らに連絡を取り協力依頼を行った。幸いにして理学的診察、血液検査等は当時のスポーツ選手でもその必要性を十分に認識されており、旭化成陸上部の協力が得られることとなった。

しかし旭化成陸上部は多忙なチームであり練習に支障のない範囲での検査協力が原則であった。旭化成陸上部は延岡市が本拠地である。診察や採血等は延岡市で実行可能として、Cybexによる下肢筋力測定はどうする？といった事態が生じた。第2回九州・山口スポーツ医科学会のシンポジウムの検査項目にCybexによる下肢筋力測定が含まれていたのが、問題となった。

「Cybexを延岡に運んで測定しましょう」という田島教授の提案を受け、ディーラーさんや理学療法士の先生を巻き込んでのCybex搬送計画が持ち上がった。当時のCybexはCybex IIと呼ばれるもので、

まだコンピューター制御になっておらず、簡単な構造であった。従って現在の機種より軽量であったのは、運搬上好都合であった（その反面、筋力測定の結果を得るまでには、現在の機種には遙かに及ばないほどの労力を要するのが弱点である）。そしてCybex IIは延岡市の medical check 検査会場に到着した。検査会場は旭化成工場内に設けられていた。そこで当日、約30人分の筋力測定を行う予定であった。Cybex IIの荷ほどきを完了し、電力を入れるためにコンセントを探した。「あれ？コンセントの形状が違う！！このコンセントの形状はひょっとすると200V用なのでは????？」という危惧が頭中を駆け抜けた。そうだったのです。工場内の検査会場はコンセントはすべて200Vになっていたのです。当時は200Vから100Vへの電圧降下装置がレンタル屋さんで簡単に入手できることなど知りようもありませんでしたから、荷ほどきと同時に途方に暮れてしまいました。しかも30人の旭化成陸上部員の下肢筋力検査を行う日は、この日以外には予定に組めそうもありません。「困った、困った……。」と私が困惑していると、宗監督が「私の自宅にCybex IIを運んで、検査しましょう」と天使のささやきのような提案をしてくれました。それからまた荷造りをして、Cybex IIを宗監督の自宅に搬入し、検査が無事に終了しました。後にも先にも medical check が日本でも有名な宗監督の家で行われたのは、このケースだけです（ちなみに当時の宗茂監督の隣家は宗猛副監督で、家境にはフェンス等の仕切りが無く、庭の芝生は地続きになっているのは、印象的でした。また宗監督の廊下側の冷蔵庫には各種スポーツ飲料があり、筋力測定の終わった選手にスポーツドリンクを監督が勧めていました。「マラソンの時にはこんな甘いものは飲みませんよ」と我々に教えてくれながら……）。

写真1にあるのが、そのときの medical check の状況です。左端にいてCybex IIの紙送り装置を心配そうにのぞき込んでいるのが、筆者であり、現在とは比較できないくらい相当にスリムです。中央は旭化成陸上部の被験者、右端が当時の田島教授です。シャツの袖口をまくり上げ、Cybex IIの本体に手をおいて、験者としてこれまた心配そうに機械を見えています。当時の機械への信頼性の程度がうかがわれます。「頼むから30人分の測定だけは上手くいってくれよー」といった状況なのでしょう。田島教授も現在よりかなりスマートでいらっしゃるのが写真からうかがえます。背景に廊下のサッシや隣家の屋根が見えるところが、いかにも宗監督の自宅という民家で検査しているという雰囲気を現しています。

当時の medical check の概念では検査機械を用いる場合には「選手に当方に来ていただいて」検査するのが当然でした。しかし百キロの機械でも運べば、合宿所で検査できると考え方が大きく変化しました（もちろんコンセントの質問は事前に必ずしておきました）。この経験は貴重なもので、その後、我々はスポーツ選手の合宿所に出張して、Cybex、Kin-COM や Dynatruc 等の様々な機器を持ち込んで検査をするようになりました。しかしその裏では検査要員として協力していただいた教室の若き先生方、理学療法士の先生方、機器のディーラーの方等の苦勞の涙があったことを忘れてはなりません（「何で大学で検査せず、こんな合宿所の設備条件が悪いところで検査するんじゃー!!」という彼らの声がいまだに聞こえてきそうです）。

その後、スポーツ選手の medical check は運と人の巡り合いにも助けられ、旭化成柔道部、沖電気陸上部、宮崎県高校選抜スポーツ選手等々も対象とし、貴重なデータが得られることになりました。同時に県体協、教育委員会等の組織とも親密な連携をとれるようになり、宮崎県主催の各種大会や世界ベテランズ大会での medical check も行えたのは幸いです。そのような変化の中で田島助教授も教授となられ、宮崎医科大学整形外科教室のスポーツ医学は益々進歩していった。そしてスポーツ医学



の臨床にも研究にもある程度の自信と信頼が生まれつつあった頃、GOTS フェローの話が舞い込んできた。GOTS フェローとはドイツ、スイス、オーストリアのスポーツ医学会と日本整形外科スポーツ医学会の交換留学制度であり、約1カ月間をかけ、ドイツ、スイス、オーストリア3カ国のスポーツ整形外科の施設を見学して回るというものであった。3カ国の訪問施設は11カ所であり、11カ所の病院すべてで手術着に着替えて手術参加・見学およびカンファレンス参加、自分たちの持参した演題のプレゼンテーションと嵐のような忙しさで研修して回る制度であった。この制度は今では鬼籍に入られた元日本整形外科スポーツ医学会会長であり横浜港湾病院院長であった高澤晴夫先生の功績によるものであった。このGOTS フェローに日本側から3名の医師、韓国側から1名の医師が選ばれるのだが、田島教授の推薦が功を奏し、第2回目（1993）のGOTS フェローに選ばれたのである。

写真2は膝関節外科で有名なミュラー教授の手術を見学する際に、手術室でミュラー教授とフェローの4人がミュラー教授の著書を持って記念撮影をしている様子である。1人マスクをつけたまま、誰だか判らないのが筆者である。どの施設でもスポーツ選手の膝靭帯再建術は関節鏡視下で行っていた。たった1カ月の研修であったが、これは勉強になった。この研修を機会に関節鏡視下靭帯再建術を導入した。フェローとして研修したのが1993年6月～7月であり、宮崎医科大学整形外科教室ではじめての関節鏡視下靭帯再建術が同年の11月に行われており、当時かなり急いでいたことがわかる。

当時、すでに時代の主流は日本国内においても膝靭帯再建術はいわゆる「オープン」ではなく、関節鏡視下靭帯再建術であった。しかし宮崎県下ではまだ誰も関節鏡視下靭帯再建術にはチャレンジしていなかった。しかも宮崎医科大学整形外科では膝関節鏡は0°の関節鏡がスタンダードであり、30°の関節鏡は用いられていなかった。「時代はスコープ30°、靭帯再建は関節鏡視下で」と半ば呪文のように自分自身に言い聞かせ、スコープ30°での膝靭帯再建術を関節鏡視下で行うことに挑戦した。スコープ30°はスコープ0°に慣れていたので、最初からほとんど違和感はなかった。スコープ60°でも立体的に関節内部を意識内で再構築できた。問題は関節鏡視下靭帯再建術である。当時の手術記録を確認した。宮崎医科大学整形外科教室の最初の関節鏡視下靭帯再建術の手術時間はなんと4時間を要していた。しかも手術術式は当時一番簡単で確実なBTB法(Bone-Tendon-Bone)を用いて、4時間も要していたのである。これは現在の諸先生方の靭帯再建術と比較してかなりの長時間の手術になるのではないだろうか。しかしこれが当時の医療水準であり、手術に際しての手術助手の先生方や手術場の看護師さんの方々のご苦勞は大変なものであったに違いないと感謝している。

そのような時期に田島教授は常に暖かく教室のスポーツ班を指導していただいた。また関節鏡視下靭帯再建術を導入した当時において、田島教授がその手術術式についても一番の知識とご経験をお持ちでした。そのため田島教授の存在により、周囲は大変心強く思っておりました。しかし田島教授は自身の膝関節外科の豊富な知識にもかかわらず、その手術術式や術後のリハビリ計画などについて、自身から「口を挟む」ことは謹んでおられた様子でした。それはまさに常に若い医師たちが自由に最良を求めて議論し、治療方針を決定するのを、後ろから見守る姿勢に貫かれておりました。そのためスポーツ班と呼ばれる我々は田島教授の掌上で自由にさせていただいている子どものように、伸び伸びと診療研究ができたのは幸せでした。そのような恵まれた環境からスポーツ班の臨床症例、学会発表演題数や発表論文数も飛躍的に伸び、宮崎のスポーツ医学も進歩していきました。

その後、優秀な先生方が次々とスポーツ医学を専門分野とされ、関節鏡視下靭帯再建術のみならず、

スポーツ医学が宮崎の地で根付き、進歩していていることは田島教授のご功績の依るものと思いません。今後も引き続きスポーツ医学も進歩させていただきたいものだと思っています。

上記の膝靭帯再建術に関する事実は1993年のことであり、まだわずか10年前のことです。しかし現在の靭帯再建の状況を考えると、隔世の感があります。

近年のスポーツ医学の進歩のみならず医学全体の進歩は、医師側が追いつこうにも追いつくのが困難なほど、そのスピードを増しているようにも思えます。時にはそのスピードのすさまじさに、医療の本質を見失いそうになり、医師として呆然とすることもあります。しかし、そのような状況にあっても、医療の本質は普遍でしょう。そして医療の本質に欠くことができないのは医師と患者間の信頼です。医師・患者関係には信頼があってこそ、「よい医療」が提供できることでしょう。田島教授にはそのような医療の本質に関わる医師としての生き方さえご指導いただいたような気がします。田島教授と宮崎医科大学整形外科学教室で出会えた幸運を今更ながら感謝している次第です。ありがとうございました。

今後益々の田島先生のご発展をお祈りいたします。



写真1



写真2



## 田島教授のもとで—脊椎班・私見—

久保 紳一郎

使い古された言葉ですが時間の流れは年をとるにつれ速くなり、入局して15年もの時間が過ぎ去りました。研修医時代、当時アメリカから留学しておられたSmith先生と田島先生の長崎の御自宅まで御邪魔したことがつい昨日のこのように感じられます。

私が入局しました当時、田島先生は助教授&脊椎班の長として川野啓一郎先生、松本宏一先生、田代宏一先生らとエネルギーに臨床・研究に当たっておられました。入局したての私の目には「PL fusion」、「田島式3-S Instrument」、「田島式フレーム」など目新しいものばかりでオリジナルの気概に富んだ先生と映りました。

また、研修医の私に初めての脊椎手術執刀をまかせていただき(?)、イヌの椎弓切除でしたが自分で椎弓を削り、神秘的な脊髄を露出させるだけで非常に感激したのを今でも鮮明に覚えています。(もっとも続けて脊損実験を行いましたので残念ながら成功したかどうかわかりませんでした。) 教授に就任されてからは「整形外科医なら脊椎も切れて当たり前」との方針で歴代の先生方に加え桑原先生、平川先生、福田先生など多くの先生方が田島教授のもとでいまや特殊な分野でなくなった脊椎外科を発展させてこられました。

この辺りの大学の様子については実は私自身は関連病院勤務の最中でよく知りません。大学へ帰ってしばらくたったあるとき、精密なmicrosurgeryに惹かれたこととリスクの高い脊椎・脊髄は分不相応と感じたことから、手や形成外科の勉強をしたいと田島教授に申し出ましたところ、microがしたいんなら脊椎でやってみなさいと言われました。それまでどちらかという脊椎に関しては「顕微鏡は必要ない」という職人氣質を周囲に感じていた私にとっては「あれ?」という感じでしたが、その後言葉どおり、全面的に応援して頂きました。

自勝手流で始め、少しずつ周囲の先生方の協力を得(ブレインウォッシュとも言う?)、現在では教室の脊椎手術においてmicrosurgeryは日常的なものになり、その反面、変性疾患に対するinstrumentation適応は限定されてきました。全国的にもほぼ同様な傾向が生まれつつあるのではないかと感じている昨今です。

余談ですが、脊椎内視鏡手術も手術用顕微鏡並みの立体視とシンプルさが確立されればもっと普及することは間違いないでしょう。そのほか経験のない手術や、単なる思いつきのような新しい試みについても私見をもって「ダメ」と言われた事は一度もなく、「やってみなさい」と積極的姿勢を好まれました。このことこそが私が脊椎外科に興味ややりがいを感じる動機となって今に続いているように思います。自分が指揮官の立場であったらと考えますとなかなか難しいことだと思います。

時には親子ほどに年の離れた私の傍若無人な反論・愚論も真剣に聞いてくださるのが常で、今思えば「親の心、子知らず」だったと反省することしきりです。また、ある程度の脊椎手術を経験します

と結果が悪い症例や予期せぬ合併症に少なからず遭遇しますが、決して術者を責める事なくじっと話を聞いてくださりどれだけ励まされたかわかりません。

御存知のように全国規模の学会もいくつか主催され、なかでも2002年6月にシェラトン・グランデ・オーシャンリゾートで行われた日本脊椎脊髓病学会は日整会につぐ規模の学会でありスタッフの少ない我が医局で大丈夫かと内心少なからず不安に感じておりました。しかし、準備段階から適材・適所、任せられるところはすべて信頼して各チーフに委ねるという田島教授の采配で、無事成功裡に終わり「組織力は人数ではない」という画期的な教訓であったと思います。スポーツ・バイオメカなどの全国学会もありましたが、やはり最後に最も御専門の本学会が主催できてほんとうによかったと感じております。

今から振り返って見ますと笛吹けど踊らずの我々（私だけだったりして……）にずいぶん歯がゆい思いをされたことと思いますが、時代とともに手技は変わっても「田島式」脊椎外科は言葉通り脊椎班の「Backbone」となって今後も続くであろう事を銘記したいと思います。





## 田島直也先生のご退官にあたり

園田典生

私が入局した年は木村先生が教授で田島先生が助教授の時であった。今考えると入局当時は病棟業務と野球に追われ、あっという間に時間が過ぎていった。入局して1年後には田島先生が教授に就任されその年の9月に田島教授ご夫妻のお仲人のもとで挙式をあげることができた。その3カ月後から済生会日向病院へ出向し出向先から初めて県外での学会（京都で行われた日本側彎症学会）で発表したが一人で心細い気持ちで学会へ行き、会場で田島先生が来られており安心して発表できたことを覚えている。

日向病院の後私には学外での出向が続き大学へ帰ってきたのは平成7年2月であった。そして上肢、下肢グループを経てスポーツグループが独立した際にスポーツグループへ配属していただいた。配属にあたり短期ではあるが県外へ関節鏡のトレーニングへ出させていただいたことは現在でも私の中で貴重な財産となっている。もともと、学生時代から整形外科へ入局を決めており特にスポーツ医学へ興味があることはそのころより田島先生には機会があるたびに話をさせていただいていた。今考えると1学生が言っていたことを覚えていただいていたことは今実際に教官として学生に接する立場になって初めてわかるがすごいことである。

スポーツグループになり関節鏡視下手術を中心に診療を行う中で県スポーツ医学研究会、九州・山口スポーツ医・科学研究会の事務局を先生のもとで担当し、県内はもとより県外のスポーツ医学で活躍されている先生方と話ができる機会が増えるに従い、改めて田島先生がこの分野において貢献されてきたことが再認識できた。平成12年10月28日・29日に第11回日本臨床スポーツ医学会学術集会を九州では初めて開催し、無事終了できたことも私にとっていまは良い思い出となっている（同門・教室の先生にはお世話になりました）。



第11回日本臨床スポーツ医学会学術集会（シンポジウム）

その次の年は医局長にご任命いただき、それまでとはちがう生活となった。田島先生と2人で話す機会が増え、大学へもネクタイ姿で出勤する機会が極端に増えた。県内・外の先生方と話すことが多くなり社会人としての認識をより深めることができたと思う。何かをご決断にされるにあたり田島先生からご相談いただいたことは今後、自分が何かを判断するにうえでは参考になることであろう。私が医局長のときは特に大きな学会を開催することはなかったがあの1年の経験は貴重な財産である。

その次の1年は診療しながら学位取得準備に追われた1年であった。医局長の1年間はできなかった分をとりもどすべく、田島先生に尻をたたかれながら11月に予備審査を無事に終えることができた。年明けすぐに本審査が待っている。おそらく学内にいままで在籍させていただかなければできなかったことであり感謝申し上げます。

ご退官されても今までとかわらないご指導をいただけることをお願い申し上げます。

本当に御疲れさまでした。





## 医局長時代の思い出

黒木 龍二

平成11年1月1日より、平成12年12月31日までの2年間を医局長として務めさせていただきました。以前もこの会誌に書きましたが、前年の9月頃から当時の柏木医局長より次期医局長の話題が出始め、11月に教授から正式な通達を頂きました。当初1年間は何とか耐えようと覚悟を決めて引き受けましたが、結果的に2年間務めてしまいました。過去に医局長を2年以上務められたのは、武内先生、平川先生、帖佐先生という大御所ばかりで、自分は1年だけ頑張り、後は園田へ引き継ぐように根回しをしようと考えておりました。しかし根回しが少し遅れてしまい、園田への引き継ぎも1年遅れてしまいました。

私の在任中に開催された主な行事は、第5回日本リハビリテーション医学会九州地方会（平成11年2月）、第17回九州リウマチ学会（平成11年3月）、三水会100回記念講演会（平成11年7月）、第98回西日本整形災害外科学会（平成11年11月）、第11回日本臨床スポーツ医学会（平成12年10月）等です。お気づきのように九州内の輪番性の学会、研究会がたまたまこの年に集中し、また巡り合わせが良いのか10年近く前からほぼ毎月開催しております三水会がよりによって丁度100回を迎える年でした。お陰様で全国の著名な先生方を田島教授とともに多数お迎えし、食事を交えながら貴重なお話を聞かせていただきました。

業務の中で辛かったことはやはり教室員数の不足でした。平成11年1月時点で確か7名の退局（開業、結婚など）がありました。さらに平成11年2月に全国に先駆けて研修医ローテーション制度が決定しその年の新入局員から実施すると通達 came ことで、突然関連病院の見直しを考えざるを得ない状況になってしまいました。やむを得ず関連病院の縮小を検討することになってしまい、いくつかの医療機関、遠いところでは東京まで田島教授とともに頭を下げて伺いました。このことに関しては多数の病院や関係者に多大な御迷惑をお掛けしましたことをこの場をお借りして深くお詫び申し上げます。

楽しかった思い出としては、日整会親善野球大会に幸運にも2年連続で出場し、同行したことです。平成11年が横浜、12年が神戸での開催でしたが、期間中は午前4時頃起床し、5時頃ホテル従業員から白い目で見つめられる中全員ユニフォーム姿で出発。試合会場にはどの大学よりも早くまだ薄暗いうちに到着し、田島教授のダッシュを皮切りに練習を開始。相手が到着した頃には準備が整っており、すでに体力の半分以上を使った後6時頃より試合を行い、8時頃試合を終えてホテルに到着。朝食、シャワーの後は一部の体力の残っている人間は学会場に向き、体力を使い果たした人間はそのままホテルで次の試合に備えて充電を行っておりました。ちなみに私はというと体力を使い果たしていました。試合の方は残念ながら優勝はできませんでしたが、何せ15～16人の大所帯での遠征ですので昔の修学旅行を思い出させる楽しさがありました。

振り返ってみますと医局長の仕事はもちろん大変で、私にとっては2年が限界でした。それまで関連病院への出向が長く、医局のことを他人事のように考えていた私にとりまして、医局長でないと思われる様々な事情、現実と直面し、それを解決していくことは決して容易ではありませんでした。とくに1年目は頭を痛めることの連続で、最初の数カ月間はおそらく毎日のように田島教授の部屋へ伺い、長時間相談を聞いていただきましたが、田島教授は私が持つていく案に対して決して否定することではなく、また御自身の考えを強要することも一度もありませんでした。教授は御存知のように口数はそれ程多い方ではなく、また日によっては世話話だけで終わることもありましたが、その言葉の端々に参考となる考えが多く含まれており、それを聞くために毎日伺っていたような気がします。

平成1年の入局である私たちの同期が田島教授の「助教授」時代を知る最後の学年です。入局した当初私たち研修医をよく焼き肉に誘って下さり、その際は仕事の話はほとんどされず、世間話を楽しそうにされておりました。教授となられてからは一医局員として教授と世間話をする事などは当然ながらほとんどなく、私たちにとりましてはかなり遠い存在でありましたが、医局長を経験させていただいたお陰で、失礼かもしれませんが大変親しくさせていただき、車まで田島教授と同じ某ドイツ車に乗っております。そのような次第で医局長を交替した後も、ときどき相談を聞いていただいております。

最後になりましたが、田島教授は現在でも現役で野球ができるほど健康でいらっしゃいますが、これからもお身体には十分ご配慮いただき、整形外科医の大先輩として私たちの御指導を引き続きお願い致したいのは当然ですが、たまには世間話もさせていただくと幸いに存じます。







## 田島教授との思い出

### 工藤 勝 司

田島教授の御退官にあたり、1期生であります大田、黒木、樋口、松元、工藤の5人（伊勢先生をいれさせて頂くと6人）を代表してお話しさせていただきます。

平成2年4月入局時は平川先生が医局長をされており、脊椎班―田島教授、松本先生、RA・下肢班―伊勢助教授、三股先生、股関節班―長鶴講師、帖佐先生、上肢班―山口先生、戸田先生、中村先生といった学識、実績を兼ね添えておられる先生方に御指導して頂き、本当に感謝しております。この場を借りて、御礼を申し上げます。その後、私は、関連病院にての研修を希望し、学術面を含めて教室に、ほとんど?いや、全く貢献できずに大変もうしわけなく、お詫び申し上げます。その懺悔の気持ちをこめて、この原稿を書かせて頂いております。

そんな私の、教授との一番の思い出となると、どうしても、野球のこととなり申し訳がないのですが、平成5年の山口大会で準優勝して全国大会初出場の夢を果たしたことです。入団4年目のことでした。今では常勝軍団として有名になりましたが、それまでは、なかなか勝たせてもらえませんでした。後で教授に聞いた話ですが、平成2年組が入局した年にすぐに優勝できると過大評価されていたようです。まず、平成2年長崎大会は、1回戦で教授の母校である長崎大と対戦し何とか勝つ事ができ喜んでおりましたが、2回戦で負けてしまいました。その試合で同期の松〇先生が投球練習中に足がつってしまい、みんなは笑っていましたが、教授だけは「走り込みがたらん!」と怒りの表情をされていたのを思い出します。翌平成3年熊本大会は、1回戦で負けてしまい愕然とした表情をされたまま樋口先生のセフィーロに乗り込まれ走り去られていかれました。それは8月4日まだ午前8時頃でした。この車には、私の記憶では現鳥取部夫人の金丸さんも同乗されていたと思います。さぞお二人は、宮崎までの約3時間、辛かっただろうと思います。あの時は、お疲れ様でした。平成4年鹿児島大会のことは不思議となにも思い出せません。そしていよいよ平成5年山口大会ですが、この時は貸切りバス（JR レッドライナー）での約7時間の遠征でしたが、往路は教授の禁酒命令にて、翌日の試合に備えておりました。この時、1軍登録は9人しか登録されておらず（ピッチャー矢野、キャッチャー工藤、ファースト浪平、セカンド新人の川添、サード松元、ショート福元、レフト柳園、センター関本、ライト黒木）交代する選手はいないという、先行き不安な状態でした。しかし全員が、力を出し切ってなんとか準優勝することができました。なかでも、最終回、1点差ノーアウト満塁のピンチに登板し見事な火消しを演じた同期の松〇先生の雄姿と、当時世界最大のセカンドと言われた矢野先生の華麗な?ダイビングキャッチが忘れられません。教授にも大変喜んで頂き、復路のバスのなかでは、ビールまでついて頂き、宴会状態で楽しい時間をすごさせて頂きました。以上、昔の記憶をたどりながら書かせて頂きました。田島教授、13年間本当にお疲れ様でした。今後とも御指導のほど宜しくお願い致します。



## 田島教授とスポーツ医学と私

樋口潤一

この度、田島教授が退官されるにあたり田島教授一期生としてスポーツ医学を通じて教授と接してきたこれまでの思い出をいくつか紹介したいと思います。

### 出会い

卒業後の進路（スポーツ選手（サッカー）に関われる仕事）を考えていたとき、父から当時助教授であった田島先生にお話を聞きに行ったらどうかとのアドバイスがあった。宮崎に戻るつもりはあまりなかったもののスポーツ医学に関しての話が聞ければと思い田島先生を訪ねた。そこでは、スポーツドクターの認定制度から整形外科医としてどのようにスポーツ現場と関われるかという具体的な話をうかがうことが出来、自分の将来目指すべき方向性をはっきりさせることができた。その後田島先生が教授になられると聞き、宮崎医科大学整形外科への入局を決めることとなった。入局後は田島先生の元、ほとんどスポーツ整形外科的なことばかりをさせていただき、現在に至っている。

### 九州一周駅伝競走大会

平成5年第42回九州一周駅伝でドクターカーでの伴走の依頼が各県に割り当てられることとなり、宮崎県にも鹿児島一宮崎、宮崎一延岡、延岡一大分の三つの区間の割り当てが来た（実際の依頼は田島先生のところに来ていた）。その当時スポーツ班は黒木俊政先生と大学院生だった私の二人で活動していたが、ある日、田島先生が「僕が宮崎一延岡を担当するから後の二つを二人で決めて」とドクターカー伴走の依頼文書を持って来られた。一瞬、二人で顔を見合わせ何のことかなと思ったが、九州一周駅伝で宮崎県チームにとってのお国入りとされる宮崎一延岡間を田島先生自らドクターカーで伴走された（当日朝、私は県庁前のスタート地点に選手の写真を撮りに行ったが田島先生は支給されたウィンドブレーカーと帽子を被ってニコニコしながらドクターカーに乗り込まれた）。

### 世界ベテランズ陸上競技大会

宮崎で開催された大会で、最終日のマラソンにあわせて選手の採血を行うこととなり黒木俊政先生を中心とした採血グループは市営球場前に採血場所を確保し、参加選手の競技後の採血を行っていた。予定していた採血が終わり、その日競技場内救護所の様子を見に行くのと田島先生が走り終わった選手の足の靴擦れやマメの処置を忙しそうにされていた。何となくうれしそうに選手と話しをしながら処置をされていた田島先生の姿が印象的であった。

ここまでの話で田島先生がいかにスポーツ医学に対して情熱を持ち、スポーツの現場にでる事が好きで、それを大事にされていた事がわかっていただけるかと思います。病院での診療ではふれることが出来ない選手や指導者の本音や本質を感じ取るには現場に行くのが一番であることを身をもって教えていただいていた事で、今の自分のスポーツドクターとしてのスタイルが確立されたと思っています。大学にいた頃も関連病院へ出向になってからも帯同で国内外に遠征に行くときにそのことを報告

に行く“笑顔で”がんばってねと言って下さる田島先生、これからは教授という肩書きがとれ尚一層スポーツの現場に出向かれる機会が増えるのではないかと思います。私も今後もスポーツ選手とスポーツの現場を大事にするスポーツドクターとしてがんばっていかうと思っていますのでご指導のほどよろしくお願いいたします。





## 教授との思い出

末 永 治

私は、平成3年に宮崎医科大学整形外科教室に入局しました。教授は大変野球に熱を入れられており、球技が非常に苦手な私は朝練が全く苦痛でありました。朝早くから元気にグラウンドに立つ教授の姿に、ただただ圧倒されていました。野球だけでなく医師としてもクエスチョンマークの私にも温かく接していただき、また、仲人も引き受けていただき大変感謝いたしております。これからも元氣にご活躍されることと思います。お体に気をつけて、引き続きの御指導、御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。





## 田島教授お疲れ様でした

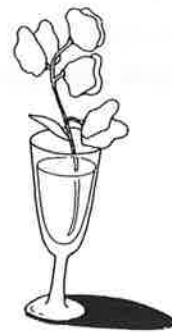
松岡 知己

田島教授退官お疲れ様でした。

私が整形外科に入局して早12年が経ちました。知識のない状態で色々と迷惑をかけていましたが暖かく指導いただきました。さらに、1年目の医局対抗野球大会では皮膚科との戦いでスクイズ見落とし、さよなら暴投と敗因となったのが一番迷惑かけたと思っています。先生がよく言われる、よく学び、よく遊びの方針でしたが、よく学ぶがなかなかうまくいきませんが今後がんばって行きたいと思います。

早朝の野球の練習では先頭に立たれて真剣にがんばられている姿はすごく頭が下がる思いです。整形外科の全国大会で優勝ができていないのが残念ですが、西日本野球大会の常に優勝候補になっているのは先生の情熱の賜物と思います。

まだまだ先生からの御指導していただくことがたくさんありますので、お体に気をつけられてますますがんばられてください。





## 田島先生との思い出

飯 干 明

私は、入局後、大学には半年しか居りませんでしたので、田島先生との思い出を語るには大変おこがましい限りですが、僭越ながら筆を取らせて頂きます。さて、一番最初の思い出といえば、入局前に挨拶にお伺いした際に「君、少し黄色くないか？黄疸かもしれないから血液検査をしときなさい。」と言われ、慌てて近所の病院を受診したことです。結局、血液検査で異常はなく、「元々そういう顔色なんやろ」と診ていただいた先生に笑われました。

入局後、大学在職中の思い出といえば、やはり野球です。いつでしたか、早朝の練習に間に合うように、当時1年目Drの当直先であった財部町立記念病院を朝5時30分に出て、車をぶっと飛ばし、大学に一番乗りで着いたと思いきや、暗闇のグラウンドに響く軽快な足音。その主は田島先生でした。その後のキャッチボールであぶれた私と組んで頂き、私が睡眠不足と早起きのため暴投しても、黙々とボールを取りに走って下さった先生の後姿が印象に残っております。

その後、私が大学を出てからの思い出で、一番に挙げるならば、冠婚葬祭に関することです。私は平成5年に結婚しましたが、その際、田島先生御夫妻に仲人をして頂きました。そのとき頂いた写真立ては、今でも大切に使っております。平成6年に父が逝去しましたが、その後の年1回の教授面接の際はいつも「お母さん、元気にしてる？」と母を気遣って下さいました。有難うございました。

私は平成12年1月から、NTT西日本九州病院に勤務しておりますが、熊本へ赴任する前の同門会で先生に頂いた「頑張れば道は開けるから！」という激励のお言葉と、以前の教室会議で先生が掲げられた「戦う宮医大整形外科！」のスローガンを心の糧として、宮崎を離れた当地熊本で、日々診療しております。

まとまりのない文章となってしまいましたが、最後に心からお礼を述べさせていただきます。

田島先生、御指導、御鞭撻頂き、有難うございました。



## 教授との思い出 (平成4年入局を代表して)

後藤 啓輔

私たち平成4年入局組は、10名でした。入局者数は、当教室始まって以来最大でした。具体的名前は、野球部出身である福元洋一さんと関本朝久くん、ボート部出身の飯干明くん、軟式テニス部出身の本部浩一さんと渡部正一くん、硬式テニス部出身の坂本武郎くん、サーフィン部出身の吉田好志郎さんと渡辺信二くん、バドミントン部出身の私、自動車部（モータースポーツ部）出身の山口政一朗くんであります。田島教授は、野球部の顧問でもあり、スポーツ（野球・バスケット）が好きという話は、学生たちまで有名でした。それが理由かどうかわかりませんが、他年度入局者同様、医学部ではありますが体育会系が集まりました。

野球部の福元くんや関本くんは、田島教授のことを良くわかっていたかも知れませんが、彼ら以外、私も含めて教授の事は殆ど存じ上げず入局しました。

入局してから研修医の時代の思い出は、毎週火曜（その後水曜に変更）・土曜の朝（その後日曜の14:00～に変更）6:30～7:30 野球の練習を中心に仕事を考えておりました。特に火曜日の教授外来の陪席があたっている時は、野球の練習を休んだ時の気まずい雰囲気避けるため、たとえ鹿児島県（財部の病院）で当直していようと4:30に起床し、5:00に出発していたのが、今とても懐かしく思います。当時、すでに50代半ばに達していたにもかかわらず、今もですがとても元気で、我々が6:25頃にグラウンドにいくと教授は既にアップを終えておりました。はじめの頃は「6:30からすぐトスバッティングができるように、6:30より前にアップをしましょう」といわれておりましたが、さすがに誰もこれにはついていけませんでした。

その後、6年目ぐらいになると、教授も野球の話以外に脊椎外科の話をしてくださるようになり、“やっと野球の駒から少し成長したのかな”と少し自分で成長したような錯覚を覚えました。この頃から現在まで、日本脊椎や日本側彎症学会、腰痛学会、臨床バイオメカ学会、日本脊椎脊髄病学会などの大きな学会の会長を歴任され多忙を極め、はたから見てもすこし手を抜いてもいいのではと、思っておりました。しかし、私を含め皆様が御感じのように、田島教授は、教授には珍しく（他の教授のことはあまり知りませんが）誠実で、敵を作らないお人柄にて、他大学の教授からの信頼も厚く新設医科大学にもかかわらず、このような業績をあげられたものと思います。最後に、脊椎外科を中心に、御教示頂きありがとうございました。長い間、教授の激務本当にお疲れ様でした。



## 医局長時代の教授との思い出

渡 邊 信 二

田島先生 御退官おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。私が医局長になったのは園田先生のあとを受け継ぎ平成14年1月からでまだ現役です。医局長時代の教授との思い出ということですが、現在進行形ですので最近のことを中心に書きたいと思います。

【日本医師会野球大会】これは医局長になる前の話です。21世紀を迎えて日本医師会主催の記念事業として全国親善野球大会が開催されました。全国を四つのブロックに分け、それぞれの地区で勝ち上がった県の医師会が一堂に集まり平成13年9月20日と9月24日に東京ドームで試合を行いました。

6月25日に秦県医師会会長から田島教授に監督要請があり、我が整形外科教室の精鋭を中心にメンバーを組み地区予選に臨みました。地区予選といっても広島県医師会との一戦だけでしたが福岡の球場で試合を行い、3対0の快勝でした。その後、日本医師会からユニホーム一式を頂き、数回の練習試合と合宿を経ていよいよ本番です。9月19日に東京ドームホテル入りし20日早朝の第一試合で東京・関東甲信越代表チームとの試合です。教授も我々も東京ドームのグラウンドに立ったことはなく、ましてや試合ができるなんて思ったことなどないので少々（かなり）興奮しておりました。その中でも教授は冷静さを失わず采配を振るわれ、3-0で危なげない勝利を得ました。午後の懇親会は教授は用事があるため欠席されましたが、他のチームをみると殆どが開業のA会員の方ばかりで年齢も上は70歳を超えている方もおられたようでした。我々のチームだけが何故か年齢が若く他のチームからの熱い視線を感じました。一旦宮崎に戻り、9月24日に決勝戦が行われました。相手は東北・北海道チームで準決勝の時とは違い少し若手も入っているようでした。結果はまたしても3-0の快勝でした。途中ノーアウト満塁の危機もありましたが松岡篤先生のピッチングが素晴らしく結局得点を取られませんでした。また、決勝では田島監督の采配で全員に出場機会が与えられ、みんな良い思い出になったものと思います。監督や選手、応援していただいた方全員で勝ち取った勝利でした。

【日整会野球大会】第75回日本整形外科学会親善野球大会は平成14年5月16日から19日の日程で岡山市にて開催されました。教授就任最後の全国大会制覇のチャンスでかなり気合を入れて臨みました。しかし、一回戦は前夜祭の時点で雨天中止が決定しており、翌17日も球場へのタクシー移動中に中止が決定。どうなる事かと思いましたがさすがに晴れの国岡山というだけあって何とか18日の朝は天候が回復し、東京女子医大との一回戦が行われました。教授も選手も待ちに待った試合でかなりの気合が入っており、まったく手を抜かず結果は6-1の快勝でした。女子医大の先生方ごめんなさい。



2回戦は19日の朝に主催校の岡山大学と市内の球場で対戦する予定でしたが、我々の試合の前に琉球大学とどっかの大学が試合をしてました。我々もアップをかねて球場裏と通路でランニングや柔軟をやっているとザーッと音、雨です。それもバケツをひっくり返したようなすごいやつでたちまちグラウンドは水溜り状態になり、試合中止に……。これで平成14年の日本整形外科学会親善野球大会は終わりました。

【日本脊椎脊髄病学会】日本脊椎脊髄病学会は平成14年6月6・7日にシェラトン・グランデ・オーシャンリゾート・ワールドコンベンションセンター・サミットにて開催されました。4つの会場で1200名以上の参加者があり教授就任中の最も大きな学会でした。こまごまとしたマイナートラブル(弁当など)は有りましたが、概ね順調に開催運営できたと思います。これまでに日本臨床スポーツ医学会や日整会スポーツ医学会等の全国レベルの学会をこなして来ておりましたので主催する側としての要領は十分に把握できていたと自負しております。これも田島教授の最後の学会で恥をかかせてはいけないと教室員全員が思っていたからだと思います。教授が学会後の打ち上げで「ありがとう」の一言をいわれ、頭を下げられた時にそれまでの我々の苦労は報われました。

私が入局し11年という時が流れ、教授の御退官という現実を迎えましたがこれほどまでに祝福され敬愛されて退官される先生はいなかったように思います。我々は田島教授門下生であると胸を張っていえます。

田島先生長い間お疲れ様でした。ありがとうございました。

第76回日本整形外科学会親善野球大会の名誉監督という仕事が残ってます。くれぐれもお体をご自愛ください。





## 教授との思い出

川 添 浩 史

教授との思い出を語る上で野球のことは切り放せないでしょう。

思い起こせば10年前、私が宮崎医科大学整形外科に入局しようかな、と迷いつつ挨拶にうかがった際、教授からの一言は、“野球部だって、キャッチャーらしいね”でした。後は何を話したかは忘れました。入局したと言うことはその一言に感銘を受けたに違いありません。

入局後、整形外科の勉強のすぐ次ぎ位に野球のことを考えていました（多分）。

野球の練習の日の朝、目を覚ますと外は雨。地面を見ると野球は出来そうになさそうだ……でもここは熊野、清武は晴れているかもしれない、と車のワイパー全開でグラウンドに向かうとなんと雨は降っていない、教授が1人ベンチでたたずんでいる。あー来て良かったと胸をなで下ろし、教授と“誰も来ませんねー”“市内は雨なんではないかねー”てな会話をしながらキャッチボールをしたことが思い出されます。また、どうみても土砂降り、清武も土砂降りだろうってときも、一応念のためグラウンドに出かけ、教授の姿が見えないことを確認し、もう1回寝直したことも昨日の事のようです。

このような厳しい姿勢で野球に取り組んだおかげで、全国大会にも何回も出場させていただきました。野球を通じ多くの先輩の先生方とも仲良くなれ、今になっては貴重な経験をさせていただいたと感じています。仕事以外に自分の興味有ることを持ち続ける事は若さの秘訣でしょうか。還暦すぎて尚、様々な学会活動や講演活動等精力的に全日本的に活躍される姿には、失礼な言葉かもしれませんがただただ感心させられるばかりです。今だ若々しい田島教授の姿をみるとこの度の御退官が惜しい気がします。御退官といっても医師として大先輩である事には変わり無く、活躍の場を新たに移すだけのことと思っています。今後も引き続きご指導宜しくお願いいたします。長いあいだ本当にご苦労さまでした。



## 教授との思い出

### 濱田 浩朗

この度は永年の教授職を全うされ、御退官のことおめでとうございます。我々一同入局後、長年にわたり御指導いただき感謝の意に耐えません。また、教授と共に苦勞を伴にされたご家族の方、諸先輩方におかれましてもあわせて御礼申し上げます。

思い起こせば、我々平成5年度入局者（塩月、野辺、川添、濱田）は、まだ、田島教室の新体制になって間もなく入局した組であり、その間、10年もありますと、色々な出来事が思い起こされます。しかしながら、この度、教授退官に当たり時間のたつのが早く感じられ、一つの時代が終わったような寂しい気さえいたします。

さて、10年前、野球のできる組（川添、野辺）、下手な組（塩月、濱田）でスタートした平成5年組は、以下のような経過をたどりました。

#### 第一章 早朝編

##### <野球のできる組>

- 1) 朝起きたら、朝食をとり motivation を高めてグラウンドに
- 2) キャッチボールで肩慣らし
- 3) バッティングはもちろん内野
- 4) 打撃練習はもちろん真剣勝負
- 5) 終わったら、ポカリをぐっと一息!

##### <野球の下手な組>

- 1) 朝起きたら、教授がこられる前に医局へ行って、バット、グローブ、ボールの準備（一度、寝坊してボール係が遅くなり練習がランニングと素振りだけになってしまった事がありました。10年は時効です）
- 2) なるべく見えないところで肩慣らし（教授とのキャッチボールで warming up を倍させてしまいました。これも時効です）
- 3) バッティングは進んでライトの奥（間違っでセンターに行こうものなら人数が少ないと、ショートも兼ねることになります、フライが捕れなかつたら……？もちろんご存じですよね!）
- 4) 打撃練習はもちろん必死！放物線を投げられても対数線状に打ち返す。（実際は、時間がなくて多いと外野まで廻ってきませんでした）
- 5) “やっど、アップが済んだのに？”と言いながら後かたづけ。

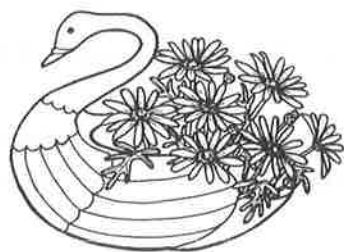
## 第二章 臨床編

何を期待しているのですか？野球のうまい下手が関係あるわけないでしょう！みんなで一生懸命に取り組むことが大切なのです。ここでは僕らは分けられません。

教授はおっしゃっていました。“医療も野球もチームワークだ”と。この先僕らは仲良く成長し、みんなで、立派？な専門医になりました。

終わり

この度、現職を退かれることは誠に残念ですが、今後とも御指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。





# 田島教授との思い出

山本 恵太郎

田島教授ご退官おめでとうございます。また、長い間お疲れさまでした。

平成 15 年 3 月で退職されることは十分承知しておりますが、いざその時が来ることが想像できませんし、そのことを考えると寂しい気持ちで一杯です。

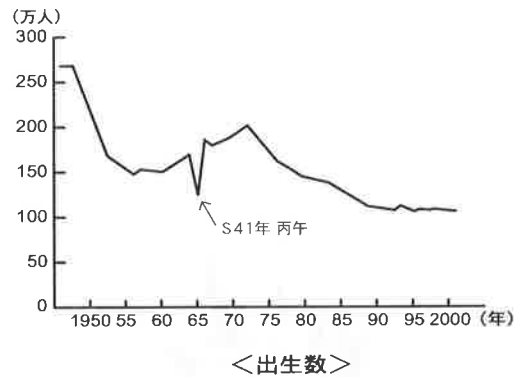
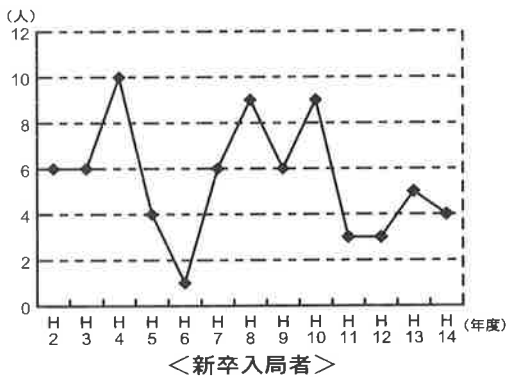
自分は平成 6 年度に入局させていただきましたが、新規採用者は一人でした。

教授が就任されてからの新入局員数は下表のごとくです。

	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14
新 卒	6	6	10	4	①	6	9	6	9	3	3	5	4
既 卒	0	1	0	1	1	3	0	0	1	1	0	1	1

ちなみに新卒のみをグラフにしてみると下のようになります。

## 戦後の人口動態の推移



どこかで見たことのあるグラフだと思えば、人口動態統計での出生数グラフの昭和 41 年丙午生とそっくりです。ちなみに自分は昭和 41 年丙午生まれなのでなにか縁があるよう（というか、これが自分の宿命みたい？）ですが、まさに“谷間の世代”“谷間の一年”であり、教授ならびに諸先輩達にもご迷惑ばかりかけてしまいました。しかし、逆に自分は幸いにも随分可愛がっていただきました。教授からも「けいたろう君元気にしてる？」とか、いつも「けいたろう君……」と声をかけていただいたことが印象的です。また、自分はサッカーをはじめスポーツが非常に好きで、入局時よりスポーツ関連に携わりたいという希望を出していたところ、教授より 4 年目で日本体育協会のスポーツドクターの受講推薦をいただき、現在では大学のグループの一員に入れさせてもらってます。感謝の念で一杯です。

野球に関しては恐らくほとんどの人からコメントがあることと思いますが、自分も少しコメントを。教授は“やるからには何事も一生懸命やる”と常々おっしゃられて、野球もしかりです。1年目の朝の野球の練習は本当にきつかったです。何がきつかったかと言えば、朝起きなければいけないプレッシャーは相当きつかったです。病棟の仕事は山のごとくあり、いつも目一杯でした。そして、今と違って野球道具を球場に置いておくことができなかつたので、1年生が荷物係。つまり、ずっと自分が持ち運ばなくてははいけませんでした。そうです、遅刻やさぼりは絶対許されませんでした。2回だけ大遅刻した時の“やべえ”という状況は今でも忘れられません。また、「どんな雨の日でも教授は来られる」という話が伝わっており、豪雨の中たった一人で待っていたこともありました（さすがにその時は誰も来ませんでした）。1年生の時の思い出は尽きませんが、何から何まで良い思い出です。

教授からお世話になった9年間は自分の財産です。これからの自分の成長ならび患者さんへの診療のため、それを土台に頑張っていきたいと思います。

今後もお身体を大切にしてください、私どもをご指導・ご鞭撻賜りますよう宜しくお願いいたします。





## 田島教授との思い出

安藤 徹

私が教授と初めて会いましたのは、宮崎医科大学に入学した14年前、田島先生が教授になられた時でした。入学後私は準硬式野球部に入部しましたが、その時から野球部の顧問になられたのが田島教授であったわけです。現在の田島先生をみていると野球が大好きなのは誰もが知っているわけですが、我が野球部の活動において年に数回ある野球の公式戦では、たとえどんなに遠方で試合があろうとも日程、都合が許す限りはよく試合を観戦に来られ、大変熱心にいろいろな意味で指導をしていただきました。僕達野球部員も先生の姿をみて気を引き締め、一生懸命がんばったものでした。

先生が野球部の顧問になられてからは皆さんが御承知のとおり野球部と整形外科医局との間に、ほかの医局には絶対見ることができないようなホットラインが徐々にできあがり、自分が整形外科に入局するときには毎年のように野球部から能力あるものがドラフトにかかり、今となっては毎年夏に開催される西日本整形外科親善野球大会において、たとえ野球部出身者、野球経験者であっても2軍の生活をしいられる諸先生方がいらっしゃる程数多くの野球部員が整形外科入局を果たしました。

その夏の大会では勝ってあたりまえのごとく毎年のように優勝、準優勝を重ね、全国大会への切符を手に入れることができました。しかし田島先生の唯一の心残りはなんと言っても数多く出場回数を重ねたにもかかわらず、その全国大会での優勝をつかめなかったことだと思います。ここまで自他ともに認める程の最強チームを作ってきましたが、全国で優勝するという事は非常に難しく、去年の最後の大会では天候にまで裏切られ、野球大会自体が中止となってしまう、結局思いを果たせないまま先生の現役での野球人生が終了してしまいました。僕らは先生のこの思いを受け継ぐべく来年の全国大会での優勝を今ここに誓いたいと思います。そして、その時には田島先生を名誉教授としてだけでなく、名誉監督として迎え、是非胴上げしたいと思います。野球の話ばかりで恐縮ですが、その話をするところこそ光栄にも平成7年の入局員を代表して「田島教授との思い出」を書かしていただくのは自分の使命だと思い、ここに先生との思い出をつづり、終了させていただきます。



## 田島教授との思い出

有 住 裕 一

田島先生、長い間本当にお疲れ様でした。

先生との思い出を数え始めるときりがありません。仕事のことは勿論ですが、やはり私にとっては野球のことを抜きには出来ないようです。

思い起こせば先生との最初の接点は、学生時代に所属していた野球部の部長に就任して頂いた時でした。それ以来学生だった私達の面倒をととてもよく見て頂き、幾度となく叱咤激励に駆けつけて下さいました。グラウンド外でもご自宅にお招き頂いた栄養会を始めとして、本当に色々な面でサポートして頂きました。また卒後進路を迷っていた私にお声をかけて頂いたことが、今日この文章を書くことになるきっかけとなりました。

入局後も幸か不幸か野球から離れられない日々が続きました。特に印象深いのは入局した年に宮崎で行われた西日本野球大会のことです。初めての公式試合ということに加えて、先生の並々ならない意気込みを無意識のうちに感じ取っていたのでしょうか、小心者の私は当日朝より心窩部痛に悩まされ手当たり次第の胃薬を内服して出かけたものでした。試合後の先生のととても嬉しそうな顔や、当夜の祝勝会まで痛みを引きずり満足に食事できなかった自分のことなどが最近のこのように思い出されます。その後も目立った活躍のない私を根気強く使って頂きありがとうございました。先生が退官され教室における野球の取組みがどう変わっていくかわかりませんが、今後も温かく見守って頂けると幸いです。

簡単ですが先生との思い出の一部を書かせて頂きました。とりとめのない文章となり大変申し訳ありません。

最後になりましたが、これまでの間本当にありがとうございました。またこれからも宜しくお願致します。お身体にはくれぐれもお気を付け下さい。







## 田島先生との思い出

### 石田 康行

田島先生、いつもお疲れ様です。今回先生の退官記念号に向けて先生との思い出を記すようにと、依頼されました。じっと思い返してみると、雲の上の存在である先生とこんなにざっくばらんにお話できて私は幸せものだなあと常日頃思っておりました。度重なるご無礼お許し下さい。

わたしと先生というみなさん野球のことを書くのではと思うでしょう。野球以外のことをと、いろいろ思い返してみましたが、やはり野球のことが大部分でした。

初めてお会いしたのは宮医大に入学してすぐの野球部のコンパでした。私も先生も長崎出身で、その頃から勝手に身近に感じていました。野球部のコンパにはお忙しいのに必ずといっていいほど参加していただいていた。先生の右手にビールを持ち、足は肩幅に開き、“みなさんこんばんは”というご挨拶はあの頃と13年経った今もかわっていません。

学生時代は野球部が決勝戦に進出した時、早朝に宮崎を出て、嬉野、香川と急に予定を変えて来ていただきました。嬉野のときは福元先生、関本先生をお伴として車で、香川へは飛行機で松山まで来て、乗り換えて列車で香川まで来ていただきました。試合が終わるととんぼ帰りされ野球部を応援するためだけにわざわざ来てくださり、先生の分け隔てない優しさを感じました。

いつも8月末の夏休み最後の日曜日、野球部を田島邸にバーベキューに招待していただきました。飢えた、汗臭い、真っ黒な私たちは、スリッパに半ズボン、Tシャツに首にタオルで教授宅におじゃましていました。紘子夫人の豚汁、やきそば等の手料理もごちそうになりました。6年生の時、私の結婚式の仲人をお願いに、スーツ姿でお伺いした際、いつもと違う私の姿を見て、紘子夫人に“石田君、何ね、その格好は”といただいき、緊張がほぐれたのを思い出します。

いよいよ医者になりました。ご存知の通り、入局後先輩の先生に“回診は遅れても野球の練習には遅れるな”と教えられるほど田島教授は野球好きでした。朝練では薄暗いグラウンドで一番最初に来てアップをされていました。

日整会の野球大会が札幌であった際、私は2回戦で肉離れをしました。スポーツ医学が御専門の田島先生にしろと試合に出してもらえないと思い、隠していました。3回戦前、田島先生は私の肉離れのことに気付かれていました。“石田、どうね？”といわれた時は、出してもらえないと思っていましたが、次の瞬間“こいば、飲まんね”と出てきたボルタレン錠をみて、優しさ、勝負に対する厳しさを感じました。

先生の何事に対しても、まじめで、真剣な姿勢は私の整形外科医としての遺伝子に刻み込まれています。

まとまりがない文章になりましたが、田島先生お疲れ様でした。また紘子夫人はじめ御家族の方々お疲れ様でした。これからもお体に気をつけて、お元気でがんばってください。



## 教授と野球

### 池尻 洋史

山口大学出身の私が教授に初めてお会いしたのは大学6年の夏、医局へ見学にお伺いした時でした。私が野球部で投手をしており、西医体で優勝したこと等をお話していると目を輝かせて、「是非、入局してください」と勧誘して下さいました。当時は、宮医大整形医局の内情をよく知らなかったのので何故そんなに積極的に勧誘して下さいのか疑問に思っていました。

そして、入局して初めて知ったのが週2回、朝6時半からの野球の練習でした。教授はいつも誰よりも早く来られ、皆の先導をきって練習されていました。野球をお好だという事は耳にしておりましたがここまで熱心だとは思いませんでした。この野球に対する情熱には本当に驚かされ、この位のバイタリティーがないと教授にまで成れないのだろうと思いました。

入局後、早速私は西医体優勝投手という大きな期待を背負いながら朝練に参加することになりました。しかし、久しぶりの野球であり、投げ込んでコントロールをつけるタイプの私は、準硬式と軟式のボールの違いにも上手く順応できず（今でも順応できないままですが）、バッティングピッチャーではなかなかストライクが入らず（教授に当ててしまったこともあるような無いような……）、教授の期待を大きく裏切り、信用を失った私は投手層の厚い我がチームでの登板の機会が無くなってしまいました。

ただ、大学の医局対抗野球大会では教授の御配慮で登板の機会を得ることができました。相手は強豪の皮膚科チーム。ノーコンながら何とか四死球を最小限に抑えて1失点に抑えたのですが、同点のチャンスの際に私の走塁ミスで結局負けてしまいました。これで完全に教授の信用を失うことになり、その後マウンドに立つ事はありませんでした。

以降、野球大会では外野手として起用していただき、何とかチームの足を引っ張らないように頑張ってきましたが、最近は運動不足（ダイヤモンド1周で足がもつれてしまう）がたたりベンチを温めることが多くなってしまいました。

教授の野球に対する情熱、チームをまとめる指導力、的確な判断による采配にて、我がチームを常勝チームに育て上げることができたのだと思います。

しかしながら、長年の目標であった日整会野球大会制覇を達成することができず（あと一步の所だったのだが）、教授在職最後の大会は不幸にも天候不良のため中止になってしまったことが大変心残りです。

野球のことばかり書きましたが、臨床面では教授外来の陪席をさせて頂き、患者に対する接し方から問診・診断・治療までのノウハウを御指導いただき誠に有難うございました。最後に教授という長年の重責お疲れ様でした。



## 退官によせて

田 島 卓 也

私は平成9年に宮崎医科大学を卒業し、母校の宮崎医科大学整形外科に入局させていただきました。大学入学前から将来は整形外科に入局したいと考えておりましたが、どこの大学に入局するかは漠然としており、出身地である長崎大学や長崎原爆病院などを見学させていただきましたが、今思えば絶対にここに入局したい！という決め手はなかったように思います。その点、宮崎医科大学整形外科は若いパワーに溢れ、また田島教授をはじめとする医局の雰囲気よさ、仕事は厳しく夜は楽しい諸先輩方の姿勢など、大変私に合っているように思えました。入局からもう5年数カ月が過ぎようとしています。その間、卒後3年目でありながら国体ラグビー競技の帯同ドクターやラグビーアジア大会の帯同ドクターなど、他ではできないような貴重な経験をさせていただきました。これも全てチャンスを与えていただき、またバックアップしていただいた田島教授や医局長をはじめとする皆さんの温かいお心があったからであると大変感謝しております。整形外科医としてはまだまだ未熟で修業中ではありますが今後も一層研鑽を積んでいきたいと思えます。最後になりましたが、田島教授、長い間お疲れさまでした、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしく願いいたします。





## 田島教授との思い出

益山松三

2002年11月吉日、熊本市市民病院麻酔科医局に、お馴染みの青い封筒が届いた。人事の連絡かなにか？と軽い気持ちで開けてみると、平成9年度入局者代表として、田島教授との思い出につき、文章を書きなさいという連絡であった。なにも、麻酔科研修中で基本的人権を〇方先生に剥奪され、楓荘で毎日の精神的、肉体的疲労を英訳しながら癒している自分にあてなくても……山の中で、快適な生活を送っている、同期のI尻先生やK野先生もいるのに……と熊本で性格がひがみっぽくなっている僕は考えてしまったが、きっと好きなことを書いて、ストレスを発散しなさいという意味だと勝手に解釈して書かせてもらうことにした。

教授との思い出といって、仕事のことは書くことの出来るレベルに自分はないし、野球のことは複数の先生が書くだろうから、きっと僕が求められているのはゴルフのことだろうと、またまた勝手に解釈させていただいた。

田島教授とは、同門会コンペやハイビスカスのプライベートで御一緒させていただいたことがあるが、教授のゴルフを一言で表すならばまさに（速）の一語に尽きると言える。まず、バックスイング開始からインパクトまでが異様に（速）である。水曜日の早朝に医大グランドにいかれた経験のある先生ならイメージが容易であろう。そして、ヘッドスピードはおそらく42 m/s程で（速）くはないが、（遅）くもない。ドライバーの距離だとタイガーウッズに120ヤードほどおいていかれる程度で、レイクの10番だと2打目が180ヤード残るくらいといえば、より分かり易いかもしれない。（極少数だろうが……）しかし、自分の打順が廻ってきてから、打つまでの時間はタイガーよりはるかに（速）!!なのである。特にグリーン上ではその傾向が強く、教授の先に打つときは、同時に打たれてはいけないと、焦りがちで、フックラインがよく入らないこともある。そんなに焦らなくても、カップは逃げないですよと、喉元まででかかったが、一生懸命、打数を数えられている姿をみて、とどまった記憶がある。学生時代の6年間のキャデイ経験の中でも、田島教授は僕の選ぶベスト3に入る早撃ちマックであるが、Tiger・Sharkというとても強そうな芸名？を持つT助教授も負けず劣らず、プレーが速い。このVIPの先生方が同じ組で廻られるときは大体1時間40分程度で9ホールが終了し、あとの2人はついていくのに精一杯のことが多い。

しかしなんといっても、速いプレーはgood mannerであり、キャデイにとってもゴルフ場にとっても歓迎されるお客さんなのである。

大学教授という多忙な毎日を送っている田島教授が実は結構ゴルフ情報通であることを同門会の先生方は御存知でしょうか？5年前まだ、ソフトスパイクが世間に浸透していなかった頃、真剣な表情の教授から、（益山君、これからは、ソフトスパイクの時代だと思うが、早めに買い換えた方がいいと思うか？）と聞かれ、（普通のスパイクの方がいいですよ）と答えたが、実際自分でもソフトスパ

イクを履き始めると、その軽さと履き易さにもう手離せなくなり、恐るべしと思った。

情報通といえば、研修2年目の頃、片山晋呉がまだ、一部にしか知られておらず、その代名詞であるショートウッドも浸透していないときに、ゴルフギアブックを片手に（このショートウッド（ユーティリティ）を購入しようと思うが、君はどう思うか）と突然尋ねられ、とりあえず、（調べておきます）と回診時の学生のように答えた記憶がある。翌日、速攻でゴルフショップの仲の良い店員にレクチャーを受けて、田島教授にお伝えしたところ、1週間後には教授のゴルフバッグの中身はウッド系が入れ替わっていた。それも、自分が勧めた番手、シャフトの硬さをそのまま、購入されていたのは、驚きとともにやはり嬉しかったのを覚えている。

田島教授は教授という肩書のつく偉い先生なのに、普段の仕事の時もゴルフなどのプライベートの時も他の教授と違って少しも尊大なところがないように思う。それが人格的に強者揃いの教授会コンペでなかなか実力が発揮できない原因かもしれないが、誰に対しても、平等に接し、決して偉ぶることのない田島教授を医師として、また人生の先輩として尊敬し、自分も少しでも近づいていけたらと思っている。

最後に、長年の間、教授として、我々を率いてきてくださった田島直也先生に心より感謝の気持ちを捧げるとともに、今まで述べてきた、一部事実と反した虚偽および暴言をお許しください。





## 田島教授との思いで

市原久史

平成10年度は神菌先生を含めると10人の入局でした。また岡田先生、村上先生(当時 冨里先生)の2人の女医さんも含まれており、その後の女医さんの入局ラッシュのはじめの年であったと思います。

さて、田島教授に初めてお会いしたのは社会人としての初日にあたる平成10年5月6日でした。第一印象は優しくななめな方という風に記憶しています。大学教授という近寄りがたいイメージがありましたがそういう雰囲気は全くありませんでした。医局自体がそういう雰囲気であるのは田島教授の影響によるところがかなり大きいんだと思います。

入局してからの田島教授との思い出としてまず挙げられるのは、やはりグラウンド上でのことではないでしょうか。といいますのは研修医レベルだと医療の現場で接する機会が限られていたからどうしても野球に打ち込まれている田島教授のほうが印象が強いというわけです。

その野球ですが、立場上は監督でいらっしゃいましたが自ら率先して守備、打撃練習をされているのを見て、眠い目をこすりながらがんばらなきゃとよく思わせられました。ただ盗塁された時にはとても真似できないなあとその肉体的な若さに驚かされました。私自身野球が好きでしたから練習は楽しくすることができましたし、日頃の運動不足を解消するには本当にいい機会でした。2年目に大学を離れてから徐々に体重が増えたのはこれが原因だったのかもしれませんが。もう一緒に練習することはないでしょうからそれが心残りです。

入局して5年、実質2年にも満たない間でしたが同じ職場で一緒にさせていただき、いろいろとご指導いただきました。本当にありがとうございました。





## 教授との思い出

岡田 麻里

田島先生と初めてお会いしたのはおそらく私がまだ幼稚園児か小学生であったころだと思います。当時私の父は休みの日に私たち子供をよく大学病院に連れて行き、私が覚えているのは医局に骨の人体模型があり、ソファーとテーブルがあり、動物の形をしたライターか爪楊枝入れがそのテーブルに置かれてあったことくらいです。お菓子を黙って食べたような気もします。その頃田島先生とどういう形で接したのかはまったく覚えていませんが、要するに幼い時分よりお世話になっていたのだろうということは確かです。

時が流れ大学6年生になり、そろそろ進路をと考え始めた頃、なぜかは分かりませんが私の頭の中には宮崎医大の整形外科に入局するという考えがインプットされていました。決して父に言われたわけでもなく、どのような先生方がいらっしゃるかも知らず、口にくそ放射線科や麻酔科もいかなーなどと言ってはみましたが正直全くといっていいほど悩まずに入局を決めさせてもらいました。西医体が終わってすぐに挨拶に伺ったのですが、失礼なことあまり緊張もせず、そのまま入局へと到った次第です。

働き出してからにはさらに田島先生に対しては、親近感というには失礼極まりないのですが、そんな気持ちが強くなりました。他大学卒業の先生方は分かるかと思いますが、最初にあった“よそから来ている”的な感情は知らない間に消えてしまいます。このことは田島先生によるところが大きいと、私は確信しています。

一時期先生のご自宅の近所に住んでいた私は街である宴会へタクシーで一緒させていただいたことが何度ありました。そんなときは次の新入医局員の話（上通先生が入局します、と連絡をくれたときにはちょうどタクシーの中で、すぐに田島先生に報告しました）、野球の話—私は全く野球音痴ですがスコアラーまでさせて頂きました—や天気の話など、当時2、3年目であった私とまるで普通の会話をしてくださったわけです。おそらく教授と研修医の会話としてはよそではあまりありえない話だと思います。

田島先生が教授を退官されることとなり、大学にいらっしゃった最後の5年間、一緒に仕事をさせて頂けたことを光栄に思います。でも本当はずっとずっと以前よりお世話になっていて私にとっては宮崎医大の整形外科＝田島先生であり、退官されると言われても全くぴんときません。きっとこれからもお世話になると思いますし、とりあえず今までの先生との思い出をまとめるとこんな感じです。これまでの様々なことをここで田島先生と先生の奥様に対して心から感謝するとともに、これからも、何かとご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。



## 田島教授との思い出

公文崇詞

私と田島教授との一番の思い出といえば、何と言っても教授ご夫妻媒酌人のもとで行わせて頂いた結婚式、ならびに結婚披露宴です。

2000年の春に教授ご夫妻に両家の両親とともにご挨拶にお伺いしたときには、快く媒酌人をお引き受け頂き、また医師として、夫として医師の妻としての心構えなどこれから家庭を築いていく上でありがたい激励のお言葉を頂きました。両家の両親ともに『私たちからはもう何もう事はない。すべてお話して頂いた。』と感激しておりました。

2000年12月2日に私の故郷である愛媛県新居浜市まで遠路はるばる御足労頂き、結婚式、結婚披露宴を教授ご夫妻媒酌人のもとで行わせて頂きました。式の段取り、手順等が宮崎とは少し異なったようでご迷惑をおかけしたところがありました。しかし『いい式だった。よかった。これからも仲良く。』と祝福のお言葉を頂き、さらに式当日、奥様からは、家内へお気遣いのお言葉をかけて下さっていたようで、私たち二人とも式を挙げた感動というより、教授ご夫妻のお心遣いがとてもうれしく涙が止まりませんでした。

そして結婚して3年と経たないのですが子供3人に恵まれた（ただし、世間でよく言われる一できちゃった婚—もしくは一子連れ婚—ではありません）。のは教授ご夫妻に媒酌人をして頂いたお陰？と考えております。

ここ最近、関連病院へ勤務となり教授とお話する機会が少なくなりましたが、同門会等でお会いした時には『お子さんは元気？四国のご両親によろしく。』と必ず声をかけて下さっています。このように医局員一人一人にお気遣い下さる田島教授のもとで、整形外科を学べてこれたのは非常に幸せなことだと感じております。

意見の食い違いや人間関係のもつれで病院全体の日常診療にまで支障を来たす施設があったりする世の中です。しかし田島教授が診療、教育、研究、野球で日々示してきて下さった人と人の和を重んじ、一致団結し一つの目標に向かって突き進む精神は私の胸深くに刻み込まれております。出来の悪い若輩者の医局員で ACADEMIC な教授との思い出は、到底私には語ることは出来ませんが、田島精神を胸に整形外科医としてこれからさらに精進していきたいと思っております。

今後とも御指導の程宜しくお願い申し上げます。







## 教授との思い出

後藤 英一

早いもので入局より4年が経とうとしております。私はそのうち約2年間を大学病院にて研修医として勤めさせて頂きました。田島教授にはその期間は特に多くをご指導いただき、また大変お世話になりました。まず何より他大学出身の私の当教室への入局を許して頂き、さらに入局後も格別のご配慮をして頂いたことをこの場を借りまして御礼申し上げたいと存じます。

“田島教授の思い出”ということでは思い返してみますと様々なことが思い当たります。教授・脊椎グループ長としての診療の面はもちろん、野球部監督としても我々研修医が及びもつかない程の情熱と早起きで当初は驚かされたものでした。

以前に一度、熊本へ出張に同行させて頂いたことがありました。当時私は研修医1年目でした。私が車を運転したのですが長い道中、二人きりで何を話したらよかろうかと前日より緊張していたことをよく覚えております。実際には教授の方からいろいろとお話をして下さり、また私の学生時代の話などを聞いて頂いたりと心配する間もありませんでした（教授ご自身はいかがであったかはわかりませんが）。

今回ご退官されるのは誠に残念ですがこれまで学ばせて頂いたことを生かし、教授に負けない熱意をもって努力していこうと考えております。本当にありがとうございました。





## 教授との思い出

小 蘭 敬 洋

田島教授、長い間おつかれさまでした。

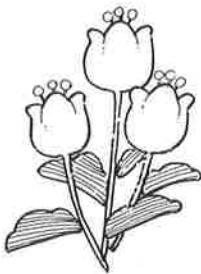
医学部準硬式野球部の部長であられる田島教授には、学生時代より大会遠征、教授宅での栄養会など色々とお面倒をみていただきました。私がキャプテンの時には選手起用についてアドバイスしていただく事もありました。卒業前に整形外科教室のドラフト(?)に掛かり勧誘会に呼ばれた際に、入局後に何を勉強したいか聞かれる前に、どのポジションが守れるかと聞かれた事を今も覚えています。

原稿を書いているこの時期(1月下旬)になると2月からの朝練開始を前にして教授がソワソワされ始めます。2月の朝6時はまだ真っ暗で、一番に来て黙々とランニングする教授の姿がぼんやりと目に映っていました。

また巨人の宮崎キャンプにも二度お供させていただき、選手の利用する一塁側ベンチに座って練習を観ました。仁志と二岡は礼儀正しく挨拶してましたが、元木はやっぱりさぼってました。メジャーリーガー松井とも選手食堂でテーブルを隣にして同じカツ丼を食べました。プロの練習を見る教授の目は指揮官のそれとなっていて、次の練習からの意気込みが違っていたように思います。

教授の胴上げを誓って挑んだ昨年の全国大会でしたが、雨天にみまわれ途中中止となってしまいました。本年度も出場権を獲得できました。エースの松岡先生がしっかり調整して試合に臨み、安藤先生と石田先生が楽しんで投げ、大魔神矢野先生が抑える。守りの要、有住先生が緊張感を持ってプレイし、福嶋先生がチームバッティングに徹し、松元先生が復活すれば間違いなく優勝できます。今度こそ教授を胴上げできるようがんばりたいと思います。

これまで本当にありがとうございます。田島教授のご健康をお祈り申し上げます。





## 田島先生との思い出

### 上 通 一 師

平成13年度入局員（福嶋、小松、桐谷、勝瀨、大倉先生）を代表致しまして、ひとことご挨拶をさせていただきます。

田島先生との思い出といえば、やはり、真っ先に思い出すのは“野球”関連の出来事です。水曜日の朝に毎回行われる自分自身との戦いにまず勝ち、いそいそと着替えてグラウンドに出ると、そこにはすでにランニングを済ませ、キャッチボールで肩を温める田島先生が……という場面が懐かしく思い出されます。早朝に田島先生と2人っきりということも1度ありました。僕らのはじめての西日本野球大会は沖縄で開催されました。2軍の試合では、大倉先生の必死のデッドボールが認められなかったこともあり、初戦敗退という結果に終わりましたが、野球のおかげで、はじめての沖縄を満喫することが出来ました。

入局して間も無い頃には、不慣れな仕事で右往左往している僕達を先生のご自宅での食事会に招いていただきました。大倉先生が少し、酔い気味だったことが昨日のこのように思い出されます。

また、田島先生の回診では、数々の失態を演じました。フィルムが無かったり、患者さんがいなかったり、時には、患肢の左右を間違え、先生と患者さんを戸惑わせたこともありました。

スーパーローテートの際には、廊下ですれ違った時などに、「どう、頑張ってる？」と声をかけていただきました。こんな下っ端のことまで気にかけていただいているとうれしく思いました。現在の教室の雰囲気も田島先生のお人柄によるものだと思います。

最後になりましたが、いろいろとお世話になり有難うございました。今後ともご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。





## 田島教授との思い出

勝 鳶 葉 子

今回田島教授が退官されるにあたり、平成13年度入局者2名のうちの一人として、寄稿文を書かせて頂く事となりました。“なぜ、私にそんな大役が”と思い事務局に伺ったところ、“特に意味はありません”とのことでした。どうやら単なる名簿順だったようです。

おそらくこの寄稿文を書かれる方の多くは、教授のこれまでの数々の業績や、野球に対する情熱などについて触れられるのではないかと思います。そこで私は、それらには全く関係のない、『私が当科に入局した理由』について述べたいと思います。(野球について書かないのは、私が医局始まって以来最も練習に参加しない研修医で、書く事が無いから、ではありません。)

本学6年生の冬、私は熊本大学整形外科に入局予定で、宮崎に残るつもりは全くありませんでした。夏休みに熊大に見学に行き、“入局します”宣言に限りなく近い御挨拶も済ませていました。にもかかわらず、黒木龍二医局長(当時)からは勧誘の電話がかかってくるので、常に家を留守にし(図書館で勉強)、家の電話は留守電にセットせず、半ば借金取りから逃げ隠れているかのような状態でした。そんなある日、国試の勉強に疲れ果て、早い時間に帰宅し、うっかり鳴った電話に出してしまったのです。相手は龍二先生、医局勧誘会のお誘いへの電話でした。熊大への入局を決めた事を話しましたが、食事だけするつもりで来れば良いと言われ、結局参加することになってしまいました。勧誘会の当日、皆様の前で“私は熊大に行くのです!”と声も高らかに叫ぼうと、決心して臨みました。当日の詳細は紙面の都合上割愛させていただきますが、私が宮崎に残ろうと考えを変えたのは、その勧誘会での教授の一言でした。多分それがなければ、今私はここにいなかったと思います。日々のビールのつまみは馬刺しと、辛子蓮根と、ひともじのぐるぐるになっていたと思います。その時教授がなんとおっしゃったか、教授御自身も覚えておられないかもしれませんが、私にとって運命を変える貴重な一言でした。実際教授がなんと言われたのかは、もったいないのでここには書きません。

当科に入局して本当によかったと思っています。そのきっかけを作ってください、2年間指導してくださったこと、本当に感謝しております。ありがとうございました。



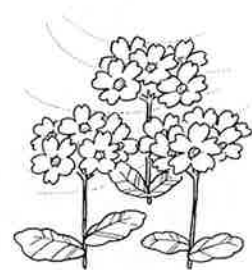
## 田島教授との思い出

福 嶋 秀 一 郎

田島教授と初めてお会いしたのは、大学1年の野球部新人歓迎会のときでした。今考えると、それが整形外科としての道を選んだひとつのきっかけだったかもしれません。田島教授は大学の野球部の顧問をされ、学生時代に野球部に在籍していた私は、そのころから大変お世話になっています。私は学生時代に、一般学生に比べて田島教授と接する機会が多かったと思います。スポーツ医学に対する考え方、今後の宮崎でのスポーツ Dr. の役割など、田島教授と話したことで、私にとって整形外科が興味深く魅力的な分野であると感じました。また、田島教授の勧誘がなければ整形外科医としての道を歩んでいなかったかもしれません。田島教授の私への勧誘の言葉は今でも覚えています。

大学時代に野球をしていたこともあり、田島教授との思い出は野球関係の出来事が多かった気がします。学生時代の飲み会の席では、野球への思いを熱く語っていただきました。整形外科に入局後、朝の野球の練習に参加したわけですが、正直朝起きるのがとてもきつかったのを覚えています。毎回行くたびにかならず田島教授が最初に見えられていて練習に参加していました。それを考えると、眠くても休むわけにはいかず、目をこすりながら練習に参加していたのを覚えています。野球大会、なかでも東京ドームでの試合は一生の思い出となっています。

田島教授との出会いは私の人生を大きく左右する出来事であり、また田島教授に出会えたことをとても幸運に思います。本当にありがとうございました。





## 教授との思いで

甲斐糸乃

「一生懸命やればいいから」教授のその言葉は、今でも覚えています。これは、野球の朝練で教授にかけられた言葉でした。その言葉は、教授のお人柄を示すようなものに思えました。何事にも、真摯な姿で取り組む。そんな、教授の姿を目の当たりにする度に、グッと気持ちが引き締められました。我々一年目研修医にとって、教授と過ごした時間はとても短いものでしたが、その中でも得るものは沢山ありました。一生懸命やれば、柔和な瞳で見守ってくださり、そして、そうでなければ、叱責の瞳で訴えかける。出来る事も、出来ない事も、どんなことでも一生懸命努力する。その精神を忘れずに、これからも頑張っていきたいと思っております。田島教授、短い期間でしたが、本当にお世話になりました。そして、有難うございました。





## 田島教授との思い出

黒木修司

私が田島教授とはじめてお会いしたのは、大学生の時、整形外科で勉強させて頂いている時でした。外来で脊椎の疾患の患者のアナムネをとり、カンファレンスルームで焦り俄か勉強をして臨んだ外来ポリクリで、教授から質問をされ何も答えられずただ苦笑いをしていたのが思い出されます。

そして今年、新医局員として再び田島教授にお世話になる事になりました。毎日が慌しく過ぎてゆき、病棟業務やカンファレンス時、そして提出物に至るまで田島教授にはいつもご迷惑をかけてしまいました。患者のハローベストを調整している際に、急に患者がスクリュウ部の痛みを訴えられどうしてよいかも分からずただ焦っている時、ナースステーションにいる教授が駆けつけてくださり、無事調節していただいたこともありました。カンファレンスではプレゼンテーションの仕方や発表すべきポイント、そして治療方針など、いつもご指導頂きました。今このように改めて振り返ると、学生時代から田島教授にはいろいろな点でご指導頂きながら、今現在も同様に ご指導頂き、進歩が無いなと反省しております。

また病院の外での教授の思い出というと、入局の際に田島教授のご自宅にてお食事をさせて頂いたことが思い出されます。呼んでいただいたのは一人暮らしであり規則的な生活もしてなかった春のことでした。教授の奥様が沢山の料理を作ってください、初めて教授のご自宅を訪問し、かなり緊張していたのですが、そんな中でもただ食べていたような気がします。お年賀のご挨拶でも、テーブルの上には同様に沢山の料理が並び、年賀のご挨拶と言いながら一日中食べていました。

田島教授と言うとやはり野球・早朝練習・名監督と言うイメージが強いのですが、私は野球だけでなく様々な場面で教授にお世話になりながら、現在整形外科にて研修をさせて頂いております。改めて感謝申し上げますと共にこれからもご指導頂きたく、宜しくお願い致します。

## 第25回日本臨床バイオメカニクス学会 (平成10年11月) 担当責任者として

川 越 正 一

整形外科バイオメカニクスは、教授の掲げられた教室の主要テーマの一つです。現在進行中の研究も含め、有限要素法、脊椎インストルメンテーション、動作解析など、多くの教室員の学位取得に関連を持った分野です。私自身も、動作解析を行っていたこともあり、この学会の担当を務めさせてさせて頂いたのは、“さだめ”であったのではないかと、今更ながら思っております。

第25回日本臨床バイオメカニクス学会は、平成10年11月19・20日の2日間、整形外科臨床医に加え工学部系の研究者や学生を含めた多くの参加を頂き、宮崎観光ホテルで行われました。医学系と工学系の両分野での先端知見に関しての、特別講演（ベルン大学・ガンツ教授、宮崎大学・池田教授）2題、シンポジウム、一般口演136題が、3会場において行われ、活発な討論が繰り広げられました。我々にとっても、工学系研究者との連携の重要性を再認識させられた学会でもあり、その後、多くの医局員が研究テーマを、この分野に求めたことのきっかけになったのではないかと思っております。学会開催のご協力頂きました皆様方に、感謝いたしております。



ガンツ教授と田島教授





## 第 48 回西日本脊椎研究会 (平成 9 年 11 月)を担当して

鳥取部 光 司

時は平成 9 年 11 月 15 日、第 48 回西日本脊椎研究会が、当教室主催にて開催されました。

主題は田島教授の懸案による、今まで取り上げられたことのない、「仙骨・骨盤をめぐる諸問題について」でありました。

主題を中心に大変多くの演題が集まり、非常に活気に満ちた発表と討論が繰り広げられました。また特別講演は金沢大学整形外科教授であります富田勝郎先生に「仙骨腫瘍の手術戦略について」という演題で御講演いただき、富田先生の熱の入った講演により講演後は非常に盛大な拍手に包まれたのを鮮明に記憶いたしております。本西日本脊椎研究会は、非常に意義の大きい研究会であったと思います。私は、この研究会の担当を務めてさせて頂きましたとともに、座長は教室から選任ということで、初めての座長を経験させて頂きました。私にとっては大変貴重な経験となりました。

開催にあたり、御支援いただきました同門の諸先生方には、この紙面をお借りしまして心より御礼申し上げます。また、この研究会の運営を快くお手伝いして下さった教室員・関連病院の皆様、そして教室の秘書さんに心から御礼申し上げます。





## 第30回日本側彎症学会 (平成8年11月)を担当して

作 良 彦

今回、教室の方から田島教授退官記念の同門会誌第14号—記念号—の原稿依頼がありました。わたしが、平成8年11月に日本側彎症学会を担当させていただいたことを書いてくれとの依頼でした。早いものであれからもう6年半の月日が過ぎようとしています。

田島先生は平成2年に教授に就任されまして、臨床の2本柱として〔脊椎外科〕と〔スポーツ医学〕を掲げられました。先生の〔脊椎外科〕での輝かしい業績の中におかれまして、側彎症に関しては先生のライフワーク的な業績が数多く存在します。先生は昭和54年に宮崎に赴任されまして長崎でやってこられた側彎症の業績を宮崎の地で花を咲かせ実を結ばせてくれました。全国でも早い段階から宮崎全県下に側彎症検診システムを作り上げ実施するなど、多大なご尽力を頂きました。現在もその功績は高く評価され、県下の側彎症の創始者“側彎症の父”的存在であると思います。臨床の現場におきましても、宮崎赴任以来続けてこられた側彎症外来では、患者一人一人に優しい言葉をかけられ、その精神はそれぞれの心の中に留め置くところとなっていることでありましょう。

私は平成6年より側彎症外来の担当者として先生の仕事のお手伝いをさせていただくことになりました。そんな折、教授から第30回日本側彎症学会が宮崎で開催されることが報告されました。初めての学会担当で先輩たちから教えていただきながらの準備でした。

田島会長は、宮崎の地での本学会の開催にあたり“本学の側彎症研究の発展となり、それがより高度な診療体制の確立に貢献できること。”を望んでいました。

Dr.Winter、Prof.McMaster、Prof.Asherなど、世界的にご高名な側彎症の重鎮の先生方をお招きできたことは、誠に喜ばしいことであり、会長の本学会に対する情熱はそのまま各地の側彎症診療に携わる先生方の白熱した討論として形になりました。教室員一人一人が頑張った手作りの学会は大きなトラブルもなく無事に終了することができました。日本全国の教授陣の中であって、会長の交友関係の広さには驚かされました。この学会の後、黒木浩史先生がProf.Asherの元へ留学しました。そこで貴重な体験をして研鑽を重ねてくれたようです。今後の当教室の側彎症診療をグローバルなものに発展させていってくださることを期待します。

最後に、田島先生、長い間ご苦勞さまでした。先生の元で側彎症外来のお手伝いできたことは、私にとって貴重な体験であるとともに、光栄なことであります。先生の側彎症に対する情熱とその真摯な診療姿勢を尊敬して見ておりました。教授という重責を終え、肉体的・精神的にもお疲れのことと思いますが、未熟な私どもにこれからも末永くご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

追記

田島教授退官記念号にあたり田島先生への感謝の辞を述べさせていただける場を与えて頂いた同門会の皆様および教室員の皆様に御礼申し上げます。



Asher 先生 (左)



McMaster 先生



# 第5回日本リハビリテーション医学会九州地方会 (平成11年2月)

黒木 龍二

平成11年2月21日(日)、宮崎厚生年金会館におきまして第5回日本リハビリテーション医学会九州地方会、および第17回九州・沖縄地区認定臨床医生涯教育研修会を開催させて頂きました。本会の宮崎での開催は2回目でしたが、当時本学ではリハビリテーション部が独立しておらず、整形外科外来の中にリハ外来を入れており、どういう理由か、私が外来担当となっておりましたので、たまたま順番が回ってきた地方会の責任者になった次第です。当然ながら研究会そのものをほとんど知らなかったため、前年の北九州で開催された地方会にカメラ持参で見学に行き準備を進めました。

当日の参加者は179名で、一般演題には18題の発表があり、リハビリテーション医学の最新の研究および情報につきましては活発な討論が成されました。特別講師には日本医科大学の木村哲彦先生をお迎えし、20年間に渡り脊髄損傷の研究に携わってきた貴重な講演を拝聴させて頂きました。また引き続き開催されました教育研修会におきましては、産業医科大学の舟谷文男先生および大分医科大学の鳥巢岳彦先生両講師による、介護保険制度および変形性膝関節症に関する教育講演が行われ、多数の先生方にご参加頂きました。

整形外科のみならず、あらゆる診療科がリハビリテーション医学と密接に関連しております。またリハビリテーション医学が独立した科として日々進歩しており、当大学でも単独診療科としてリハビリテーション科が独立し、当大学のリハビリテーションシステムを早々に確立すべきであると本会を通して強く実感致しました。その後、田島先生の長年にわたる努力が実り、本学においても平成14年4月にリハビリテーションが独立し、当医局から鳥取部先生が専任講師として選出されました。今後ますます発展していくことと医局員一同期待をしております。

最後になりましたが、本会の開催にあたりましてご支援、ご協力頂きました関係機関、各位に深く御礼申し上げます。



## 西日本整形外科 親善野球大会の思い出

平成2年長崎大会キャプテン

中村 誠司

当時の医局は、野球大会に参加することに意義ありました。勝って優勝することなど夢のまた夢でした。まさに野球を通じての各大学間の親善そのものに大きな意味があった時代でした。今、当時の頃の思い出を辿ろうとしても、なかなか記憶が蘇りません。何故なら、参加しても、せいぜい1試合か、2試合程度で負けてしまい、いつもお昼前には現地を発って、帰路についていたのですから。それが、今では九州どころか全日本レベルにまでの実力になろうとは誰が予想したのでしょうか。これもひとえに、田島教授の野球への情熱がなせる技と感心しています。

そういえば、平成2年にキャプテンとして長崎で試合をしました。確か、前夜祭での深酒が崇ってか1回戦で敗退したように記憶しています。あろうことか、田島教授の出身地である長崎の大会で惨敗したことは、誠に申し訳ない限りでしたが、実はこの時から先生のリベンジが開始されたのではないのでしょうか。それ以来の先生の野球への情熱には、並々ならぬものがあったように思います。

それから数年後、鹿児島での大会で二軍の試合を最後に、医局野球から身を引きました。二軍のほうが楽しく野球ができるだけの理由で、この年の大会は一軍を辞退して二軍で参加をさせて戴きました。前夜祭の後、天文館にもくりださず、おとなしくホテルの部屋に戻り、早めに眠りに就きました。翌日は早朝からの試合のため、午前5時に起床して、シャワーを浴び、入念なストレッチをして朝食もしっかりと食べて試合に臨みました。第1試合は、黒木龍二先生の見事なピッチングで、完璧な勝利を飾りました。そして迎えた第2試合目。龍二先生を休ませるために、私が登坂することになりました。第1球目、ゆっくりと振りかぶり体を捻じってフォロースルからリリースにさしかかったその瞬間、軸足の右ふくらはぎでプチッと何かが切れる音がしました。まさに腓腹筋の肉離れを起こし、あまりの痛さにそのままマウンドに倒れ込んでしまったのです。幸いなことに樋口先生が、ストレッチとスポーツマッサージを施してくれたお陰で、痛みは少し治まりましたが、始まったばかりの試合を投げるわけにもいかず、そのまま続投しました。キャッチャーの渡部正一先生の好リードに助けられ、ハエの止まるような超、超スローボールで相手打者たちを交わして、結局最後まで投げ抜いて勝利しました。

それ以来、医局野球をすることはありませんでしたが、毎年若手の先生方が入局され立派に育ってくれたことで、もはや出る幕がなくなっていくのが本当のところでした。今思えば、入局以来、田島教授とともに野球で汗を流せたことは、良い思い出となっています。この場をお借りして、入局当時から一緒にプレーした同僚の先生方や田島教授に心から感謝したいと思います。ありがとうございました。そして、田島先生！、長い間本当にご苦労さまでした。



## 野球部と田島先生

平成3年熊本大会キャプテン

黒木隆男

野球に注ぐ田島先生の情熱は、皆様御存知の通りです。宮崎医大整形外科学教室の野球部を率いて、助教授時代から輝かしい戦績を残してこられました。同時に宮崎医大医学部学生の準硬式野球部の顧問としても御尽力くださいました。宮崎医大 準硬式野球部のOBとして、田島先生の御退官に際しまして、厚く感謝申し上げます。

私は、本学の8期卒で、野球部出身です。私が学生時代のころは、別の教授が野球部の顧問を勤めておられましたが、私が卒業をするころにお辞めになりたいとの意向がありました。当時、野球に関心をもたれている教授先生はあまりおられず、現役野球部員と卒業したての我々の間で、助教授であられた田島先生にお願いしようとの意見がまとまりました。誰がお願いに行くのか、ということになり、入局したばかりの私と柳園先生、浪平先生とで、お願いに上がりました。8、9期卒の我々が入局するまで、野球部の先輩の入局者はいませんでした。野球に関して(?)多大なる期待をされていたのは、容易に想像できると思います。今でも、お願い申し上げた時のことを鮮明に覚えています。田島先生は、助教授で顧問を引き受けても良いのかということを非常に気にされていましたが、学生課に問い合わせたりして、特に問題ないことを確認し、お引き受けいただきました。今、振り返って考えますと、田島先生と私との野球を接点としたお付き合いはこのときよりスタートしたのだと思います。

私達が入局し、西日本の野球大会で勝ち進むであろうと期待されましたが、なかなか勝てませんでした。現在のような強い宮崎医大整形外科の野球とは、少々雰囲気は異なっていました。同様に学生の野球部もベスト8、時にベスト4の成績程度でした。最近では7、8年前より西日本医科学学生大会、九州山口医科学学生大会で優勝準優勝・それに準ずる成績をあげています。田島先生が部長を努めるようになってから、整形の野球も学生の野球もその戦績は、それまでとは見違えるような好成績となっています。これも田島先生の功績でしょう。

学生の野球部が好成績を収めるようになってきた平成2、3年頃に宮医大にいたOBで会合を開きました。後輩がしばらくは好成績を維持しそうなので遠征費等のバックアップを組織的に行うためにOB会を本格的に組織することになりました。会長は、3期生の先輩になりましたが、幹事は私が務めることになりました。顧問の教員であること、当時大学院に進むことになっていたのが今後4年間は大学近辺にいること、が幹事に好都合との理由でした。

その後ますます田島先生と野球部の予定で行動を共にする機会が増えました。私はそのすべてにご一緒したわけではありませんが、田島先生は、野球部の大会のほとんどすべてに出向かれ、最低でも1試合は観戦されていたようです。私が在局していれば何試合かは一緒に観戦できたのに、残念です。

私がOB会の幹事を務めて10年位経過したころ野球部OB会で、そろそろOB会の幹事を後輩に譲ろうかと思いはじめていました。そのことを口にしたところ、田島先生から、「私が野球部の部長をしている間は、黒木君も幹事をしとったら……」と言われました。考えてみれば約10年前に若輩者の私が、田島先生に野球部の部長を命じたわけですから、自分だけ先にお役御免とは虫がいい話です。その田島先生のお言葉ですので、引き続きOB会幹事を務めております。

田島先生が御退官される今年も、宮医大は日整会の野球大会への出場が予定されています（出場権があります）。田島先生には、これからも野球にご関心をお持ちいただきたいものです。

田島先生、長い間本当にお世話になりました。

今後ともよろしくお願ひします。





## キャプテンの思い出

平成7年福岡大会キャプテン

柳園 賜一郎

前年西日本大会で準優勝し、春に仙台の全国大会に初出場その勢いを受け、さらに安藤投手入局し今年こそ優勝しかない、優勝して当然という雰囲気の中で、生まれて初めてキャプテンというものを経験させて頂きましたが、僕にとっては悪夢としか言い様のないものに終わりました。

試合前日の組み合わせ抽選では、僕は決勝で戦うであろう九州大学の布陣を考えていました。4試合の戦いになるので、安藤を初戦で、2回戦を矢野で、3回戦を自分で投げて決勝はまた安藤で九大を徹底的にやっつけるつもりでいました。

初戦は福岡ダイエーの練習場である雁ノ巣野球場でありました。相手は大分医大でした。楽勝ムードで始まったこの試合、僕はこの試合で忘れることもできない失態を演じてしまいました。(失態1) 球場についてユニフォームに着替えようとしたとき、ホテルにユニフォームを忘れたことに気づきました。

(言い訳) 前日は博多に泊まって中洲に繰り出しましたが、11時には帰ってぐっすり眠りましたし、ホテルでユニフォームに着替えてバスに乗り込みましたが、上着だけはあとから着ようとしてバッグに入れたつもりでいました。

試合にはこの試合温存する予定の矢野先生から借りたユニフォームで出場しました。安藤先生は序盤から絶好調で相手の付け入る隙はありません。しかしわがチームも気合いが空回りしてなかなか先制点が入りません。

(失態2) そんな時1アウト3塁のチャンスが訪れました。ここはスクイズでと考えベンチからサインを出しましたが相手にばれてしまい、好機をつぶしてしまいました。

(言い訳) 野球を始めてからサインを出した経験が無く気がついたら胸と手首を交互に5、6回触り続けていました。今考えればばれて当たり前でした。

(失態3) 最終回0対0か1対1、とにかく同点のまま裏の攻撃で僕はサヨナラのランナーで2塁にいました。バッターは矢野先生で痛烈なライナーがセカンドの頭上を越えて誰もがサヨナラ勝ちを確信した瞬間僕はホームベース直前と言うより余裕でタッチアウトになってしまいました。

(言い訳) 学生時代盗塁もしたこともない僕はベースランニングというものが苦手で、気負って走ったためふくらんでしまって、もう少しで相手の3塁ベンチに飛び込みそうになるくらいの遠回りをしてしまいました。普通に走っていれば余裕でセーフだったのと、ライナーだったため、ダブルプレーを恐れて一瞬戻ってしまいました。一応代走も考えたんだけど……。矢野先生が3塁打くらい打ってくれていれば。

このようなわけで試合は同点のまま終了して、ルール上1アウト満塁から始まる判定戦となりました。相手の打順は3番からです。安藤投手は気合いの投球で最初の打者を三振にとりました。2アウト



ト満塁です。ここをしのげばうちの打線ならもう勝ったようなものです。かなり有利になったなあ。と思った瞬間、

(失態4) 次の打者の打球が僕の守っているレフト方面に飛んできました。僕は最初ショートフライと思い福元先生を指さして「ショート」と叫んでいました。2アウトなので満塁のランナーは一齐にスタートしています。その打球は意外に伸びてなんと僕の頭の上を越え、差し出したグラブをかすめもしないで、後ろに転がっていきます。センター関本先生の「あーー、やなぎさーーん。」の音が響くなか打球に追いついた時には走者一掃の3塁打になってしまっていました。

(言い訳) 特にありません。

3点を追う展開になって負ける気のしない我がチームは同じ1アウト満塁からの攻撃で1本のヒットで1点を返し2アウト満塁一打同点かサヨナラのチャンスです。ここでなんとキャプテンの僕に打順が回ってきてしまいました。ここまでの失態でかなり弱気になっていた僕は案の定セカンドゴロで万事窮すでした。

(言い訳) 展開上そういうものでしょう。

以上強烈に記憶している僕のトラウマとも言うべき体験をお話させていただきました。





## 野球歴代キャプテンの思い出

平成6年鳥取大会キャプテン

黒木浩史

当教室において野球は、診療・研究・教育の3本柱に続く4本目の柱です。いや今ではもしかするとどれかを押しつけ3本柱の中に食い込んでいるかも知れません。抄読会は中止になっても毎年2月から10月にかけて行われる週2回の早朝練習が中止になることはありません。平成6年、この伝統ある宮崎医科大学整形外科野球部の主将に任命されました。そこでこの年の8月7日、鳥取県米子市にて開催された第37回西日本整形外科親善野球大会の様子を思いつくまま書き綴ってみます。

この大会を一言で表すとすれば「暑くて短い夏」でしょうか。言い換えると「猛暑の中、一軍、二軍共々どつとどつと散っちゃった」という事です。

一軍は昨年の準優勝チームとして今年こそは優勝、との意気込みで米子に乗り込みました。一回戦は熊本大学との対戦で3年前の熊本大会で敗北した相手でした。我がチームは幸先良く1回表に1点を先取しましたが、4回の裏に2点を取られ逆転されそのまま2対1で一回戦敗退をきしてしまいました。

そして二軍も一回戦こそ長崎大学と対戦し13対3で大勝したものの、二回戦を一回戦不戦勝で元気満々の久留米大学と戦い16対10で負けてしまいました。ただこの年、一軍の監督ではなく二軍の選手としてエントリーされた田島教授が、一回戦に2番セカンドで先発され連続盗塁を決めるなどの大活躍を演じたことは唯一明るい話題でありました。

鳥取大会はスポンサーとの協定改正のため第1回西日本スポーツ医学研究会と称する講演会が始まった大会でした。そして宮崎をフランチイズとする我々にとって米子市は沖縄を除けば野球大会が開催される土地の中で最も遠い場所であり、陸続きであるにもかかわらず福岡あるいは大阪を経由する飛行機での遠征でした。この年は新入医局員が山本恵太郎先生ただ一人で、彼は本来サッカー選手であるものの厳しい練習に耐え抜き一軍のレギュラー一塁手に抜擢されました。またしばらく野球大会に御無沙汰だった平川先生もめでたく15年選手の表彰を受けられ一軍ベンチに指揮官として入られました。しかしこの2選手はこの大会を期になぜか一軍ベンチからは姿を消してしまいました。

当時はこんな弱小チームでキャプテンとしての大した思い出もありませんが、これ以降はジャイアンツなみの新人補強で強力なチームに変貌し、その後の8大会で優勝3回、準優勝3回の成績を修め、計6回全国大会（うち全国大会準優勝1回）に駒を進めることになります。

これからの宮崎医科大学整形外科野球部の栄華に乞う御期待を！





## Review of Tajima's baseball ～ミスターとの思いで

平成5、8、14年キャプテン

松元 征徳

ミスターこと田島選手・監督おつかれさまでした。野球チームの一後輩として好きなことを書かせて頂いています。

平成の大横綱貴乃花の引退で日本が寂しくなっているとき(ちなみに小生の長男は貴徳)、ミスター田島の引退は宮崎医科大学ならびに日本整形外科関係はもちろん、小生にとって一緒に野球をプレーしていただけに、複雑な心境であります。やっと、ミスター＝教授が自己診断された右肩腱板損傷、膝半月板損傷(決してOAではない)も自然軽快したばかりなのに残念です。小生もそろそろ引退かと悩んでいただけに、先を越された焦りを隠しきれません。

思い起こせば90年、ミスターから、ドラフト1位で我が栄光の宮崎医科大学整形外科野球部に入団させて頂き、14年の歳月がたったんですね。ミスターの勧誘での殺し文句が、「甲子園か東京ドームで野球をしよう」でした。約束通り最近果たすことができました。そこまでには、非常に長い苦悩があったような気がします。

ミスターは何といっても野球好き、そして練習好きです。参考文献として、田島直也:たかが野球、されど野球. 整形外科 53:726、2002のなかで、練習は手加減なしにかなりハードに行ったとある。さすがであり、その通りである。ミスターはいつも早朝＝明け方、一番にきてユニホーム姿でランニングをしていました。

その姿は日の出に浮かびあがり、なんともいえない光を放っていました。ジャージ姿で頭ぼさぼさの小生の目が覚めるのに十分でありました。練習中は、気合いをいれろ、集中しろ、声を出せ、後10本と、まるで、熱闘甲子園ばりでした。小生が若いとき、朝練でミスターが豪雨の日にこなかった日がありました(当然です)。自分はたまたま、行っただけなのですが、その日、冗談で勝ち誇ったかのように、「雨でしたけど練習があるかと思って待ってました。」と言うと、次の雨の日、ミスターと呼ばれて、「今朝は誰も来てなかった。」と怒られました。

それから、雨の日もとりあえずグラウンドに行かざるを得ない風習を作ったことをこの文面をかりて、みんなにお詫びします。自分も連絡網を作ろうかと一時は考えたのですが、何せ朝が早いですし、教授の奥様に迷惑がかかること、多分教授に連絡をとるのが自分になることから、勝手に断念しました。また、小生がキャプテンの時、練習を減らしてはどうかと何度か口論しました。しかし、ミスターは「みんなでやろうと決めたことだ。上手い下手じゃない。練習参加は仕事での協調性をつくる。それに、自由参加だ。」さらに、「野球がだめなら、マラソンはどうだろうか。」と提案してきた。参った。確かにそうである。気さくに若い後輩がミスターと楽しそうに会話ができるありがたい唯一の場所がグラウンドなのかもしれない。しかし、実際、練習量は減ったことは確かであるが、最近の若い後輩達の参加が減ってきたのは、なんとも寂しい。グラウンドから何度も駐車場を見つめて来ない部員を待ち

わびる憂鬱な表情と参加人数の多いときのミスターの笑顔が対照的でした。

また、ミスターは負けず嫌いです。とにかく、練習はやった。勝たなければ、練習量と比例して負けたときの不機嫌さはすごかった。小生、数週間口をきいてもらえなかった。試合前のミーティングで、「絶対負けるわけにいかない。」これが、ミスターの決め台詞でした。具体的な作戦はなし。組み合わせ表をじっと見つめ、線が一直線に優勝に引かれていました。しかし、その緊張感と真剣さから、試合の応援には次第に若い看護婦の応援は2軍に持っていかれ、黄色い声は、ここ4、5年はきかれなくなりました。特に、九大と琉球戦、弘前と金沢戦は闘志めめら状態で、ミスターかなり顔面が紅潮していたのが印象的でした。反面、小生はチアノーゼ気味でしたが。

自分自身、90年入団より、不動の4番、平成5、8、14年キャプテンを任されました。ありがたいことは、自分に一度も小細工なサインは出たことがないこと、後輩選手達に恵まれたおかげですべて全国大会に出場できたことであります。不動の4番とはいいますが、35歳を過ぎてからは四死球で出塁する機会が増えています。増えたのではなく、打てるストライクゾーンが狭くなり、しょうがなく手を出せなくなってきたのが事実です。だいたい、4番は打つ気合いをみせて大きく構えて振るぞと威圧して見送れば、四球になるんです。ミスターから「今年は大きいのを頼むぞ」といわれ、もう3年以上が経ち、その約束を果たせなかったのが心残りです。今年金沢では、小生の一発とミスターのあの絶妙なスクイズのサインを成功させて接戦を勝ち上がり一緒に日本一優勝の舞台に立てたと願っています。多分ミスターのことですから、すでにメンバー表を数パターン作成しファイルに閉じていることでしょう。また、相談してください。

最後になりますが、たかが野球、されど野球です。田島教授の一野球人としての姿勢は情熱的で活動的です。来年再来年と早朝のグラウンドでまた、走っていることでしょう。できれば、練習開始の時期と時間については、小生ではなく医局長に聞いて頂きたいとお願いしまして、先生との思い出話の第一話を終わらせたいと思います。本当にお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。最後になりますが、我が田島軍は永久に不滅です。



平成5年 山口大会





## 野 球 っ て ……

平成9、10年キャプテン

### 矢 野 浩 明

田島教授のライフワークの一つに挙げられるものに野球があります（あると思います）が、その野球のキャプテンを経験していたこともあってその思い出について少し語りたいと思います。

私は、平成3年整形外科に入局し、入局当時は、諸先輩方より『研修医は野球も仕事』って教育（洗脳）されました。当時は道具置き場もなかったため研修医の仲間で道具を分配し車のトランクをロッカー代わりにして（させられ？）、道具を車に乗せていました。だから我々が朝練に行かないと練習ができなくなるので、必然的に練習に参加って形で、社会人としての野球生活？が始まりました。

当時の練習は確か火曜・土曜の6時からで、教授は、現在同様ほぼ100%に近いくらいの参加率で練習をされていらっしゃいました。『勝つためにはしっかり練習をしないといけない』という、勝負に臨むときの基本を一番しっかり実行されていたのは、選手達ではなく、田島教授（監督）でした。

そんなこんなで、初めての大会は、自分も20代でまだ若く、投手として臨んだわけですが初戦敗退してしまい、西日本整形のレベルの高さと大会終了が『えっ、もう終わり』ってくらい早く終わったことに驚きました。

平成4年も初戦敗退し、そして平成5年、忘れもしない南九州全域集中豪雨があったあの年、初めての全国大会行きの切符取得し、黄金期を迎えるかと思いきや、平成6、7年ともに監督も少なからずショック受けられたという初戦敗退となかなか常勝のチームとはいかなかった。しかしながらそれまでの練習の成果か？平成8年宮崎大会で優勝し、その翌年の平成9年にはキャプテンに任命され、『勝つためにはしっかり練習をしないといけない』という気持ちで、練習に参加し、そして万全の態勢で大会に臨みました。しかし、平成9、10年とも田島監督不在という条件での大会で、最低でも



平成9年度日整会親善野球大会

全国大会の出場権を持って帰らねばというプレッシャーがありました。その大会の時は、試合が終わるごとに結果を監督に報告し、何とか、両年とも目標を達成することができホッとしたものでした。

本当に現在強いチームになったな～と思います。平成8年以後現在までの7年で優勝－3回、準優勝－3回、Best 4－1回という戦績でまさに黄金期ではないかと思います。それも、監督の『勝つためにはしっかり練習をしないといけない』ということを実行され、地道な練習を積み上げた成果ではないかと思います。このことは何かを成し遂げるためには日々の地道な努力が、必要だと言うことを改めて自ら我々に示され、たかが野球ですが、今後我々はそういう姿勢で何事にも取り組まなくてはならないということも教えられたような気が致します。

最後になりましたが、田島教授（監督）長い間、本当にお疲れ様でした。





## 野球部キャプテンの思い出

平成 11、12、13 年キャプテン

福元 洋一

田島教授、御退官おめでとうございます。しかし、これからの医局の発展などを考えるとまだまだ早すぎるのではないかと残念に思います。田島教授には学生時代から野球部の顧問としてお世話になっており、西医体、九山などにも忙しい中を時間を空けて熱心に応援に来て下さいました。時には富山まで日帰りで応援に来られたこともありました。また、飲み会などにも必ず出席して積極的に学生と交流を持って下さいました。この教授の人柄に打たれ僕も田島教授の下で仕事がしたいと考え入局しました（しかし入局をお願いしたときの第一声は君は入局しても2軍だからねと言われてましたが……）。入局してからは野球に関しては大した活躍もなく2年目までは時々ピッチャーをさせてもらいましたが、一度も押さえたことがなくそれ以降2度とピッチャーをすることはありませんでした。その後、新入医局員の先生たちの登場で出場機会もめっきり減ってきて本当に2軍落ち寸前の状況でありがたいことにキャプテンという大役をいただきました。やっと野球部でお役に立てる時がきて責任重大ではありましたが、はりきってお受けすることとしました（でもキャプテンとしての仕事はじゃんけんとかじ引きしかありませんでしたが……）。平成11年から平成13年までキャプテンを務めさせていただき、お陰様で3年間で2回は全国大会に出場することができていい思い出を作ることができました。それぞれの大会を振り返ってみますとまず平成11年の西日本野球大会は北九州で行われました。はりきってキャプテン会議に参加しましたが、訳も分からずただまって座ってるだけで矢野先生がゴミ出しや弁当など質問しているのを見てさすが厚生係と感心しておりました。前夜祭では抽選会で緊張して手が震るえながら封筒を引き、自分のすべての運を使い果たしたような運のよさで見事1回戦不戦勝、しかも琉球大学、九大が別のパートで決勝まで当たらないという組み合わせになった。翌日試合が行われ、2回戦は鳥取大学、準決勝は大分医大、決勝は九大と対戦した。鳥取大学には7対1、大分医大には4対1、九大に6対0とどの試合も危なげ無く圧勝という形で優勝を収めました。この頃までは未だ衰えを見せぬ不動の4番バッターの松元先生や未だにほとんどストレートしか投げない矢野先生とベテラン勢の投打にわたる活躍を見せ見事な優勝で翌年の出場権を得ました。全国大会は平成12年4月に神戸で行われました。1回戦は名古屋市立大と対戦しました。序盤から押し気味に試合を進め1点を先制されたが、中盤に2点を入れしっかりと逆転した。2対1のまま最終回を迎え、勝利を確信した教授は温情で試合に出ていない僕を代打に送ったのが仇になってしまうとは……。結果はあえなく三振し、ここまでは余裕であった。しかし、最後の守りも2死ランナーなし打者は9番でしかも少し年齢の高そうな先生でいかにも三振で終わりそうな雰囲気の中、出会い頭にバットにボールが当たってしまいこれがなんとセンターオーバーのホームランとなってしまう。みんなが唖然とするなか勝負はじゃんけんになった。じゃんけんは9人対9人で行われ、一進一退の攻防で4対4の同点で最後に僕に回ってきてしまった。周りが緊張して見つめる中あっさ

りとゲーを出して負けてしまい教授の温情を仇で返す結果となってしまいました。その後、名古屋市立大が決勝まで進んだのを考えるとあの1球が、いやあの時チョコキを出していれば……。今度はその年の8月に佐賀で西日本野球大会が行われました。この全国大会の無念をはらすべく気合を入れて臨みました。この大会も順調に1回戦佐賀医大に15対0、大分医大に7対0と勝ち上がり琉球大学と対戦しました。やや押され気味の試合で2対0とリードされて最終回を迎え、その前の回に益山先生が足がつって出れなくなりまたもや僕に出番が回ってきてしまった。いやな予感の的中し最終回1点を返して2対1となってなおも1死満塁となりここで打順が僕に回ってきた。1ストライク取られた後に教授のサインはスクイズ、黒田先生との手術の時よりも緊張しながらバッテリーボックスに入り次の投球を見事にバントし、成功かに見えたが1塁ベースのわずか数センチ手前でできてファール。僕の人生を物語るようなファールの後あえなく三振に終わり、全国大会連続出場の夢も途絶え、短い夏が終わってしまいました。翌平成13年は8月に沖縄で行われました。教授最後の全国大会に向けて気合を入れて臨み1回戦は九大に2対2でじゃんけん勝ち、準決勝は久留米大に1対0のサヨナラ勝ち、決勝では琉球大に0対3と敗れましたが、全国大会の切符を見事手に入れました。この大会ではなんとといっても矢野先生の活躍につきます。久留米大戦でのサヨナラヒットがなければ全国大会も夢で終わっていたかもしれません。この大会以降、矢野先生の話題が以前の全国大会での幻のホームランからこのサヨナラヒットに変わり、今でもくやしそうな松元先生の前で楽しく話す姿が印象的です。まあ何とかこの大会で無事キャプテンを終了でき、有終の美を飾ることができました。思い出話はつきませんが、田島教授にはいろいろとお世話になり本当に感謝の言葉もありません。これからも医局だけでなく、野球でも名誉監督として全国大会優勝まで導いてほしいと思います。本当にありがとうございました。そしてお疲れさまでした。





# 野球大会 2 軍戦記

## 山 本 恵太郎

今年は“勝敗にこだわらず全員参加で楽しい2軍戦を”をモットーに（いつ決めたかは不明？）2軍戦を戦いました。でもいつのまにか超マジモードに突入し、教授最後の大会を4年ぶりの優勝で飾ることができたので、その奮闘記を綴ります。

最初は20人以上の登録をしていましたが、一人また一人と抜け、気がつけば残ったのはたった15人の少数精鋭となりました（高校野球のベンチ入り数より少ない）。

当日は今回も例に漏れず1回戦から試合がありました。しかし、例年より開始時間が1時間以上遅い9時開始のうえ、移動距離も少なかったため、朝食もゆっくり摂れて前夜の疲れも抜け体調はバッチシ。いざ出陣。

1回戦：1軍と同じく長崎大戦、昨年負けのリベンジを……果たす。

長 崎 大	0	0	0	0	0	0
宮 崎 医 大	1	2	1	0	3×	7

2回戦：相手は1試合目で元気な久留米。1軍戦のような競ったナイスゲーム。

久 留 米	0	0	1	0	1	0	0	2
宮 崎	1	0	2	2	0	0	×	5

準決勝：相手も3試合目でお疲れの福岡大戦。ここでは猛打爆発。

福 岡 大	2	0	2	4
宮 崎 医 大	6	4	1×	11

決勝：これまた1軍と同じ九州大戦。相手は本格的な投手も、やっとな緩い球より開放され、1軍との練習が生きクリーンヒットの連発で快勝。

九 州 大	1	2	0	0	0	3
宮 崎 医 大	3	0	3	0	1×	7

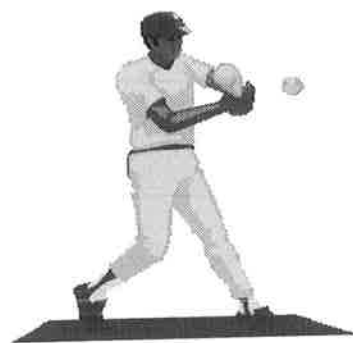
最後に、精鋭15人を紹介します。

帖佐 悦男：愛しの助教授。往年の俊足披露とはいかずとも、相変わらず口撃は絶口調。

ただ、味方もひっかかっては？ねえ、英一君。

黒木 隆男：足をつりながら、家族の声援でフル出場。攻守の要は健在。

- 柳園賜一郎：文句なしのMVP。鉄人39号。16回で三振20。防御率は驚異の1.13。
- 園田 典生：ワールドを決めたサヨナラホームランでの激走でハムストを痛めて2試合目でリタイアも、副業では負け知らずの仕事人ぶりは健在。
- 渡邊 信二：ちょっと腹が……の医局長も、外野からの捕殺はバッチシ決めた長老No.2。
- 山口政一朗：スピードだけなら1軍も、目的地不明の快速右腕。なんとかスタミナは保つ。
- 渡部 正一：守備への負担軽減で豪打炸裂かと思いきや、やや不発。しかし、夜のバットは今回も活火山。
- 後藤 啓輔：大アイス魔神。変な頭も変なフォームもお構いなしの1セーブ。延長もバッチシ。
- 川添 浩史：さすが前一軍。好守強肩を披露し影のMVP。ただ、2軍の投手のスピードに……で、強打は来年以降に。
- 後藤 英一：お笑い要員として、えびの分校より補強。夜の遊び人。珍プレーありも、好守好打の方が上回り、あとは指示者を選べば、来年以降も文句なしのレギュラー。
- 桐谷 力：最後は×点もあったが、高音域の笑い声は続いたスネオ君。
- 船元 太郎：柳園さんの打の闘志に火をつけたクールな好打者。新人王は君で決まり。でも若年寄。
- 甲斐 糸乃：相手投手からお約束のデッドボールで爆乳に。うんちく述べさせたら医局一。
- 黒木 修司：宮医大歴代最強のゴリちゃん。しかし、ボールと短大生には……。キヤー！
- 山本恵太郎：集団行動よりも仁義とギャンブル。知将(?)の評価も主将更送必至！
- 田島教授にも喜んでいただきました。来年以降もみんなで楽しい2軍戦を続けますので、復帰組も新顔組もどしどし参加してください。





## 平成 14 年同門会ゴルフの報告

戸 田 勝

同門会忘年ゴルフ大会は、ダンロップフェニックストーナメントの開催コースであるフェニックスカントリークラブで22名の参加者にて行われました。今年のトーナメントには、タイガーウッズが参戦したため、例年の2倍近いギャラリーを集めた話題の大会となり、1週間後のコンペ当日にもまだその余韻が残っているようでした。幸い天候にも恵まれ、晴天微風の好コンディションで、コースも住吉、高千穂とトーナメントと同じコースをラウンドすることになっており、各先生とも気合十分でスタート前には、パットの練習に余念がない様子でした。というのも、あのタイガーでさえ手こずった高速グリーンが待ちうけていたのですから。

住吉の1番ホールでティーグラウンドで記念撮影の後、河野会長、帖佐助教授の組からスタートしていきました。第2組の武内先生がスタートホール（パー5）でいきなりバーディを記録する健闘（珍事？）を見せ、早くも日頃の練習の成果が出たようでした。これで闘志に火がついたのか、同じ組の渡辺雄先生が前半3バーディ、3ボギーの36（後半は44、トータル80でベスグロ）と爆発し、ハンデシングルの実力を見せつけました。多くの先生はパットで苦しみ、悲鳴とも溜息ともつかぬ声があちらこちらで聞かれました。その上、コース改造がなされており、大きくて深いフェアウェーバンカーが左右に大きい口を開けているのです。スコアは推して知るべしです。

優勝は市原久史先生（アウト45、イン49、トータル94、ハンデ22.8）で、メンバーと隠しホールに恵まれたということでした。2位 平川先生、3位 園田先生、4位 坂本康典先生、5位 三股先生と実力のある先生が入賞されました。グロスでは80台3名、90台4名、100台11名、110台4名、ホール毎のスコアではバーディ7（1.8%）、パー77（19.4%）、ボギー112（28.3%）、ダボ107（27.0%）、その他93（23.5%）となり、かなりの右方偏位が認められました。しかし、参加された先生方の年齢に注目すると半数近くが20代と30代であり、今後の活躍が期待される所です。最後に会の運営進行に協力して頂きました先生方にお礼を申し上げます。





## 第5回同門会テニス大会

松本英裕

開催日は昨年より11月23日(勤労感謝の日)と決め、今年度も予定通りにエントランスプラザで午前9時から12時まで行いました。前日は大雨で、当日の天気予報も”雨”でしたが、参加者の熱意で雨を吹き飛ばし、後半は晴れ間も覗くほどのいいテニス日和でした。当日、川野先生(同門会テニス大会会長)が当番医のため参加できず、谷島先生も急患で参加できなくなり、福田先生、神菌先生、尾田先生、特別参加で県立宮崎病院の高妻先生と私(松本)の5名でした。試合方法はダブルス、4ゲーム先取とし、総当りで取得ゲーム数をポイントとしてポイントの多い順に順位を決定する方法で行いました。

最初から白熱する試合展開で、競った試合も多くありました。ケガもなく全員5試合ずつ行った結果、私が優勝させていただき、準優勝は尾田先生でした。試合後は、近くのレストランで表彰式を行い、皆、たくさんの景品を手にし解散となりました。テニス大会も5回を数え、参加者は盛り上がっていますが、今回は5名と寂しい人数でした。同門会の時にも呼びかけさせていただきましたが、初心者大歓迎です。春にオープン大会も考えています。多くの参加者をお待ちしております。



## 新入会員自己紹介



氏 名 野 崎 正太郎  
生年月日 昭和 45 年 2 月 22 日  
出身高校 日向学院高等学校  
出身大学 福岡大学  
血 液 型 A 型

この度、田島教授の御配慮で宮崎医科大学整形外科学教室に入局させていただきました。平成6年日本医科大学救急医学教室に入局後、順天堂浦安病院で整形外科研修をさせていただき、救命センターで主に整形外傷の診療に携わっておりました。

現在、大学の各グループで研修をさせていただいております。

今後、関連病院にて、諸先輩方のお世話になることもあると思いますので、御指導よろしく申し上げます。



氏 名 甲 斐 糸 乃  
生年月日 昭和 52 年 6 月 24 日  
出身高校 宮崎県立延岡東高等学校  
出身大学 宮崎医科大学  
血 液 型 A 型

H 14 年 5 月、整形外科に入局させていただきました、甲斐糸乃と申します。

入局してからの日々は、ただ、がむしゃらに走りつづけて来た感があります。それでも、なんだかんだと言いつつ、日一日を楽しく過ごさせて頂いております。これからは、慣れる事から成れる事へ、目標を変え努力していきたいと思っております。どうぞ、宜しくお願いします。



氏 名 黒 木 修 司  
生年月日 昭和 52 年 5 月 20 日  
出身高校 宮崎大宮高校  
出身大学 宮崎医科大学  
血 液 型 O 型

はじめまして、平成 14 年新入局員の黒木修司です。得意な分野は、体力と食べることに、苦手な分野は頭を使うことです。普段、先輩の先生方に鍛えられ、病棟中を走り回っています。

どうぞよろしくお願いいたします。



氏 名 山 元 美智子  
生年月日 昭和 38 年 7 月 11 日  
出身高校 神戸 Canadian Academy  
出身大学 帝京大学医学部  
血 液 型 O 型

“偽外国人”の山元です。マギーと呼ばれています。様々な国に渡り、色々な経験を得て南国宮崎に来ました。どうぞよろしくお願いいたします。





氏 名 船 元 太 郎  
生年月日 昭和 45 年 7 月 29 日  
出身高校 宮崎県立宮崎西高等学校  
出身大学 宮崎医科大学  
血 液 型 B 型

研修医となって早くも半年が過ぎました。社会人として2度目の出発となったわけですが、何とか日々の業務をこなすのが手一杯で、自分の知識・技術レベルが向上しているのか振り返ることもままならない有様です。時間を貯めておけるのならば、学生の頃の有り余っていた時間を今にまわして使いたいと思うほどです。

まだまだ至らない面も多く、これからも何かと諸先生方にご迷惑をおかけすることになると思いますが、ご指導のほど、よろしく願いいたします。



## 教室同門の研究業績

### ◆著書

- 1) 50%以上の脱臼度を示した CP 股関節に対する選択的筋解離術の効果

山口和正, 坂口 亮 編著

脳性運動障害児・者に対する治療及びリハビリテーションの治療的効果とその評価に関する総合的研究 (厚生省障害保健福祉総合研究事業), p102-105, 総合医療センター, 東京, 2001.

### ◆原著

- 1) 臨床スポーツ医学会 10 年間の歩みと 21 世紀への期待

田島直也

日本臨床スポーツ医学会誌, 9 (1): 1~6, 2001.

- 2) 特集 [側彎症学校検診のありかた] 宮崎県 (地方都市) における側彎症検診の現状と問題点  
—モアレ法の有用性—

黒木浩史, 田島直也, 渡邊信二

整形外科・災害外科, 44: 33~39, 2001.

- 3) [トピックス] MRI と脊椎造影の比較～腰椎疾患について

黒木浩史, 田島直也

NEW MOOK 整形外科, 9: 315~321, 2001.

- 4) 重度障害児 (者) の骨盤側傾

山口和正, 柳園賜一郎

日小整外, 10 (1): 95~98, 2001.

- 5) 頸椎後方 instrument における Olerud Cervical の使用経験

安達耕一, 小西宏昭, 原真一郎, 高須賀良一, 原 寛徳, 山口和博,  
馬場秀夫, 井上 篤, 山崎浩二郎, 玉井 崇

整形外科と災害外科, 50 (1): 1~5, 2001.

- 6) 反復性肩関節脱臼に対する Bristow 変法の術後成績

谷島 満, 黒木龍二, 矢野浩明, 松岡 篤, 田島直也, 川越正一

整形外科と災害外科, 50 (1): 232~236, 2001.



- 7) 人工膝関節置換術後の歩行の検討  
後藤英一, 帖佐悦男, 松岡知己, 渡邊信二, 坂本武郎, 公文崇詞  
田島直也  
整形外科と災害外科, 50 (2) : 312 ~ 315, 2001.
- 8) 高齢者における胸腰椎圧迫骨折の予後と造影 MRI との関連について  
益山松三, 田辺龍樹, 松元征徳, 山口政一朗, 田島直也, 矢野浩明  
整形外科と災害外科, 50 (2) : 324 ~ 327, 2001.
- 9) 胸腰椎破裂骨折に対する前方除圧再建術の治療成績  
有住裕一, 田島直也, 久保紳一郎, 黒木浩史, 後藤啓輔, 川野彰裕  
整形外科と災害外科, 50 (2) : 349 ~ 353, 2001.
- 10) 高齢者 (70 歳以上) の腰椎疾患に対する手術例の検討  
栗原典近, 田島直也, 黒木浩史, 後藤啓輔, 有住裕一  
西日本脊椎研究会誌, 27 (2) : 266 ~ 270, 2001.
- 11) 実業団柔道選手の外傷・障害とその対策  
樋口潤一, 森 治樹, 田島直也, 帖佐悦男, 園田典生, 山本恵太郎,  
黒木俊政  
九州・山口スポーツ医・科学研究会誌, 13 : 128 ~ 132, 2001.
- 12) [スポーツ外来の現状と今後の課題] 地方国立大学附属病院において  
園田典生, 帖佐悦男, 田島直也, 黒木俊政, 樋口潤一  
日本臨床スポーツ医学会誌, 9 (3) : 296 ~ 299, 2001.
- 13) Long-term use of mizoribine in rheumatoid arthritis patients on hemodialysis  
Koichiro Saisyo, Osamu Kurosawa, Tsuyoshi Fukanoki  
Akinori Hanafusa, Naoya Tajima  
Journal of Modern Rheumatology, 11 : 132 ~ 135, 2001.
- 14) [スポーツ障害と外傷] Ⅲ. メディカルチェック～整形外科的チェック  
田島直也, 帖佐悦男, 園田典生  
関節外科, 20 : 38 ~ 44, 2001.
- 15) Preservation of calcium pyrophosphate dihydrate crystals: effect of Mayer's  
haematoxylin staining period  
T Ohira, K Ishikawa  
Annals of The Rheumatic Diseases, 60 (1) : 80 ~ 82, 2001.

16) 骨盤骨折に対する治療経験

海田博志, 有蘭 剛, 阿久根広宣, 由布竜矢, 中山功一, 高妻雅和,  
徳久俊雄, 小林邦雄  
整形外科と災害外科, 50 (3): 663 ~ 665, 2001.

17) 小児橈骨遠位端骨折変形に対する手術経験

原田香苗, 中島英親, 寺本憲市郎, 田中達朗, 名護宏泰, 戸羽直樹  
整形外科と災害外科, 50 (3): 769 ~ 775, 2001.

18) 長管骨転移性骨腫瘍に対する骨接合術(セメント併用)の経験

小牧 亘, 帖佐悦男, 坂本武郎, 渡邊信二, 坂田勝美, 岡田麻里  
田島直也  
整形外科と災害外科, 50 (3): 836 ~ 840, 2001.

19) 小児における下肢広範囲皮膚欠損に対する治療経験

田中達朗, 中島英親, 寺本憲市郎, 原田香苗, 名護宏泰, 戸羽直樹,  
米満弘之  
整形外科と災害外科, 50 (4): 949 ~ 953, 2001.

20) 腰椎椎間板ヘルニア患者における椎間関節の形態学的検討

有蘭 剛, 小林邦雄, 徳久俊雄, 高妻雅和, 阿久根広宣, 中山功一,  
海田博志, 由布竜矢  
整形外科と災害外科, 50 (4): 1008 ~ 1011, 2001.

21) 投球時における体幹回旋についての検討

坂田勝美, 帖佐悦男, 渡邊信二, 坂本武郎, 岡田麻里, 小牧 亘  
田島直也  
整形外科と災害外科, 50 (4): 1044 ~ 1047, 2001.

22) 脳性麻痺股関節亜・脱臼に対する筋解離術の効果

村上 弘, 山口和正, 柳園賜一郎  
整形外科と災害外科, 50 (4): 1080 ~ 1084, 2001.

23) 前腕における仮骨延長法の経験

矢野浩明, 黒木龍二, 園田典生, 山本恵太郎, 村上恵美, 田島直也,  
川越正一, 戸田 勝  
整形外科と災害外科, 50 (4): 1094 ~ 1097, 2001.

- 24) エチドロン酸二ナトリウム投与における骨代謝マーカーと骨塩量の変化について  
有住裕一, 田島直也, 帖佐悦男, 黒木浩史, 後藤啓輔, 栗原典近  
整形外科と災害外科, 50 (4) : 1104 ~ 1106, 2001.
- 25) 慢性関節リウマチ高度膝関節破壊例における人工膝関節置換の経験  
益山松三, 桑原 茂, 金井純次, 篠原典夫, 木村千仞  
整形外科と災害外科, 50 (4) : 1133 ~ 1138, 2001.
- 26) 腰椎椎間板に内圧を設定した三次元 FEM モデルでの解析  
後藤啓輔, 田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 黒木浩史, 有住裕一,  
新井 隆  
日本臨床バイメカニクス学会誌, 22 : 237 ~ 241, 2001.
- 27) 股関節症に対する内反骨切り術の適応と長期成績  
長鶴義隆, 松岡知己, 川添浩史, 江夏 剛  
Hip Joint, 27 : 46 ~ 49, 2001.
- 28) Hip-Spine Syndrome -分類における症状とX線学的特徴-  
帖佐悦男, 田島直也, 坂本武郎, 渡邊信二  
Hip Joint, 27 : 140 ~ 144, 2001.
- 29) 変形性股関節症におけるX線像の評価基準について  
坂本武郎, 帖佐悦男, 渡邊信二, 田島直也  
Hip Joint, 27 : 215 ~ 217, 2001.
- 30) 人工股関節置換術後の歩行変化  
渡邊信二, 帖佐悦男, 坂本武郎, 田島直也  
Hip Joint, 27 : 403 ~ 406, 2001.
- 31) 職業性腰痛の疫学  
帖佐悦男, 田島直也, 松元征徳, 黒木浩史, 後藤啓輔  
日本腰痛学会雑誌, 7 (1) : 100 ~ 104, 2001.
- 32) Biochemical and morphological changes in herniated human intervertebral disc  
Rashedul Ahsan, Naoya Tajima, Etsuo Chosa, Masao Sugamata,  
Michihiro Sumida, Minoru Hamada  
Journal of Orthopaedic Science, 6 (6) : 510 ~ 518, 2001.

- 33) 特集 [冬期における高齢者特有の疾病対策] 特に注意すべき疾患の診療上の注意～神経痛・腰痛  
田島直也  
臨床と研究, 78 (12) : 2163 ~ 2166, 2001.
- 34) Characterization of two mutant lines established by gene trap strategy; Ayu8022 and Ayu8030  
Tomohisa Sekimoto, Junichiro Yoshimuta, Masatake Araki  
Misao Suzuki, Naoya Tajima, Kimi Araki, Ken-ichi Yamamura  
Development Growth & Differentiation 43(Supp.) : 59, 2001.
- 35) Analysis of gene trapped clone "Ayu8008"  
Kumiko Yoshinobu, Masatake Araki, Junichiro Yoshimuta  
Tomohisa Sekimoto, Kimi Araki, Misao Suzuki, Ken-ichi Yamamura  
Development Growth & Differentiation, 43(Supp.) : 60, 2001.
- 36) Production and analyses of mutant lines established by exchangeable gene trap strategy  
Takuya Taniwaki, Tomohisa Sekimoto, Fumiyo Saitou,  
Takashi Imaizumi, Yumi Sakumura, Yumi Kimura, Mayumi Muta,  
Tatsuyuki Nakashima, Ayako Utou, Haruko Niizato,  
Masatake Araki, Kimi Araki, Ken-ichi Yamamura  
Development Growth & Differentiation, 43(Supp.) : 61, 2001.
- 37) Characterization of two mutant mouse lines (Ayu8021 and Ayu8029) established by the exchangeable gene trapping  
Kei Semba, Tomohisa Sekimoto, Kimi Araki, Misao Suzuki  
Ken-ichi Yamamura  
Development Growth & Differentiation, 43(Supp.) : 62, 2001.
- 38) Exchangeable gene trapping vector with or without IRES  
Araki M., Yoshinobu K., Taniwaki T., Sekimoto T., Haruna K.  
Oike Y., Imaizumi T., Yoshimuta J., Akizuki M., Miura K.  
Li Z., Semba K., Suzuki M., Nakagata N., Saito F., Niizato H.  
Nakashima T., Muta M., Utou A., Kimura Y., Sakumura Y.  
Yanagihara S., Nakatsukasa E., Tanaka M., Kagami Y.,  
Yamamura K., Araki K.  
International Mouse Genome Conference, 15 : 191, 2001.

39) Analysis of Ayu 8008 mouse line established by exchangeable gene trap

Kumiko Yoshinobu, Kimi Araki, Junichiro Yoshimuta,  
Tomohisa Sekimoto, Misao Suzuki, Ken-ichi Yamamura  
Masatake Araki

International Mouse Genome Conference, 15 : 210, 2001.

◆症例報告

1) 30歳男性に発症した両側大腿骨頸部 insufficiency fracture の1例

黒沢 治, 税所幸一郎, 前田和徳, 深野木快士  
整形外科と災害外科, 50 (1) : 269 ~ 272, 2001.

2) 治療に難渋した緑膿菌による化膿性膝関節炎の1例

浪平辰州, 前田和徳  
整形外科と災害外科, 50 (2) : 521 ~ 525, 2001.

3) 柔道による小児外傷性股関節脱臼の1例

田島卓也, 園田典生, 帖佐悦男, 田島直也, 柏木輝行, 矢野良英  
九州・山口スポーツ医・科学研究会誌, 13 : 98 ~ 101, 2001.

4) Charcot 肘関節に発症した化膿性肘関節炎の1例

浪平辰州, 前田和徳  
整形外科と災害外科, 50 (3) : 872 ~ 876, 2001.

5) リマプロスト アルファデクス投与により間歇性跛行が改善した腰部脊柱管狭窄症の1例

栗原典近, 田島直也, 久保紳一郎, 黒木浩史, 後藤啓輔  
Progress in Medicine, 21 (12) : 2819 ~ 2820, 2001.

6) 21年を経過した新鮮同種膝関節部分移植の一例

渡辺 雄, 松本智子  
膝, 26 : 110 ~ 113, 2001.

## ◆学会報告

1) 下腿不全切断後に生じた尖足変形

柳園賜一郎, 山口和正

第17回九州小児整形外科集談会, 2001, 1, 福岡.

2) 環指浅指屈筋腱を用いた母指対立再建術について

黒木龍二, 帖佐悦男, 園田典生, 矢野浩明, 谷島 満, 田島直也  
川越正一

第22回九州手の外科研究会, 2001, 2, 宜野湾.

3) バレーボールによる DIP 関節掌側板単独損傷の1例

後藤英一, 黒木龍二, 園田典生, 矢野浩明, 山本恵太郎, 田島直也

第24回宮崎県スポーツ医学研究会, 2001, 2, 宮崎.

4) 膝蓋大腿関節に発生した離断性骨軟骨炎の2症例

森 治樹, 樋口潤一, 野中隆史

第24回宮崎県スポーツ医学研究会, 2001, 2, 宮崎.

5) 距骨離断性骨軟骨炎に対する鏡視下骨接合術の経験

園田典生, 田島直也, 帖佐悦男, 山本恵太郎

第24回宮崎県スポーツ医学研究会, 2001, 2, 宮崎.

6) 国体少年選抜チーム(サッカー)に対するメディカルサポート

樋口潤一

第24回宮崎県スポーツ医学研究会, 2001, 2, 宮崎.

7) 糖尿病運動療法の経験

獅子目賢一郎, 黒田 宏, 尾田朋樹, 鳥取部光司

第24回宮崎県スポーツ医学研究会, 2001, 2, 宮崎.

8) 21年を経過した新鮮同種膝関節部分移植の1例

渡辺 雄, 松本智子

第2回日本膝関節学会, 2001, 2, 東京.

9) 腹痛のみを主訴とし診断に難渋した胸椎部脊髄腫瘍の1例

黒木浩史, 田島直也, 後藤啓輔, 栗原典近, 有住裕一, 小菌敬洋

第15回宮崎痛みの研究会, 2001, 2, 宮崎.

- 10) 宮崎県高校サッカー選手の体格・体力の比較  
中村真由美, 田島直也, 樋口潤一, 黒木俊政  
第 23 回宮崎リハビリテーション研究会, 2001, 2, 宮崎.
- 11) 上腕骨顆部複合骨折の 5 例  
秋元伸之, 千代反田修  
第 17 回宮崎救急医学会, 2001, 2, 日向.
- 12) 前立腺癌大腿骨転移巣の腫瘍搔爬術後の播種性血管内凝固症候群を発症した一例  
公文崇詞, 岩坪修司, 増田 寛, 帖佐宣昭, 山賀昌治, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎真弓  
第 17 回宮崎救急医学会, 2001, 2, 日向.
- 13) ハローベスト装着患者の呼吸困難に非侵襲的陽圧換気を使用した一症例  
増田 寛, 岩坪修司, 公文崇詞, 帖佐宣昭, 山賀昌治, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎真弓  
第 17 回宮崎救急医学会, 2001, 2, 日向.
- 14) RA に見られた特発性大腿骨転子下骨折の 1 例  
猪俣尚規, 坂本康典, 税所幸一郎  
第 16 回宮崎県リウマチ研究会, 2001, 3, 宮崎.
- 15) RA 母指 IP 関節脱臼に対する CHCS 使用固定術の経験  
村上 弘, 金井純次, 益山松三, 桑原 茂, 山下良三  
第 16 回宮崎県リウマチ研究会, 2001, 3, 宮崎.
- 16) 股関節手術における Modified transgluteal approach の有用性  
帖佐悦男, 田島直也, 坂本武郎, 渡邊信二  
第 74 回日本整形外科学会学術集会, 2001, 4, 千葉.
- 17) 特発性股関節関節唇骨化の検討  
帖佐悦男, 田島直也, R.Ganz  
第 74 回日本整形外科学会学術集会, 2001, 4, 千葉.
- 18) ハイドロキシアパタイトブロックを使用した後側方固定術の検討  
鳥取部光司, 田島直也, 黒木浩史, 後藤啓輔, 帖佐悦男, 片岡寛章  
河野 正  
第 74 回日本整形外科学会学術集会, 2001, 4, 千葉.

- 19) 腰椎後側方固定術後の長期成績と隣接椎間障害の検討  
安達耕一, 小西宏昭, 原真一郎, 高須賀良一, 山口和博, 馬場秀夫  
井上 篤, 麻生英一郎, 野崎義宏, 崎村俊之  
第 74 回日本整形外科学会学術集会, 2001, 4, 千葉.
- 20) Dupuytren 拘縮に対する手術成績の検討  
寺本憲市郎, 中島英親, 原田香苗, 田中達朗, 名護宏泰  
第 44 回日本手の外科学会学術集会, 2001, 5, 大阪.
- 21) 80 歳以上の頸髄症に対する脊柱管拡大術の治療成績 - 70 歳代との比較 -  
小西宏昭, 原真一郎, 山口和博, 馬場秀夫, 井上 篤, 安達耕一  
第 30 回日本脊椎脊髄病学会, 2001, 6, 高知.
- 22) 頸椎前方固定術におけるプレート使用の意義  
安達耕一, 小西宏昭, 原真一郎, 馬場秀夫, 井上 篤  
第 30 回日本脊椎脊髄病学会, 2001, 6, 高知.
- 23) 腰椎固定による上位隣接椎間における力学的検討 - 三次元有限要素法を用いて -  
後藤啓輔, 田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 黒木浩史, 有住裕一  
新井 隆  
第 30 回日本脊椎脊髄病学会, 2001, 6, 高知.
- 24) 高齢者 (70 歳以上) の頸椎変性疾患に対する手術的治療の意義と問題点  
栗原典近, 田島直也, 黒木浩史, 後藤啓輔, 有住裕一  
第 30 回日本脊椎脊髄病学会, 2001, 6, 高知.
- 25) 在宅介護者の介護負担感 (第 2 報)  
田中正一  
第 38 回日本リハビリテーション医学会学術集会, 2001, 6, 横浜.
- 26) 高齢者頸椎手術症例の臨床成績および合併症の検討  
鳥取部光司, 田島直也, 帖佐悦男, 黒木浩史, 後藤啓輔, 栗原典近  
第 38 回日本リハビリテーション医学会学術集会, 2001, 6, 横浜.
- 27) 看護職員に対する腰痛体操の効果について  
帖佐悦男, 田島直也, 鳥取部光司, 松元征徳, 黒木浩史, 後藤啓輔  
第 38 回日本リハビリテーション医学会学術集会, 2001, 6, 横浜.



28) 考案したヒッププロテクター

平部久彬

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

29) マレット指に対する石黒法の治療経験

坂田勝美, 長鶴義隆, 松岡知己, 川添浩史

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

30) スプラウトピンによる上腕骨近位端骨折の治療経験

浪平辰州, 江夏 剛

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

31) 肺塞栓予防に下大静脈フィルターを使用した THR の 1 例

市原久史, 木屋博昭, 弓削孝雄, 藤本 徹, 田口 学, 東 高弘  
西里徳重

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

32) 整形外科的手術を施行したラテックス・アレルギー患児の 1 例

公文崇詞, 柳園賜一郎, 山口和正

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

33) 腰椎椎間板ヘルニアにおける椎間関節の形態学的検討—非対称性はヘルニアの発症因子となりうるか—

有菌 剛, 小林邦雄, 徳久俊雄, 高妻雅和, 阿久根広宣, 喜多正孝  
海田博志, 由布竜矢

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

34) 術後再挿管を要した頸椎脱臼の一症例

藤本 徹, 木屋博昭, 弓削孝雄, 田口 学, 東 高弘, 市原久史  
西里徳重

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

35) 高度不安定性を伴った頸椎 DSA 2 症例の検討

由布竜矢, 阿久根広宣, 徳久俊雄, 高妻雅和, 有菌 剛, 海田博志  
喜多正孝, 寺原幹雄, 小林邦雄

第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎。

- 36) 頸椎後縦靭帯骨化症における脊髄症発症因子の検討  
喜多正孝, 有菌 剛, 小林邦雄, 徳久俊雄, 高妻雅和, 阿久根広宣  
海田博志, 由布竜矢  
第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎.
- 37) 当科における外傷性頸椎損傷症例について  
大倉俊之, 田島直也, 久保紳一郎, 黒木浩史, 後藤啓輔, 栗原典近  
第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎.
- 38) Magerl 法の適応と安全対策  
阿久根広宣, 徳久俊雄, 高妻雅和, 有菌 剛, 海田博志, 喜多正孝  
由布竜矢, 寺原幹雄, 小林邦雄  
第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎.
- 39) 頸椎症性神経根症に対する後方除圧術の適応についての検討  
海田博志, 阿久根広宣, 徳久俊雄, 高妻雅和, 有菌 剛, 喜多正孝  
由布竜矢, 寺原幹雄, 小林邦雄  
第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎.
- 40) 高齢者 (70 歳以上) の頸椎変性疾患に対する手術的治療の意義と問題点  
栗原典近, 田島直也, 久保紳一郎, 黒木浩史, 後藤啓輔  
第 42 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 6, 宮崎.
- 41) 神経損傷を合併した仙骨骨折の 1 症例  
和田正一, 下野哲朗, 中川雅裕, 吉永一春, 前原東洋  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 42) 高齢者大腿骨頸部骨折における社会的背景と ADL について  
松岡 篤, 田辺龍樹, 松元征徳, 田爪陽一朗, 戸田 勝, 矢野浩明  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 43) 外傷後鎖骨遠位端骨溶解症の 1 例  
飯干 明, 濱中秀昭, 伊勢紘平  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 44) スプラウトピンによる上腕骨近位端骨折の治療経験  
浪平辰州, 江夏 剛  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.

- 45) DIP 関節掌側板単独損傷の 1 例  
後藤英一, 黒木龍二, 園田典生, 矢野浩明, 山本恵太郎, 田島直也  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 46) 当科における人工肩関節置換術の術後成績  
本荘憲昭, 柴田陽三, 緑川孝二, 内藤正俊  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 47) 陳旧性骨盤骨折の治療経験  
中山功一, 有菌 剛, 阿久根広宣, 高妻雅和, 徳久俊雄, 小林邦雄  
海田博志, 塚本伸章  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 48) 透析患者に発症した大腿四頭筋腱皮下断列の一例  
濱中秀昭, 飯干 明, 伊勢紘平  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 49) 骨接合における ACUTRAK screw(ACUMED) の使用経験  
山本恵太郎, 黒木龍二, 園田典生, 矢野浩明, 田島直也  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 50) リン酸カルシウム骨ペーストを併用した RA 人工膝関節再置換術の経験  
村上 弘, 桑原 茂, 金井純次, 益山松三, 篠原典夫, 木村千仍  
大平 卓  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 51) Bizarre parosteal osteochondromatous proliferation(BPOP) の 1 例  
村上恵美, 帖佐悦男, 坂本武郎, 渡邊信二, 岡田麻里, 田島直也  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 52) 腰椎変性疾患における椎間関節の形態学的検討  
有菌 剛, 小林邦雄, 徳久俊雄, 高妻雅和, 阿久根広宣, 中山功一  
海田博志, 塚本伸章  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.
- 53) 腰椎すべり症における椎間動態の検討  
増田 寛, 田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 黒木浩史, 後藤啓輔  
河原勝博  
第 101 回西日本整形・災害外科学会, 2001, 6, 久留米.

- 54) Characterization of two mutant lines established by gene trap strategy; Ayu8022 and Ayu8030  
Tomohisa Sekimoto, Junichiro Yoshimuta, Masatake Araki  
Misao Suzuki, Naoya Tajima, Kimi Araki, Ken-ichi Yamamura  
14th International Congress of Developmental Biology, 2001, 7,  
Kyoto.
- 55) Analysis of gene trapped clone "Ayu8008"  
Kumiko Yoshinobu, Masatake Araki, Junichiro Yoshimuta  
Tomohisa Sekimoto, Kimi Araki, Misao Suzuki, Ken-ichi Yamamura  
14th International Congress of Developmental Biology, 2001, 7,  
Kyoto.
- 56) Characterization of two mutant mouse lines (Ayu8021 and Ayu8029) established by the  
exchangeable gene trapping  
Kei Semba, Tomohisa Sekimoto, Kimi Araki, Misao Suzuki  
Ken-ichi Yamamura  
14th International Congress of Developmental Biology, 2001, 7,  
Kyoto.
- 57) Production and analyses of mutant lines established by exchangeable gene trap strategy  
Takuya Taniwaki, Tomohisa Sekimoto, Fumiyo Saitou  
Takashi Imaizumi, Yumi Sakumura, Yumi Kimura, Mayumi Muta  
Tatsuyuki Nakashima, Ayako Utou, Haruko Niizato  
Masatake Araki, Kimi Araki, Ken-ichi Yamamura  
14th International Congress of Developmental Biology, 2001, 7,  
Kyoto.
- 58) Naso-maxillary deformity due to inappropriate expression of human mutant  
transthyretin (TTR) gene in transgenic mice  
Hiromitsu Noguchi, Kimi Araki, Masatake Araki  
Tomohisa Sekimoto, Naomi Nagata, Tomomichi Ono  
Ken-ichi Yamamura  
14th International Congress of Developmental Biology, 2001, 7,  
Kyoto.
- 59) 腹膜透析中に真菌感染を起こし持続的血液濾過透析管理を行った一症例  
嵐 千尋, 山下真治, 小菌敬洋, 柏田政利, 松岡博史, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎眞弓  
第18回宮崎救急医学会, 2001, 8, 宮崎.

- 60) 経皮的心肺補助装置で15日間管理した特発性間質性肺炎の一症例  
柏田政利, 山下真治, 嵐 千尋, 小藺敬洋, 松岡博史, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎眞弓  
第18回宮崎救急医学会, 2001, 8, 宮崎.
- 61) 悪性リンパ腫治療中に腫瘍崩壊症候群で急性腎不全と呼吸不全になった小児の一例  
松岡博史, 嵐 千尋, 山下真治, 小藺敬洋, 柏田政利, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎眞弓  
第18回宮崎救急医学会, 2001, 8, 宮崎.
- 62) ギランバレー症候群と鑑別困難であった低カリウム性ミオパチーの一症例  
山下真治, 嵐 千尋, 小藺敬洋, 柏田政利, 松岡博史, 谷口正彦  
濱川俊朗, 高崎眞弓  
第18回宮崎救急医学会, 2001, 8, 宮崎.
- 63) 大腿骨転子下の Insufficiency fracture が疑われた RA の一例  
猪俣尚規, 坂本康典, 税所幸一郎, 田島直也  
第22回九州リウマチ学会, 2001, 9, 熊本.
- 64) 脛骨跳躍型疲労骨折に関する FEM を用いた非線形解析  
園田典生, 田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司  
第27回日本整形外科スポーツ医学会学術集会, 2001, 9, 広島.
- 65) 頸椎手術を要した RA 多関節手術と QOL  
桑原 茂, 田島直也, 金井純次  
第29回日本リウマチ・関節外科学会, 2001, 10, 熊本.
- 66) BTB 法と STG 法による ACL 再建術の比較—術後の筋力回復からの考察—  
中村真由美, 田島直也, 園田典生, 山本恵太郎, 黒木俊政  
樋口潤一  
第23回国立理学療法士学会, 2001, 10, 佐賀.
- 67) Dynamic Spinal Instruments の試作 A Preliminary Report  
田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 後藤啓輔, 新井恒明, 住谷健二  
第16回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.
- 68) 頸椎前方固定術における HA/PLLA Cage の力学的検討  
鳥取部光司, 田島直也, 帖佐悦男, 松元征徳, Goel VK, 敷波保夫  
第16回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.

- 69) 棘突起縦割式椎弓形成術の生体力学的特性  
久保紳一郎, Vijay K.Goel, 田島直也, 鳥取部光司, 黒木浩史  
後藤啓輔  
第 16 回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.
- 70) 腰椎固定による固定隣接椎間への影響 - 三次元有限要素法を用いて -  
後藤啓輔, 田島直也, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 久保紳一郎, 黒木浩史  
第 16 回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.
- 71) 特発性股関節関節唇骨化の病態  
帖佐悦男, 田島直也, 坂本武郎, 渡邊信二, Reinhold Ganz  
第 16 回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.
- 72) Hip-spine Syndrome - Macnab の分類における臨床症状と X 線学的特徴の検討 -  
帖佐悦男, 田島直也, 坂本武郎, 渡邊信二, 岡田麻里, 村上恵美  
第 16 回日本整形外科学会基礎学術集会, 2001, 10, 広島.
- 73) Exchangeable gene trapping vector with or without IRES  
Araki M., Yoshinobu K., Taniwaki T., Sekimoto T., Haruna K.  
Oike Y., Imaizumi T., Yoshimuta J., Akizuki M., Miura K.  
Li Z., Semba K., Suzuki M., Nakagata N., Saito F., Niizato H.  
Nakashima T., Muta M., Utou A., Kimura Y., Sakumura Y.  
Yanagihara S., Nakatsukasa E., Tanaka M., Kagami Y.  
Yamamura K., Araki K.  
15th International Mouse Genome Conference, 2001, 10, Edinburgh.
- 74) Analysis of Ayu8008 mouse line established by exchangeable gene trap  
Kumiko Yoshinobu, Kimi Araki, Junichiro Yoshimuta  
Tomohisa Sekimoto, Misao Suzuki, Ken-ichi Yamamura  
Masatake Araki  
15th International Mouse Genome Conference, 2001, 10, Edinburgh.
- 75) 医学部ラグビー部員の頸椎変化と頸部周囲筋力  
田島卓也, 田島直也, 帖佐悦男, 園田典生, 山本恵太郎  
第 12 回日本臨床スポーツ医学会, 2001, 11, つくば.
- 76) 寛骨臼回転骨切り術の手技と長期成績 - 寛骨臼球状骨切り術 (SAO) -  
長鶴義隆, 松岡知己, 川添浩史, 坂田勝美  
第 28 回日本股関節学会学術集会, 2001, 11, さいたま.

- 77) HATCP コーティング人工骨頭の術後5年以上の成績について  
坂本武郎, 帖佐悦男, 渡邊信二, 村上恵美, 田島直也  
第28回日本股関節学会学術集会, 2001, 11, さいたま.
- 78) 寛骨臼側に骨移植を併用した人工股関節置換術の検討  
渡邊信二, 帖佐悦男, 坂本武郎, 村上恵美, 田島直也  
第28回日本股関節学会学術集会, 2001, 11, さいたま.
- 79) 本邦における Idiopathic ossification of the labrum (特発性関節唇骨化) について  
帖佐悦男, 田島直也, 坂本武郎, 渡邊信二, 村上恵美  
第28回日本股関節学会学術集会, 2001, 11, さいたま.
- 80) 脊椎硬膜外血腫の1例  
福嶋秀一郎, 田島直也, 久保紳一郎, 後藤啓輔, 栗原典近, 池尻洋史  
第102回西日本整形・災害外科学会, 2001, 11, 佐賀.
- 81) HATCP コーティング人工骨頭の術後5年以上のX線学的検討  
黒沢 治, 帖佐悦男, 坂本武郎, 渡邊信二, 村上恵美, 大倉俊之  
上通一師, 田島直也  
第102回西日本整形・災害外科学会, 2001, 11, 佐賀.
- 82) 当科における片麻痺に合併した大腿骨頸部骨折の治療経験  
浪平辰州, 江夏 剛  
第102回西日本整形・災害外科学会, 2001, 11, 佐賀.
- 83) Brodie's abscess との鑑別を要した骨内ガングリオンの1例  
濱田浩朗, 小牧一磨, 佐藤隆三  
第102回西日本整形・災害外科学会, 2001, 11, 佐賀.
- 84) 腰椎固定による他椎間への影響—三次元有限要素法を用いて—  
後藤啓輔, 田島直也, 帖佐悦男, 久保紳一郎, 鳥取部光司  
第28回日本臨床バイオメカニクス学会, 2001, 11, 大阪.
- 85) サーファーの腰痛アンケート調査に基づく検討  
岡田麻里, 帖佐悦男, 渡邊信二, 田島直也  
第14回九州・山口スポーツ医・科学研究会, 2001, 12, 福岡.

- 86) 水中運動の整形外科疾患、内科疾患への応用について  
獅子目賢一郎, 黒田 宏, 尾田朋樹, 塩月裕範  
第 14 回九州・山口スポーツ医・科学研究会, 2001, 12, 福岡.
- 87) 可変型遺伝子トラップによるトラップラインの樹立と解析  
谷脇琢也, 関本朝久, 斉藤文代, 今泉隆志, 尾池雄一, 中潟直巳  
荒木正健, 荒木喜美, 山村研一  
第 24 回日本分子生物学会, 2001, 12, 横浜.
- 88) 遺伝子トラップ法により得られた変異マウス Ayu8022 と Ayu8030 の解析  
関本朝久, 吉牟田純一郎, 鈴木操, 田島直也, 荒木喜美, 山村研一  
第 24 回日本分子生物学会, 2001, 12, 横浜.
- 89) 遺伝子トラップ法により樹立されたマウスライン Ayu8008 の解析  
吉信公美子, 吉牟田純一郎, 関本朝久, 荒木喜美, 鈴木操  
山村研一, 荒木正健  
第 24 回日本分子生物学会, 2001, 12, 横浜.
- 90) 可変型遺伝子トラップ法により得られた変異マウス Ayu8021 と Ayu8029 の解析  
仙波圭, 王鳳山, 李正哲, 久保亮治, 関本朝久, 鈴木操, 阿部訓也  
荒木喜美, 山村研一  
第 24 回日本分子生物学会, 2001, 12, 横浜.
- 91) Tendon gliding surface としての temporal fascial flap の有用性について  
藤林久輝, 横内哲博, 田辺龍樹  
第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.
- 92) 尺骨突き上げ症候群に対する尺骨短縮術の治療成績  
後藤英一, 高妻雅和, 有園 剛, 阿久根広宣, 徳久俊雄, 小林邦雄  
第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.
- 93) 股関節中心性脱臼を伴った骨盤骨折の治療経験  
永吉徹郎, 阿久根広宣, 徳久俊雄, 寺原幹雄, 後藤英一, 喜多正孝  
有園 剛, 高妻雅和, 小林邦雄  
第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.
- 94) インターネットホームページを利用した症例検討について  
黒木隆男, 甲斐睦章, 柏木輝行, 黒田 宏, 田島直也  
第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.



95) 当科における下肢開放骨折の発生頻度と治療経過

浪平辰州, 江夏 剛

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

96) 当院における開放骨折 (Gustilo type ⅡB) の治療経験

公文崇詞, 田口 学, 木屋博昭, 弓削孝雄, 藤本 徹, 西里徳重

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

97) 治療に難渋した下腿開放骨折の 1 例

田口 学, 木屋博昭, 弓削孝雄, 藤本 徹, 西里徳重, 公文崇詞  
東 高弘

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

98) 開放骨折における軟部組織の治療

川添浩史, 長鶴義隆, 松岡知己, 坂田勝美

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

99) 開放骨折の治療法の検討—下肢、特に脛骨髄内釘を中心に—

村上恵美, 帖佐悦男, 鳥取部光司, 坂本武郎, 渡邊信二  
黒沢 治, 大倉俊之, 勝寫葉子, 田島直也

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

100) 開放骨折に対する初期治療の現況

有菌 剛, 小林邦雄, 徳久俊雄, 高妻雅和, 阿久根広宣  
喜多正孝, 後藤英一, 永吉徹郎, 寺原幹雄

第 43 回宮崎整形外科懇話会, 2001, 12, 宮崎.

## ◆講演

### 1) スポーツと腰痛

田島直也  
第6回大阪スポーツ障害セミナー, 2001, 2, 大阪.

### 2) ひざ痛・腰痛について

田島直也  
宮崎放送ひざ痛・腰痛シンポジウム, 2001, 2, 宮崎.

### 3) 腰痛の臨床

田島直也  
第16回長崎県中央整形外科懇話会, 2001, 3, 大村.

### 4) Whole-mount in situ hybridization 法について

関本朝久  
第6回GTC User Meeting, 2001, 3, 熊本.

### 5) スポーツによる脊椎障害

田島直也  
第11回慈大整形外科教育研修会, 2001, 6, 東京.

### 6) 成長期とスポーツ

田島直也  
第4回群馬スポーツ医学セミナー, 2001, 7, 前橋.

### 7) 脊椎外科－歴史と課題－

田島直也  
第2回日本脊椎椎髄病学会東日本地区教育研修セミナー, 2001, 7, 仙台.

### 8) 成長期スポーツ障害とメディカルチェック

田島直也  
第一回鳥取スポーツ研究会, 2001, 9, 鳥取.

### 9) 骨粗鬆症－最近の話題から－

田島直也  
西諸医師会・内科医会合同学術講演会, 2001, 9, 小林.

### 10) 医学の立場からみた農大スポーツ～頸、腰のスポーツ外傷、障害について

田島直也  
東京農業大学110周年記念事業「東京農大スポーツ・飛躍のために」, 2001, 10, 東京.

## 編集後記

今回の同門会誌は田島直也教授退官記念事業の一環として発刊致しました。

投稿内容も田島教授との思い出や田島教授にまつわる話を中心になっています。皆さんの投稿には、田島教授の温かくて、律儀で、気配り上手で、それでいて行動的なお人柄が随所に表れています。

特に田島教授がこよなく愛され、切っても切れないテーマである「野球」については歴代のキャプテンに田島教授と野球についての思い出話を綴っていただきました。

20年前、当時、助教授であられた田島先生に私が入局の挨拶をさせていただいたのも大学のグラウンドでした。学生時代空手部だった私は胴着姿で、田島先生は野球のユニフォーム姿でした。彫りの深い精悍な顔で、颯爽とランニングされる姿が印象的でした。

以来、先生には脊椎外科のイロハから教えて頂き、教授になられて私が医局長をさせて頂いた折には医師としての心構えや生き方についても薫陶を受けました。

田島直也先生にはこれまでご指導いただいたことに深く感謝を申し上げます。

いつまでもご健康に留意いただき、さらなるご活躍を心からお祈り申し上げますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2003年4月吉日 福田健二



宮崎医大整形外科学教室

## 同 門 会 誌

発 行 日 平成15年4月

発 行 者 宮崎医科大学整形外科学教室同門会

編集責任者 福 田 健 二

印 刷 所 身体障害者通所授産施設やじろべえ